

くの如く威張ることの出来るのであらう、これ抑も基督の眞意に背き、社會平等の理に背くものである、これを改めて社會を平等にせなければならぬといふ考が盛んになつて、終に十八世紀の佛蘭西の革命となりました、佛蘭西の革命は其の爲めに貴族を殺し其家を焼き、終に國王をまで断頭臺上の露と消えしめたのであります、宗教改革によつて宗教上の不平等は打破せられ、佛蘭西の革命によつて政治上の不平等は打破せられたが、尙ほ一つ遺つてをるのは經濟上の不平等、貧富の懸隔です、富める者は益々富み、貧者はますます貧になります、それも近世まではそう甚しくはなかつたが、近世になつて諸種の機械が發明せられるやうになりました、これまで手仕事をしてをつたのに比べて、労働者を少くして同一以上の生産高を得ることが出来る、従て費用が減ぜられる、即ちこれまで一日に千個出来たものなれば、機械を利用すれば、千五百も二千も出来るそれにこれまでは手仕事であつたから上手下手があつたが、機械であるからさしたる功拙はなく、婦女子にても出来るやうになる、婦女子の賃銀は勿論男子より廉いのであるから、資本家はますます費用を減じて多くの生産を得るやうになる、さうなると一面に資本家は費用が減じて生産を多くするのであるから、だん／＼金持になるが労働者の人数が減じて賃銀が廉くな

るからだん／＼貧乏するといふやうになつて、富はますます／＼富み、貧はますます／＼貧となる、これ果して平等といふことが出来るであらうか、こゝに於て其平均を行はむとする社會主義は、先づ佛蘭西に於て唱導せられたのである、これはペプーと申します、此人は完全なる社會は皆な平等なものでなければならぬといふのが立論の根本です、次でサンシモンといふ人が新基督教といふ趣意で、社會主義を唱へ、當時の基督教僧侶が徒づらに権力者に阿諛してをるのを慨き、貧民を度外にするのは、基督の眞意ではないとて、宗教的に社會平等の主義を唱へました、ブローダンといふ人も矢張佛蘭西ですが、随分奇矯を言を出して社會主義を唱へたので、財産を私有するのは盜奪を行ふも同じことである、財産は社會の共有すべきもので一人の私有すべきものでない、それに財産を私有してをるのは盜賊であるなどといふてをります、英吉利の社會主義は多く基督教の立脚地によつたので、基督教は人民の精神を保護すると共に其身体をも救済するの責任があるものぢやと申しまして、基督教の道理によつて社會主義を唱へました、これはチャールズ、キングスレーやフレデリック、モリスなどといふ人が主なる唱導者であります、亞米利加のも矢張基督の眞意によつてをるので、ブリスといふ人は労働は神の勸めたまふところ

である、労働に反対するものは神に反対するものであるなどといふて盛んに労働者の味方となつてをります、此基督教の社會主義は餘程平穩ですが、佛蘭西のラメーなどは人民を政府の羈絆から脱せしめて神の支配の下に置いて自由を得せしめねばならぬなどといひ出しまして餘程過激です、併しこれらはまだよろしいが、もう一步を進めて無政府黨となると随分極端なことをいふてをる、其の甚しいのは政府や國王といふものはわれわれの土地を勝手に奪取したものであるこれを倒すのは人民の権利であるといふので伊太利の無政府黨、露西亞の虛無黨は此議論で、露西亞のパークニンは革命は破壊の外に爲べき急務なしといふて、如何様なる手段を以てても現社會を破壊すれば、それでよいのである、といひ、獨逸のヴォンモストは暗殺は社會進歩の最良手段であるなどといふて、過激極る議論を持てをるこれらは實に平等主義の極端に走つたのであります、しかも、彼等はたゞ議論のみではありませぬ、此主義を實行するのを目的としてをるので、露西亞の虛無黨は書を皇帝アレキサンドルに贈つたが、それは王にして速かに其政權を人民に還付せざれば非常手段を行はむといふ脅迫状です、彼等は唯だ脅迫状を送つた丈ぢやありません、露帝アレキサンドル二世は實に彼等の爲めに一千八百八十一年非命の最期を遂げられたの

てあります、これより先き一千八百七十一年には獨逸のウイヘルム皇帝を狙撃して負傷せしめたことがあり、それから一千八百九十四年には佛蘭西の大統領カルノー氏が暗殺せられ、全九十七年には西班牙の宰相カノーブイス氏、全九十八年には埃太利皇后陛下、一千九百〇二年には亞米利加の大統領マッキンレー氏が暗殺せられました、これ皆な無政府黨の仕事であるのであります、基督教の平等主義も斯く極端に走つては實に怖るべきものと云はねばなりません、この虛無黨や無政府の主義は、もと社會主義から出たのであります、一千八百七十二年の社會黨萬國聯合大會といふもの、開かれたときから社會黨と無政府黨とは分れたので、それから以來幾年月を経て今日では社會主義は餘程平和なものになつてをります、中には随分亂暴な議論をいふ人がないとは云はれませぬ、併し其の中で尤も穩建で且つ實行せられ易いのは獨逸の國家社會主義です、これは宗教道徳を以て基礎としたので、ヒスマーは、國中の貧民及び無告の民は國家の當然救助すべきものであるといひ、國家の政策を以て社會平等の主義を行ひ、社會各階級の間に友愛の情を深からしめて苟くも不正不法と看做すべきことは悉くこれを排斥し正理公道を以て立つてゆくのて、無政府黨のやうに眼中政府なく國家のないのではなし、國家の政策によつて

社會平等の實を行はふとするのでワグネルなどの盛んに唱へてをるところでありま
す、これは空想でなく實行せらるゝのでありますから獨逸ではヒスマークがこれを
行ひ、茶吉利西でもチャーチルやチャンパーレンが此主義を實行したといふことで
す、

(備考) これらの参照は修證義の説教をするときにも御参照下されたい、即ち發願利
生の章に於て尤も必要であるのであります、

(戒文略解) 三歸三聚淨戒は略します

第一不殺生戒 戒文に云く生命殺されば佛種增長す、佛の惠命を續くべし、生命を
殺す莫れ、

生死といふことがもと／＼不二であるのであるから生といふたからとて死の前後を
いふのではない、そこで殺といふことも不殺といふこともないのであるが、しばら
く言語に着して不殺といふたので、一切衆生は必らず生命のあるのは平等であるか
らこれを殺すといふことは宇宙の生々の理に背くのである、一切衆生悉有佛性ぢや、
小さな虫でも佛性はある、佛性あるものを殺すのは佛種を斷ずるのぢや、それでか
くの如き戒文があるのぢや、生命殺さずんば佛種は增長する道理ではないか、

第二 不偷盜戒

三輪清淨にして希望する所なく、諸佛同道なるものなり、

三輪といふのは身と口と意ぢや、此三つが清らかで、少しも妄念妄想が起らず、別
に何かほしとも思はねば何を貪る心もない、己に此心がなく清淨であれば、偷盜な
どといふことの出来やう等がない、偷盜といふものは三輪清淨でないから起るので
ある、此三輪清淨なれば、これ三世諸佛と同道なるものである、

第三 不貪婬戒

心鏡如々にして解脱門開く

心の鏡は清淨潔白、これに無明煩惱の曇りが起つてくるのであるが、今は戒法によ
つて此煩惱の曇りがなくなつたのであるから心鏡如々どカワリナク何のさわりもない
解脱の門が開けたので、此時己に男女差別の相はない、男女差別の相を浪絶したと
ころ、どうして貪婬の心が起らうぞ、

第四 不妄語戒

法輪本より轉じて缺ることなく、剩すことなし、甘露一たび潤ひて實を得、眞を
得、

根本法輪は常に轉じて三世十方に亘り少しも變りはない、増しもせねば減りもせぬ、即ち變易といふものがない、變易といふものがないから虚偽もなければ妄語もない、根本法輪は不二眞實のものぢや身口意の三つ相應じて一つとなり、少しも虚妄はない、此甘露の法門に潤ふて何の所に妄語かあらうぞ、

第五 不酤酒戒

未だ將來せざるに侵さしむること勿れ、正に是れ大明なり

酒は禍の門ぢや、これを將ち來らねば犯すものはない、これを賣るのは禍を他人に嫁するので自ら犯し人をして犯さしむることとなる、此酒によつての禍といふのは昏愚に陥るので、これさへなければ本具の明智は皎々としてをる、

第六 不說過戒

佛法の中に於て同道、同法、同證、同行なり、說過せしむること莫れ、亂道せしむること莫れ、

これは四衆の弟子は皆な同道同行のあるのであるから、他の過を説くなかれといふので、血を含むで他に吐いて、其口の汚れぬやうにといふのはむづかしい、他の過を説くのは自らの口を汚すのであるから愚痴をよこして道を亂るやうなことがあつ

てはならぬぞ、

第七 不自讚毀他戒

乃佛乃祖、盡空を證し、大地を證し、或は大身を現じ、空に内外なく、或は諸身を現じ地に寸土なし

佛の所證の道理は盡天地、盡乾坤である、我地の別も、彼此の差もない、悉くこれ平等一如、大地と一枚、法界に遍滿してをるじや、何が故に自他の境を置いて自だの他だの内だの外だのといはうや、此時自の讚すべきもなく他の毀るべきもない、ソゴテ空に内外なく、地にすむなしとは云はれてある、

第八 不慳法財戒

一句一偈は萬功萬德、一法一證は諸佛諸祖、從來、會て惜まざるなり、諸佛諸祖は從來會て惜まず、萬功萬德、從來會て惜まぬ、布施は宇宙の當體である一句一偈も一法一證も皆なこれ佛身諸身、虚空と共に涯なきものぞ、この道理かわからば諸財を慳むことは出來ない、無盡の天地、一諸の捨つべきはなく、一句の抛つべきはない、何にもかも悉くこれ佛身法身ぢや、

第九 不瞋恚戒

退にあらざ、進にあらざ、實にあらざ、虚にあらざ、光明雲海あり、莊嚴雲海あり、

これは進退虚實が瞋恚の起因であるから、非進非退のとき何の瞋恚があり、非虚非實の時、何の怨怒がある、すべて瞋恚といふものは境によつて起るもので、境に進退虚實あるからそれにつれて起るのちやが、其境もこれ如々不変なりと知る時、たゞこれ進退虚實なし、進退虚實のないところに瞋恚はなく智恵の光明徳の莊嚴のみである、

第十 不謗三寶戒

現身演法は世間の津梁、徳、薩婆若海に歸す、稱量すべからず、頂戴奉持すべし先書の第六の不説過戒は同學の中で過を説くことをいふたのちやが、今は一般に通じて不謗三寶の道理を示されたのちや、現身とあるのは、佛なり、演法といふのは法を指した、この佛法は、われ／＼の生死苦海を渡すのであるから世間の津梁になつて、法性真如の海(即ち薩婆若海)に入るのであるから有難く奉持せねばならぬといふこと、津梁となるのは僧寶でこれが三寶のちや、

(和歌)

けふひける駒ののりこそかしこけれ佛のみちに逢坂の關

源信僧都

世を治め民をたすくる心こそやかて御法のまことなりけれ

中務卿

法の道は深きか上に深くして佛の身をも法身といふ

慈 鏡

もちのうくるほとはかた／＼かくれとも一つさとのむくひありけり全

とにかくに人の心になふ身はもとの都を出るなりけり

全

雲も皆なむなしと説くに空晴れて月はかりこそすみまさりけれ

俊 成

いつくにもあり明の月はさやけきにいと朝日のひかりそふらん

俊 頼

十悪をならべて置てながむれば貪慾殿のせいの高さよ

(道 歌)

米蒔いて米かはゆれは善に善惡には惡の報ふとぞしれ

全

よく思はるゝ人、

細川三齋

こゝろよく人ごといはずいんきんに慈悲ある人に遠慮ある人

憎まるゝ人

うそをつき人事咄ししし出口高慢ありて自慢する人

酒も水、流も酒となるぞかしたゞ情あれ君が言の葉

島津日新

道にたゞ身をば捨んと思ひけれかならず天のたすけあるべし

(道歌)

堪忍のに、じのあしたはひよりにて心のやみも晴るゝ雲きり
 行き通ふ牛の車の音きけば涙と共に身をぞ養ふ、
 足ることを知る堪忍が正直の正札付と五兩けんわれ、
 口なしの花にも恥ちよ行々子
 喰ひつくと子供をおとす牡丹哉
 負ふた子の教へて淺しかきつはた
 さみたれやせめて明るき傘の下
 散り梅あまりもろさについてみる
 苗で先づいひふくめけり菊つくり
 蝶々や花の上下あらそはず
 鳥の巢や藤もくはへて引て見る
 花ふまぬ足は短かしかへる雁
 畑打の拜んでもどる夕日かな
 かへり矢の匂ふてくるや梅の花
 正直なもの故狂ふ柳かな

麥 林 双 飛 水 超 波 野 坡 帶 河 千 山 左 枝 一 紅 涼 條 白 棠 庭

吹けくゝと花に欲なしいかのほり

素因

佛降誕會說教

第一席

天にも地にも吾ばかり尊きものはなきぞかし、三界の皆苦は我れ當に之れを安んぜん、
 たゞ今讀み上げましたる賛題は、本師釋迦牟尼佛御降誕の時の御言でござります、幸
 ひ今日は四月八日て御誕生の吉辰でござりまするて、當山に於ても例年の如く法要を
 嚴修せられ、愚僧に參つて法話をいたせといふこととてござるによつて、釋迦牟尼佛の
 御話をいたさうと思ふのでござる、さて釋迦牟尼佛の御生れなされたのは、中印度の
 迦毘羅國といふ國で父君の御名をストダナ譯して淨飯大王といふのである、さて
 釋迦牟尼佛御誕生以前の印度の國は、早や已に文明開化の花盛り殊に學問の道開けて、
 科學哲學などといふ今日の學問は皆な此印度から出て西洋にも東洋にも渡つたといふ
 のであるからなか／＼今の印度のやうなものではない、宗教には五千年の昔より草陀

といふ世間で最も古い經文がござりまして、ウパニシャットの哲學などと申して此章
 陀經は高尚なる議論を以て論ぜられ、波羅門教と申す宗教は此經を基礎としていろい
 ろに分派し、終に九十五種の外道と申しまするほど多く相成りまして迷ひ迷へる人々
 はいづれをそれと定めかねてをりました、其時に此淨飯王の御子に釋迦牟尼佛が御生
 れなされ、迷ひ狂へる衆生を救ひ、無明の暗を御破り下されたのでござります、抑も
 人間の如來は人間に同じてはござるが、聖人とか君子とかいふ御方々は其御生れなさ
 る時から通常人に異つてをるところがある、それは耶蘇クリストでも、回教の教主
 マホメットでも皆なさうであるが、況して三界の大導師たる釋迦牟尼佛でござります
 るから、もとより通常人とは同すくありませぬ、釋迦牟尼佛の御母は麻耶夫人と申し
 上げたが、此夫人夢に六光の星輝やき六牙の白象胎内に入ると見たまひて孕みたまひけ
 れば、父の王は直ちにこれを占はしめたまひしに、これは吉瑞、生れたまはん御子
 こそ尊ぶけれと申しましたものでござるから、喜びて待ちたまひし其中に、昨日と過
 ぎ、今日と暮しつ、やがて陽春四月、春とはいへど熱帶國のこととありますから、綠
 濃かに吹く風も、あのづかなる夏景色に、摩耶夫人は藍思尼といふ花園をそとろ歩き
 してをられました時、俄に産の氣づいて、無憂樹といふ木の下で、花摘む御手の右胎

より生れ出られたのが、後に釋迦牟尼佛と御成り遊ばす、御方で三十二相は十種好いとも氣高き御子で、御聲さへも美はしく七歩ばかり進みたまひて、天上天下唯我獨尊、三界皆苦我今安之、て天にも地にもわれればかり尊きものはなきぞかし。三界の皆苦は我れこれを安んぜんとの仰せてござります。ナント立派な宣言ではござりませぬか、併し天上天下唯我獨尊なのを、釋迦牟尼佛ばかりと思ふてはなりませぬぞわれ。其も亦た天上天下唯我獨尊でござりまするぞ、否な此世の中にありとあらゆるもの、皆これ天上天下唯我獨尊でござるぞ、かう申せばおかしなことを申すやうぢやが、此世の中には何一つ同じきものはござりませぬ、それは似たものはあらうが、同じものはない、五つ揃つた茶碗でも皆な同じものではない、これを宇宙差別の當相と申すので、此點からはありとあらゆるもの悉く獨立で別々ぢや、別々であるから天上天下唯我獨尊、茶碗は茶碗で唯我獨尊土瓶は土瓶で唯我獨尊、水入れは水入れて唯我獨尊ぢやが、其本體の土たることは一つじや、其土の上からいへば、水入の我もなければ土瓶の我もなく、茶碗の我もない、これを平等の見方といふのぢや、此點からいへば宇宙間何一つとして別々なものはない、其本體は一つとなるのぢや、さればこそ釋迦牟尼佛一たび御生れ下されて其德教化にとつてわれ々さま々々のものが、皆な等しく煩惱の

迷ひをさましてまことの悟を開くことが出来るのである、丁度セツナといふ人が生れたればこそ、われ々は等く天然痘の憂もなく、種痘によつて此惡病を防ぐことが出来て安心のせらるゝやうなもの、今はたゞに此肉體の病氣防ぐばかりではない、心中の病まで悉く拭ひ清め下さる釋迦牟尼佛の御誕生であるから三界の衆生はこれによつて無明長夜の夢さめて、佛同體の身となる事が出来るのである、何んと喜ばしいことではござらぬか、さてそれは後の話してあるが、御生れなされた御子を悉達太子と名けられ蝶よ花よと御いつくしみに相成り、國中の人民は此御誕生を喜びて、さま々の御祝ひをいたしましたので、滿城春海の如く、迦毘羅の城中は歡びの聲を以て満たされました、唯だ一人阿私陀と申す仙人は太子の御姿を拜して涙を流して泣いてをりまする、國王はこれを怪まれました、此兒は何か不吉なことがあるかと仰せられますると、仙人は頭を振りまして、否なく左様のことのござるのではござりませぬ、此御兒こそ一切衆生を救ひたまふ大聖人でござります、私も年が若うござりましたならば、御成人を待つて世にも貴き御說法を聞くことが出来ませうに、早や年寄りまして其詮もなく、思はず涙を流しましたと申し上げますると、國王は聽き答められ、さては此の兒は我が世を繼ぎて一國の主とはならぬかといはれますると、仙人

「さればてござりまする此御兒よも國王とはなりたまはじ、御年三十を越えたまはぬに
必らず出家したまふべしと答へましたので國王は面白からず、思はれました、さて太
子の御成長なされるにつけ學問も勝れ御力もすぐれたまへば、國王はどうかして此子を
一國の主として隣國を切り従へ、印度の大王とならしめむと思召じまして、太子をし
て遊世出家せしめぬやうにと心をつけたまひ、御年十七にならせたまひし時、五天竺
第一の美人と噂されたる耶輸陀羅姫といふのを納れて御妃とせられました、姫は同族
の摩訶耶摩と申すもの、御女で、春花の姿、秋月の粧、噂に違はぬ美人でありますか
ら、太子も殊の外に御寵愛になりました、終に羅喉羅といふ一子まで設けさせられま
した、國王はかく睦しきを見て、これにては、よも出家の心も起すまじと大に喜び、
かくてこそ迦毘羅の城は萬々歳ぞ、此上は樂しき上に樂しませ、此世には少しの苦痛
もなきものぞと知らしめねばならぬと、美しき宮殿を營ませ、四季の氣節の折々に、
咲く花さへも麗はしき庭の面には百鳥の時を得顔に鳴き囀る殊に枯れたる木は世の無
常を示し、老へるものは人の盛衰を示すとてかゝるものを斥けたまひ、三千の宮女は
嬌態を凝らして太子の傍に侍すといふ有様でありましたが、太子はこれをも樂しとは
思ひたまはず、一人靜かに樂むべからざるに樂み、笑ふべからざることに笑ふ人生の

状態を考へておいてになりました、かくて城外に出てたまひて老病死の苦を見たまひ
しより、人生を思ひ、一切衆生を救はんと思し召したまふ御心はいと深く、青春夢の如
く、徒らに若きを頼むものを御覽じては、朝の紅顔も寄る年波の是非もなく、やがて
は頭に霜をいただし、手に杖を力と頼まねばならぬ老の身となることをも知らず、遊
び狂へるよと悲み、そのみかへ人の身には病といふものありて、いつ如何なる時に
襲ひくるやも知れぬに笑ひ悲むるものゝうたてく、やがて化縁つきぬれば死すべきも
のをうか／＼と花に狂へる蝶々の如く徒らに日をおくることを哀れなれ、如何にもして
これを脱んで一切衆生の迷ひの夢を覺し、悟の光を放たしめん此上は出家學道するに
は如かじ、と御考へになつて父の王の御心には背けども、早や世繼をも設けたればわ
れ出家するとも、此國の不利にはあらじ、ましてわれの出家はわが身の爲めにはあら
ず、一切衆生を救はんとの爲めなれば、父上とてもよも咎めたまはじと、夜も闌け人
も靜まりし其時に、愛らしき子にも、いとしき妻にも別れたまひ一切衆生の苦を抜か
んか其爲めに、王位をも棄て、四海に等しき富をも棄て、花の如き宮女をも棄て、た
い一人獨歩といへる愛馬に跨り車區を呼びて密かに此城を抜け出でられました、何ん
と有難いことではござらぬか、誰れしも望む榮華を棄て、たゞ一切衆生を憐れと思召

したまふこの御出家でござりまするぞ、これが少しでも慾のあるものゝ出来ること
でありませうか、やがて日の漸く出るの頃にアノマといふ河の畔に出らなました、こ
ゝて愛馬と車匿とに別れを告げ、太子として召したまひし飾の品をぬぎすて、三衣一
鉢の沙門の姿とならせうれて山又山にわけ入られました、車匿は別れを惜み舞歩も悲
み嘶きました、太子はたゞ一切衆生を救はんとの思召の外、何もなく、身につくもの
もふり棄て、これより難行若行せらるゝことゝなつたのであります、凡そ人といふ
ものは貧賤に生れきて奮發心の出るもので、富貴にあつては兎角隋弱に流るゝもので
ありまするに、今、釋迦牟尼佛は國王の御位にあるべき御身で此御奮發でござりまする、
これを食しき大工の子たるクリストや、寡婦の厄介にならねばならなかつたマホメツ
トやなそと比べますると、私は此點だけでも、釋尊の人格の高いことを見とめること
が出来ます、自ら足らぬところのあるものゝ奮發ではござりませぬ、足るところのもの
を棄て、唯だ一切衆生を憐れと思召したまふのあまりの御出家であります、此御出家
ありたればこそわれゝは佛祖單傳の正法によつて何の修行もなく佛同躰の御位に入
ることが出来るのであります、釋迦牟尼佛の生れられた其時は、われゝも亦佛とな
ることの出来るやうになつた日であります、

第二席

釋迦牟尼佛、明星を見て悟道して曰く、我と大地と有情と同時に成道す、
大恩教主釋迦牟尼佛は、一切衆生の迷ふべからざるに迷ひ、泣くべからざるに泣き、
悲むべからざるに悲み、笑ふべからざるに笑ふのを憐れと思し召したまふて、國王の
位も、四海に等しきの財産も、愛らしき妻も、いとしき子も、花の如き宮殿も、三千
の宮女をもふりすて、山に入りて御修行下され、初ては阿羅邏迦蘭の二大仙に就て道
を問はれたが、此二仙人は共に波羅門教の學者でありまするが、到底太子を教ゆるこ
とが出来ませぬ、そこで太子は此上は無師獨學とて獨りで悟るより外はないと御覺悟
になつて尼連禪河のほとりに御修行なされましたのが六年といふことです、其間の苦
行と申すものは實に甚しいもので、一日わづかに一粒の米を食ひたまふ位で、さしも
に氣高き太子の御姿も肉落ち骨瘦せて枯木の如く終に疲れて地に倒れらるゝに至りま
した、これが一國の太子たる御方の御修行でござりまするぞ、これは抑も誰の爲めて
ござりませう、われゝ衆生の迷ひを救はんとの御志でござりまするぞ、太子は此時
までは苦行をしてをられたが、苦行は決してまことの道ではない、健全なる精神は健

全なる身體にこそあれと尼連禪河に入りて其身を清め、牧女、難陀、波羅の二人の供養を受けて佛陀伽耶といふ所の深林に入り、菩提樹の下に端坐して正覺を成せずば此坐を去らずとて、心を靜かにして思惟觀法に餘念がござりませなんだ、かく心を靜めて坐つてござる間には、いろ／＼の妄想が起つて太子の御修行をさまたげむとしたのに相違ござりませぬ、其狀は丁度八萬四千の惡魔が各々利器を持てせめたてるやうなもので、これを切り従へるのは、なか／＼大抵のことではありませぬ、王陽明も申しました通り山中の賊は討つべく、心中の賊は討つべからず、山の中の強盜は力の強いものはよく討つことか出來ても、此の心の中の賊はなか／＼に討つことが出來ませぬ、太子端座六年の御修行は此心中の賊を討ち平げ、八萬四千の惡魔とも悉く降伏して臘月八日の曉天、明星のピカリと光ると共に蓮華の花の開くか如く豁然として大悟せられました、有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛と仰せられた、贊題として讀み上げましたのは太祖様の傳光錄にある御言によつたので、我と大地と有情と同時に成佛です、其意味は同じことで、つまり釋迦牟尼佛か語を聞かれたと共に有情も非情も草木も國土も皆な佛となつたと仰せられたので、ゼンナが種痘の法を發明した時には、誰れも彼れも天然痘の災を免れたと見てもよいのと同じことで、釋迦牟尼佛正覺

を成したまひて、其御眼から見たまへば、一切平等、われも他も悉く佛性として佛同昧の性があるのであるから、即心即佛ぢや、此即心即佛の道理はまた實に釋迦牟尼佛によつて教られたのである、太祖様はこの道理をわかりやすく御示になつて、「釋迦牟尼佛において成道のおもひをなすことなし、大地有情の外に釋迦牟尼佛をみることもなかれ、たとひ山河大地森羅萬象森々たりといへども、ことごとくこれ摺疊の眼睛裏をまぬかれず、汝等諸人また嬰疊の眼睛裏に立せり、たゞ立せるのみにあらず云々」と仰せられてある、此時佛と衆生と山河も大地も悉く平等一如である、この道理をよくみわけるのが宗門の肝要ぢやが、今はそれほどまでに入り込むて御話するのではないが、たい佛と我等と何の變りもないやうになることが出來るのであるといふことを思ふてをればよい、毎度申す通り、釋迦あみだつくりかゆれば、下駄あしだ、かわればかわるものにぞありける」ぢや、變ればかわるが本は一つぢや、此本の一つであるといふことを忘れてはなりませぬぞ、さて釋迦牟尼佛はかく正覺を成したまひしよりこゝに華嚴の妙理を味はれて、それから此寶座を去りて波歛奈國の鹿野苑といふ所に於て阿含經を説かれました、其説の新しく其示したまふ所の道理の高きに感じて多くの外道は來て佛弟子となり、舍利佛、目捷連等も參り申して迦蘭陀長者といふのは竹林精舍

を建て、佛にさし上げました、此時には早や一千二百五十の御弟子となり、此時に付法藏の第二祖たる摩訶迦葉も参つて御弟子になり、舍衛國の波斯匿王の大臣須達長者に祇陀太子と共に精舎を建て、これを奉施しました、これが有名な祇園精舎でありますかくの如く御弟子はます／＼ふえて到る所を御教化あそばし迦毘羅國に歸りては、有縁のものを致して提婆、難陀、阿那律、阿難等も御弟子となりまして、それより夜に病に應じて藥を與へ、萬民を教化せられ、機に随つて法を説き賢愚も／＼佛法の妙を味ふことが出来ました、さてかく横説堅説と説きたまふこと五十年、其間の説教を宗旨によつていろ／＼に別ちまするが、我が宗門に於ては文字教相の上にも重きを置くのでなく、釋迦牟尼佛の御正旨を傳へるといふのが主眼でござりまする、さて釋迦牟尼佛の御正旨はといへば、四十余年、一字不説で、一ことも御説きにはなつてをらぬといふので、これは佛法のまことの道理といふものは口でいほうとはいはれるものでない心から心に傳へるといふのでござりまするで、釋迦牟尼佛が靈鷲山に於て御説法の時、金色の花を世尊に献しました、世尊は説法の座に上りたまふて一座を見わたしたと此花を拈ねつてござるばかりで、一言の御説法もござりませぬ、雖れも何のことだかわかりませなんだが一人摩訶迦葉ばかりはニコリと笑ひました、そこ

で世尊は「吾に正法眼藏、涅槃如心、實相無相、微妙法門あり、汝摩訶迦葉に付囑すと仰せられたので、吾にまことの佛法がある汝に傳へるぞよとの仰せてある、釋尊花を拈じて迦葉微笑す、これ心を以て心に傳へたので、外のものゝ窺ひ知ることの出来るものではない、それが迦葉より阿難、阿難より商那和修とだん／＼と次第して我が高祖大師にいたり、さらに今日と相成つたので、これぞ我が宗の肝要、佛法の正旨であります、我れ／＼は此佛々祖々の傳へられたる法を聞き又此佛々祖々傳へられたる戒を受けて釋迦牟尼佛と同じ位に入るとが出来るのであります、これ抑も誰の御蔭でござりませう、これ偏に釋迦牟尼佛の御恩と思はねばなりませぬ、さて如何にして此恩に報ひませう、高祖大師の仰せらるゝには「此報謝は餘外の法は中るべからず、但日々の行持報謝の正道なるべし」てわれ／＼の日々の行ひ、そのまゝに御恩報謝をなさねばならぬのであります、さて如何にして行ふてゆくかといふについて一つの譬があります、それはわれ／＼相互の住むてをる世の中は一つの旅人宿のやうなものでわれ／＼相互はこの旅人宿に泊まつてをるやうなものである、さてわれ／＼が此世の中に於て人の爲め世の中の爲めに働くといふのは、外のことではない此旅人宿に宿料を拂ふやうなものぢやそれであるからわれ／＼が此宿料を怠らぬやうに日々働いてゆく

といふことが人の人たる道で、此の道を盡くすのが佛々祖々の御恩徳に報いてゆく道である、これを怠るものがあつたならば、それこそ無錢飲食ぢや食ひにげぢや、これと思ふてゆくがよい、釋迦牟尼佛はわれ／＼に代つて多くの御茶代を置いてゆかれたのぢや、われ／＼は其蔭で可憐な扱ひをうけてをるのぢやから、せめて宿料だけを滞ほらさぬやうにしてゆかねばなりませぬぞ、下手の長談義、御退屈であたらうが、これさまことの心得でござるぞ、さて御釋迦様は御年八十にならせられて二月十五日、迦提河の岸なる沙羅双樹の間に於て早朝より夜半まで懇々として最後の法を説きたまひ、終に涅槃の雲に入られました、其法は支那に亘り朝鮮に入り我が日本に來り、今や歐米諸國にも行はるゝことゝなつて佛日は世界を照らしてをります、其中心となつてをるのは此日本で其中の佛法の總府と云はれるのは我が宗門であります、

(注意) 二席にかけてありますが、それを一席に御纏めになつてもない、それから又初めの降誕會の時、後の成道會の時に用ひられてもよい、又涅槃會の時にも應用することが出来ます、それに修證義末席の説教に應用してもよい、これを通常の説教に使ふときには釋尊の王位等を棄てられた無我なること端座して心中の賊を討たれた勇猛なること、五十年横説堅説して少しも怠りたまはざりしこと等皆な人間の

模範となるのである、機に随ては明星に大悟せられたことゝ若くは枯花微笑のことをくわしくして外を略してもよろしいが、又類によつてはこれらを畧して他を精しくした方がよいともさもある、それは聽者次第があるから注意してもらひたい、(參照) 釋尊の傳記に就てはいろ／＼其年代に就てもいろ／＼あるが、普通の説は

降誕 周昭王廿六年甲寅四月八日

成道 周穆王四年癸未十二月八日

促笑 周穆王五十三年壬申二月十五日

さて又修業の年代に就てもいろ／＼の説がある、本文には十二年とした、これは尤も普通の説で、十九出家三十成道です、然るに佛本行集經、普曜經、佛所行讚などには廿九出家三十五成道として六年の御修行とし、姉崎正治といふ人は印度宗教史考に於て修行は一年、廿九出家三十成道といふてあります、

佛の老病死を感ぜられたのは城外出遊の時としてをるのが普通で、王城の東門から老、西門から病、南門から死、北門から出られたときに道を聞かれたといふので一々從者との問答かありますが畧しました、

太子御出家の時、妃耶輸陀羅姫は夢をござらんになつて一は月地に墮つ、二は齒牙落

つ、三は右臂を失する三大夢てこれを太子に語られ、妾の身に力の落つることなきやと言はれると太子は月猶天にあり、齒又落ちず臂も尙ほ在り心を安んぜよと眠らして出家せられたことがある、これよりは女小供の多い時にはかへて汚した方がよからう、

(金言并に和歌)

大無量壽經に曰く、如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀す、世に出興する所以は道教を光闡して群萌を拯ひ惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり、十地經に曰く、衆生の心中に金剛の佛性あり、猶ほ日輪の如し、増一阿含經に曰く、一切の法は唯だこれ一法なり、何等をか一法と爲す、心是れ一法なり、心を離れて一切に法なし、

涅槃經に曰く、身は人身といへども心は佛心と同す、維摩經に曰く、夫れ法を説く者、説なく示なし、其法を聴くもの聞なく得なし、へば幻師の幻師の爲めに法を説くが如し、全經に曰く、佛一音を以て法を演説するに衆生類々隨ふて各解を得る、

涅槃

慶範

いかなればこよひの月の小夜中に照らしてもはてず入りしなるらん世を照らす月かくれにし小夜中にははれや暗にみなまとひけん

灌佛

伊勢 慈鎮

うれしくも卯月の七日あくる日や此世にほとけ生れたまひし
さき初し卯月のけふを數ふれば盛り久しき法の花ふさ

三身

(未詳)

世の中はみな佛なりおしなへていつれのものともわくそはかなき

華嚴

後鳥羽院

いつる朝日、山の高根をてらせとも行衛もしらぬ谷の埋木

阿含

慈鎮

鳴く鹿の園の中なる小薄のしはしなひきし風そ悲しき

方等

同

説く佛ひとつ御法を聴く人のさとる心はあのがさまく

般若

雲もみなむなしと説くに空晴れて月はかりこそすみまさりけれ

をしなへて御法の花のささしより佛の身とは皆ななりにけり

達磨忌說教

第一席

我は本東土に来る、法を傳へて迷情を救ふ、一華五葉を開き、結果自然に成る
今日は禪宗の總開山とも申すべき達磨大師の命日であるから當山に於ても例年の如く
法要をつとめらるゝとなつたので、其因みに一席の御話をいたすことゝ相成つたの
であるが、抑も禪宗と申すは五家七宗とさまざまに分れて日本に渡つてをるのだけ
も、臨濟曹洞黃檗の三宗、その中臨濟は又十派にも分れてをるのであるが其總本家は
といへば、達磨大師であるのであるから凡そ禪宗各派ともに此達磨大師から一華五葉
に開いたので、此達磨大師が初めて印度の佛法、殊に釋迦牟尼佛の正しき佛法の心髓
を支那に傳へられ、それが又日本に傳はつたので、總本家は此達磨大師ぢやが、何に
も禪宗は達磨に初まつたのではない、釋迦牟尼佛の佛法の極意は、到底文字や言舌で
いふことの出来るものぢやない、文字や言舌は月を標すの指で、月さへ知れれば其指

に用はない、それに其指にくつついてありたの、かいたのと論じてをるのが各宗であるが、此文字によらぬ佛法の極意は教外別傳不立文字の我が宗旨の特色で、是は釋迦牟尼佛が、第二祖摩訶迦葉に心を以て心に傳へられ、迦葉はそれを阿難に阿難はこれを商那和修に、商那和修はこれを優婆鞠多にといふやうに皆な心から心に傳へた二十七代目が般若多羅尊者と申し上げた御方で、此方の御弟子が今御話し申す達磨大師ぢや、此達磨大師といふ御方は南印度の香至國の國王の御子であつた、香至國といふのは今のボンチャップの地方であるといふことぢや、さて此國王はいたつて佛法の信者であつて、般若多羅尊者に歸依してござつた、其御子が三人あつて、皆なく佛法御信仰で、此般若多羅尊者の教を受けられたが、或る日のこと尊者は三人の御子の智慧を試めさうとて、一つの寶珠を持って、世の中に此玉よりも貴いものがあるかと問はれた、此珠は明皎々たる非常に立派な珠でありますから、皆なくそれは結構な珠でござる世の中にこれに過ぎたものはござりませぬと仰しやつたが、獨り此達磨大師ばかりは、イヤイヤこれはたゞ世の中の寶である、これを最上とすることは出来ぬ、寶の中で一番貴いのは法の寶である、この珠の光りは立派だが世間の光である、これを最上とすることは出来ぬ、光の中で一番明らかなのは智慧の光である、この珠は明

かであるが心の明なものには及ばぬと仰せられた、成る程其通りて如何に立派なものといふども佛法の寶より大切なものはない、如何に明かであるとして心の明のが第一であり、智慧の光りか一番であります、それを此世の中の寶を大切がつて智慧の光や心の珠を忘れるのが尋常のことでありまするに御幼年の身を以て此言を出された達磨大師は、さすがに栴檀は二葉より香はしいと云はねばなりませぬ、般若多羅尊者はこれを聽て深く感ぜられこれぞまことに佛々祖々傳へられたる法を嗣ぐべきものぞと思はれました、それから心を凝めてこれを報導せられ、大師も亦出精せられてをりましたが、無常の風は王侯貴人を避けず幾千代までと謳はれし香至王は崩御せられましたから王子達は涙に暮れてござる中に大師は尊者か許を訪れて、父の菩提も弔ひたく自ら衆生濟度の務めもつくしたければ、出家したしと御望みになりました、尊者も快くこれを許し其室中に於て座禪をせられ、且つ廣く座禪の妙理を説き聞かされました、もとより伶俐なる大師のこととござりまするから、こゝで直に無上の智慧を發かれました、此時までは御幼名の菩提多羅と申上げましたが、此時に尊者は、今汝、諸法に通達することが出来た、よろしく達磨と名を改むるがよいといはれて、それから菩提達磨と申し上るのである、達磨といふのは天竺の語の通大といふ意味があるといふことである

ます、さてかく名を改めて此國にとゞまり御教化あそばされたが、尊者は支那の國に佛法が傳つては居るが、まだ此佛々祖々相傳へたる如來の正法が傳はつてをらぬのを悲み、大師にわが滅後支那に赴きて教化せよと仰せられました、かくて尊者の滅後大師は其仰を受けて支那に渡らうとせられますと、此國の國王の異見といふ御方は深く大師に歸依してござるのであるから、どうか此國に駐まつて教化してくれよと望まれましたが師匠の遺囑もあることであるからとて、南天竺を船出して漫々たる大海を一葉の船に身を托し、支那の國へと渡られました、時は梁の武帝の大通元年でござります、此梁の武帝といふ御方が、非常の佛教信者で、達磨大師の参られたのを喜び、これを迎へられました、大師がそれに参られますと武帝との間にいろ／＼な問答がありました、武帝は未だまことの佛法を知らぬのでありますから、達磨大師の御説明を解することが出来ませぬ、却てこれを怪んだ位でありますから、大師もこれまでもと御觀じになつて江を渡りて嵩山の少林寺といふに御入りになつて、終日面壁をして坐禪をしてをられた、人々はこれを怪んで壁觀波羅門ぢや、あれはまことの佛法ではない、外道ぢやなどと仰さしてをりましたが、大師はそんなことに御かまひなく坐禪をしてをられたが、九年の間であります、世の中にまことの佛法のないときは、

まことの佛法を却て邪法ぢやなどといひふらすもので、此事に就て一つの譬喩がある、これは高祖様の御撰述になつた、普勸坐禪義の中にも仰せられてあることぢやが、昔、支那に葉公といふ人があつた、此人がいたつて龍が好きで、座敷の飾、床の置物、着物の模様、何もかも龍づくしてありますから、眞の龍かこれを知つて、あれほどにこれを愛してくれるのは有難い、それにおれが行つて遇つたならば、非常に喜ぶことであらう、平生愛してくれた禮かた／＼鳥渡御目にかゝらうと、葉公の坐敷「ニロコリ」と頭を出した、スルト葉公は驚いて目をまわして氣絶をしてしまつたといふことがあつた、それでは龍を愛したのではなく、龍に似たやうな形を愛したので、まことの龍を見て目をまわすやうでは何にもならない、達磨大師と梁武帝との出遇ひも、そんなもので武帝は佛法に歸依してをつたといふのではあるが、未だまことの佛法を知らぬものであるから、此達磨大師には吃驚せずにはをられなかつたのでありませう、此問答は餘程むづかしいからテョット御話してはわからぬが、其中の一つはかういふのである、それは武帝はこれまで佛に歸依して、堂塔を建てたり、僧尼に供養したりしたのであるから、これにはドンナ功德があるかと問ふた、スルト大師は直に無功德と喝破したのぢや、これには武帝も驚いた、これまでの僧侶は、これにはどれ位の功德が

ある、あれにはどれ程の功德があると説きたてたのに、功德はないといふたのでありますから、葉公が眞龍に驚いた位ではありますまい、それにこれまでは佛法といへばむつかしいもの、御經は大切なものと其御經の一句くんに就てやかましく議論してをつた時に、不立文字教外別傳直指人心見性成佛とやつて御經の文字によるのではない、文字の外、別に傳はつてをる佛々祖々の大法、別段むつかしいものではない、直に人心を指すて、吾々も互の惜いの、可愛のといふてをる、心そのまゝに其本性をさへ見はしさへすれば、それが佛ぢやといふのであるから、これは佛法ではないなぞといひ出したに違ひない、大師は機まだ熟せぬのであると九年の面壁をせられたのである、さあ佛々祖々の大法は如何に成りゆくであらう、終に嵩山の中に隠れてしまふであらうか、抑も如何様にして今日のやうに盛んに花を開くやうになつたのであらう、席を改めて御話しすることしやう。

第二席

諸佛無上の妙道は曠劫精勤して行ひ難きを能く行ひ、忍ぶべからざるを而も忍ぶ、豈に小徳小智輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲し徒に勤苦を勞せんや、

さて前席に引續いて達磨大師の御話をいたすのであるが、寶玉は包めども其光は外に見はれるの喩へて達磨大師少林に面壁してござつた九年の其間に徳光は四隣に輝きました、そこで其徳を嫉みて毒殺をしやうとしたものもあり、石を抛て大師の齒を缺いたものもありましたが、機縁はやうやく熟して参りまして、惠可大師が此山に訪ねて御出になることになりました、此惠可大師と申上ぐるのは武牢といふ所の人で、姓は姬氏で、父の名を寂と申します、母親が異光室を照らすに感じて孕まれましたから幼名を神光といひました都に出で、いろく學問を修め、多くの書物をも讀まれましたが、どうも孔子や老子の教では満足が出来ぬからとて、龍門の香山寶靜禪師といふのに就て出家し、普く大小の二乗を學び、般若經を讀んで大に悟る所があり、それより晝夜安座して佛法を味ふてをられましたが、達磨大師が天竺より此國に來り、少林寺と面壁してござるといふことを聞き、これまことに我が師なり、往て教を請はざるべからずと、嵩山の少林寺に参られました、時に大通二年の臘月九日、雪はしきりに降りしきりまする其中を、少林寺に至られました、大師は中に入ること許されませぬ、それで門前に立つてをられました、日暮れて雪ますますはげしく、寒さは寒き其中に立つてをられまする腰のあたりまで、雪が降り積みましたが、惠可は昔しの

人か道を求むるには骨を敲き髓を取り血を刺して餓を凌がれたといふことである、これほどのこと何かあらむと、耐えてをられましたが、スルト達磨大師は終宵雪の中に立つてをるのを御覧になつて、「汝久しく雪中に立ち何事をか求むると云はれた、これはお前が雪の中に立つてをるのは何の求むるところかあるのぢやといふことです、惠可は答へて惟た願くは和尚慈悲を以て甘露門を開て廣く群品を度したまへと云はれました、どうか御慈悲に佛祖正傳の妙道の甘露の如きを説き聞かせ下されといふのであります、大師は其時に賛題に讀上げたる通りに、諸佛無上の妙道は永い間精勤して行ひ難きを行ひ、忍び難きを忍びてもなか／＼出来難いものだ、決して小徳小智輕心慢心と、小さな智慧や、小さな道徳で入ることの出来るものでもなければ、輕んじ侮るやうな心があつて入り得べきではないといふて、また願みられませぬ、まことに其通りて佛法の極意といふものは決して輕はずみな心で知ることの出来るものではありませぬ、理學士の何某といふ人と文學士の某といふ人が白山の南隱和尚の所へ行つて佛法の極意を聞きたいといふと、和尚、茶碗の中に一ぱい茶をついて、さあこの上「茶を入れてごらんさい」と云はれた、それで二人は和尚とても此上には入りませぬといふと、さうぢや、おまへ方の心には理學や文學が一ぱいになつてをるから、佛法を入

れやうと思ふてはいらぬ、まあそんなものをすつかり棄て、出直しておいてと云はれたといふ話がある小才覺や輕慢な心でまことの佛法の得らるべきではない、それを戒められたのが此達磨大師の御教訓です、それを聴いて惠可大師は、涙を流して其御教訓の有難きに感じ、道を求むるの心止め難く、ひそかに刀をとりて左の臂を斷せられました、何んと熱心なものではありませぬか、達磨大師これを見て、諸佛最初に道を求む、法の爲めに形を忘る、汝今臂を吾が前に斷つ求むること亦可なることありと仰せられて、終に室に入れて御教化になりました、此外に道副、道育、總持といふ三人の御弟子もありまして佛祖正傳の大法、支那に於て盛んになりました、此惠可大師が支那に於ての二祖、それから三祖が僧璨と申し、四祖が道信、五祖が弘忍、弘忍の御弟子に神秀と惠能の二人あつたが、惠能の方は頓悟で、神秀の方は漸次に修行してゆくのであります、惠能の方を南頓と申しますからこれは惠能が南の方に居られたからで、神秀は北の方に居つて教化したから北漸と申します、かく二つに分れたが惠能の方が正統で、それがだん／＼傳はつて達磨大師より二十四代目、御釋迦様より五十代目が天童如淨禪師で、其御弟子が我が高祖承陽大師道元大和尚で、高祖は更らに達磨大師が天竺より支那へ傳へられたやうに、これを日本に傳へられたればこそ、

われらは凡夫の此身そのまゝに佛祖の位に入ることの出来る無上甚深微妙の法を聞くことが出来るのでござりまするから、これ偏に達磨大師の御力でありまたこれを代々持ち傳へ下された御祖師方の御恩であると思はねばなりません、此御恩の大なるを思ふにつけ、われは日々の行ひを等閑にせず、此佛々祖々の御恩に報ひ奉り、假りにも輕心慢心を起さぬやうにせねばなりません、さて達磨大師は後魏の太和十九年十月五日に逝去あそばしたので其年の十二月二十八日に熊耳山といふ所に葬りましたといふことです、大師の死後のことに就てはいろ／＼の御話がありますが、それはさまざまでも必要でもなく又日本へ參られて聖德太子と片岡山で遇はれたといふ口碑もあります、それは確かな説とは申されませぬ、唐の代宗皇帝は達磨に圓覺大師の號を贈せられました、達磨大師の法を傳へられた御慈悲の心、惠可大師の御熱心なることを思ひ、一日も此御恩報謝を忘れてはなりません、

(注意) 達磨大師の傳を話をするに眼目となるのは其般若多羅尊者との問答で、般若多羅尊者問ふて曰く諸物の中何物か無相なる、師曰く不起無相なり、祖曰く諸物の中に於て何物か最も高き師曰く人我最も高し、祖曰く諸物の中に於て何物か最も大なる、師曰く法性最も大なり、

の一節と、梁の武帝に會せられた時、武帝が如何なるかこれ聖諦の第一義、磨曰く廓然無聖、帝いふ朕に對するものは誰ぞ、磨曰く不識、帝領悟せずとの二公案にあるのぢやが、それは普通人に解し難いから略したが、聽衆の機に應じては此公案を提唱するもよい、殊に不識の公案は、本宗の益翁宗禪師の提唱を聞いて上杉謙信が大に感じて不識庵と名けたといふ因縁のあるのであるから面白からうと思ふ、さて一般の聽衆に對しては前掲の修證義第五章の行持報恩の各節說教を參酌して達磨大師の高恩を感ぜしむるがよい、

(參照) 傳灯録に曰く、尊者般若多羅曰く、汝諸法に於て已に通量することを得たり、夫れ達磨は通大の義なり、宜く達磨と名くべし、因て號を菩提達磨と改む、師即ち尊者に告げて曰く、我既に法を得たり、當に何の國に往て佛事を作さむ、願くは開示を垂れ玉へ、尊者曰く汝法を得といへども、未だ遠く遊ぶべからず、且らく南天竺に止て、吾が滅后六十七載を待て、當に震旦に往て大法藥を設け直に上根を接すべし」とこれが達磨西來の因縁であります、

正宗記に曰く、廣州の刺史蕭昂迎へ禮して武帝に表聞す、奏を覽、使を遣はして迎へ詩はしむ、次の年十月一日(普通二年)十月一日建康に至り、帝問て曰く朕即位より

以來寺を造り經を寫し僧を度す、勝て記すべからず、何の功德かある、祖の曰く此れ但人天小果影の形に隨ふ如く有とはいへども實に有らず、帝曰く如何かこれ眞の功德、祖曰く淨智妙圓、自ら空寂、とこの大要を本文中に引用したのである、傳燈錄に曰く、已に西の方天竺に返らんとし門人に命じて曰く、時將に至れり、汝等蓋んぞ得る所を言はざる、時に門人道副對て曰く、我が所見の如んば文字を執せず文字を離れず、而して道用と爲す、師曰く汝、吾が皮を得たり尼總持曰く我今ま解する所は慶喜して阿閃佛國を見るが如し、一見更に再見せず、師曰く汝吾が肉を得たり、道育曰く四大本と空なり五陰有にあらざ、而して我が見る處は一法なし、師曰く汝吾が骨を得たり、最後に惠可、禮拜して位に依て立つ、師曰く汝吾が髓を得たり、とこれを達磨の皮肉骨髓といひます、達磨を毒殺しやうとしたのは菩提流支光統律師等だといふこととて、太祖様の傳光錄にあります、

(和歌) 高祖様が北條時頼に示された十首

教外別傳

あらか磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくべきのりならばこそ

道元禪師

不立文字

いひ捨てしその言の葉の外なれば筆にも跡をとれめざりけり

同

正法眼藏

波も引き風もつなかね捨小舟月こそ夜半のさかりなりけれ

同

涅槃妙心

いつもたゝ我かふる里の花なれば色もかはらす過し春かな

同

本來面目

春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪さえて涼しかりけり

同

即心即佛

あし鳥やかもめともまた見えわかぬ立る波間に浮き沈むかな

同

應無所住心百生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道はわすれさりけり

同

父母所生身即證大覺位

尋ね入る深山の奥のさともと我か住みなれし都なりける

同

盡十方界眞實人跡

同

世の中にまことの人やなかるらんかぎりも見えぬ大空の色

靈雲見桃花

同

春風にはころびにけり桃の花枝葉にのこるうたがひもなし

高祖御遠忌説教

第一席

實にこれ國の運なり、人のさひはひなり、恰かも西天二十八祖達磨大師はじめ唐土に入るが如し、これ唐土の初祖とす、師また此の如し、大宋國五十一祖なりといへども今は日本の元祖なり云々

今日は高祖承陽大師佛性傳東國師の御征忌に相當いたしまするので當山に於ても例年の如く盛なる法要を營まれて愚僧にも一坐の説教をとのことでござりまするでまことに結構な御因縁であると存じまして、出席いたしたわけとござる、唯今讀み上げましたのは太祖様が高祖大師を御譽めなされた御言で、其次ぎには「抑もく正師大宋にみち宗風天下にあまねくとも、師もし眞師にあふて參徹せずんば今日いかんか祖師の正法眼藏を開明することならん」と仰せられてある、まことに日本の國の達磨大師とも申し奉るのは此承陽大師でござりまする、されば先帝孝明天皇も佛性傳東國師と謚せ

られた其時の御勅書にも「玄化偏く覆ひ、芳聲遠く播り、九重想を延き、萬國誠を契る、門相賁に降り、武夫勇を銷す、盛なる哉妙機、大なる哉道徳」ともあります、われは實にこの高祖大師の單傳せられたる佛法に遇ひ奉るもので、大師もし單傳せられなかつたからは、われらは、太祖様の仰せられた如く、祖師の正法眼藏に遇ふことは出来ないのでござります、さて此の高祖大師様の御家は、長くも人皇六十二代村上天皇の御未裔で、天皇の御子具平親王より七代目が久我内大臣通親公で、此通親公の御子が、即ち我が高祖承陽大師であります、かゝる立派な家に生れたまひ、しかも皇室と密接の御關係ある大師が何故に御出家に相成つたかと申すにこれ皆な一切衆生を憐れと思召したまひ、まことの道を教へんとの大御心であります、御母は松殿關白太政大臣藤原基房公の御女で、御生れに相成りましたのは土御門院の正治二年の正月の二日であります、もとより凡人と異なる高祖様のことでござりますから、茲に申します蛇は一寸にして人を呑むて、御幼少の時から凡人と異り四歳にして李暉と申す人の詩を御讀みになり、七歳の御時には毛詩左傳を讀まれたといふこととてあります、毛詩や左傳と申せば、今日では中學校以上の力がなければ讀むことの出来な物であります、御年八歳になられました時に上つ方にも如何ともしがたきは無常の風

で、御母君は病の爲めに犯されて返らぬ旅に出られました、大師は恩愛の涙とどめられず、終霄御枕邊に坐してをられました、この時こそ大師御發心の因縁とも申べきで、焼きたる香の立ちては消え立ちては消ゆるのを見玉ひまして、世の中の無常なること此烟に異ならず、朝の紅顔は夕の白骨となり見るまに空しき世の中を感じて、かゝる世に何事に執着してはかなき榮花を夢むべきとて出家の心を起したまひ、佛の道に入らんとて九歳の御時には俱舍論と申す佛敎の書を初め内典外典に涉りて御修行をせられ如何にかして悲しむべからざるに悲み、笑ふべからざるに笑ふ一切衆生の迷を破らんとて十三歳の春の夜に私かに都を忍び出て御母の兄にて比叡山におはす真觀法眼の許に到り玉ひて、切に出家のことを願ひ玉りましたが、法眼は驚きて松殿が關白の御甥にて才智過ぐれたまひしと聞く此人が出家なぞとは思ひもよらずとて止められたが、大師の御心は固くして變させたまはねば法眼をいろに感じ入りて終に請ふがまゝに比叡山なる横川の楞嚴院の千光房といふに上らせられました、かくて翌年四月九日に天台座主公圓僧正に就て得度したまひ、それより佛道修行に怠りなく、夜を日に繼て御勉強あらせられましたが、こゝに一つの御不審が出来ました、それはいづれの御經文にも本來本法性、天然自性身と申してわれ／＼お互は生れながらに法性の身

で、少しも汚れはないとあるに、それならば何ぞ三世の諸佛を初め奉り、われ／＼まで、發心修行せねばならぬかとの御疑ひでござります、生れながらの佛なら修行も何もいらぬ筈ぢやに何せに修行をせねばならぬかといふので、叡山の學者達に問はれたが誰れも答へるものがない、その頃三井寺の公胤僧正といふ聖は非常の物知りであるといふことを御聞きになつて、これを尋ねて御いてになり、この義を問はれると、僧正は頭を傾けて、それは一應にては答へ難し、建仁寺の榮西禪師に問ひたまへと教へてくれられました、それで大師は直に京都へ出て榮西禪師に質さるゝことになりました、此榮西禪師といふのは、大師に先ちて唐土に渡り教外別傳の禪を傳へられた御方であるので大師の此御方に逢ひなされるのは、丁度龍の雨に遇ふやうなものであります、禪師は大師の問ひに對して狸奴白牯あることを知る、三世の諸佛あることを知らずと答へられた、これが抑も大師の佛祖正傳の佛法を此國に傳へられる好因縁とも申すべきで此御答へに感じて禪師に就て御修行なさるゝことになりましたが、惜い哉、禪師は入寂に相成りまして其御弟子の明全和尚に隨つていよく禪宗の修行を勵まれ、それより今は我が日本に師とすべきものもなしとて貞應二年の春二月、明全和尚と共に京都を立ち出で、博多の津より船出して大宋國へ渡られました、これが大宋の嘉定

十六年四月の初めであります、それより諸寺諸山に歴遊し法を問ひ道を修め無際了涙禪師といふに就てしばし參禪して許を得られたが、自ら不満足に思召されて尙ほも諸寺諸山をたづねられました、大師の師と仰ぎたまふほどの人もござりませぬから大師は大に力を落させられて如何はせんと思召してござる所へ老進といふ僧が、今の天童山の住持なる如淨禪師といふは天下に双びなき大善智識なればこれに見えて法を聞きたまへと勧めたから喜び勇みて禪師を訪ねられました此天童の如淨禪師と申すは、釋尊より五十代目の法を嗣ぎたまひし御方で、大師が參られるとこれを見て此人こそ我が法を嗣ぐべき器ぞと仰せられ、左右の人々に昨夜夢に洞山悟本大師を迎ふると見しに、今日日本の僧來る、恐らくは大師の再來ならん、我が宗は此人によりて大に隆ならんと云ふて歡はれました、大師はこゝにありて日夜に御修行あらせられ、御病氣中も少しも怠りたまはず、よし病氣に罹りて死するとも佛法の爲めなれば少しも悔まじ、病氣なりとて怠りて此まゝに死なば、いつの世にか此身を度し衆生を濟ふべきとて御勉強あらせられたといふことであります、何んと有難い御心掛ではござりませぬか、われ／＼の今日佛祖正傳の大法を聞くことの出來るのはひとへに大師御苦學の賜であります、かゝる苦學は其功を奏して或る夜、坐禪しつゝ睡れる僧あるを禪師の痛く呵

りたまふを其傍に聞きたまひて無上菩提の悟を開かれました、併し此一段の因縁はなかく、高尚で御話しいたすとも出来ませぬが、御話しいたしたからとて御解りになることでもござりませぬから、略してをきますがこゝで大師は禪師から釋迦牟尼佛より相傳したる大戒を受けて諸佛と同じ位に入られました、大師の受けられたるこの戒法が即ちわれ／＼も互の容易に受けることの出来る戒法で凡夫のわれ／＼が直に佛の御位に入る甚深微妙の法門であります、これが寶慶の元年九月の十八日であります、それから大師は尙ほも參禪に力を盡し諸方を行脚をいたされ全三年の冬に、如淨禪師に別れを告げ本國へ歸られました、其歸へらるゝ時に禪師は高祖様に芙蓉道楷禪師より傳はつた袈裟や寶鏡三昧、五位顯訣といふ書物并に禪師自贊の畫像と與へ、ねんごろに日本に此法を傳ふべきゆえよしをさとされて、高祖は盛みも足りて日本に御歸りになりました、これが我が國へ佛祖正傳の佛法の入つた初めと申してもよいのであります、前にも申した通り太祖國師はこのことを「師もし眞師にあふて參徹せずんば、今日いかんが祖師の正法眼藏を開明することあらん」であります、正法に遇ふわれらは實に幸福なこととあります、これを思へば日々には御恩報酬を忘れてはならぬのでござります。

第二席

サテ高祖様はこれより京都に上られて建仁寺にしばし錫を止められました、後に深草の安養院といふに閑居して夜雨靜かに法を味ひたまひ、未だ御化導はござりませぬが、桃李ものいはされども、其ほとりに蹊を爲すの譬喩の通り來りて道を問ふ人多く、終に興聖寺をおこしてこゝに坐禪の法を弘めたまひ、永平寺の二代となり高祖様の法を嗣ぎたまひし孤雲懷殊和尚もこの時より高祖様の門に入り、淨土宗の良忠上人や、眞宗の宗祖親鸞上人、日蓮宗の宗祖日蓮上人も臨濟宗の由良の法灯國師も來りて法を問はれたといふことであります、此日蓮上人と親鸞上人の事は正しくはわかりませぬが、世には高祖様のとを佛法房の上人として其名高く相成られ、中には宗旨を更へて本宗に歸依する人も出来、殊に後鳥羽天皇の皇子にあらせらるゝ寒巖義尹禪師の如きも初めは天台の僧侶となつてをられたのでありますが、高祖様に御歸依に相成り、後に法を三代目の徹通禪師に嗣がれて肥後の大慈寺の開山となられました、抑も高祖様の唱へられまする佛法はこれまでの御祈禱ばかりいたしまするやうなのではなく、眞の佛法で、我が宗から申せば高祖様以前にはまだ眞の佛法我が國に傳はらなかつたのであ

ると見ても差支はないのでござります、高祖様はこのまことの佛法を傳へんが爲めに、いろ／＼の御著述がござります、さて唯だ廻屈の上で仰せらるゝばかりではなく、日々の行持そのまゝに佛作佛行にならねばならぬといふので、御弟子達の起居動作も規則正しくする爲めに、いろ／＼の規則を御定めになりました、いたつて規則をやかましく仰せられたてあります、世の中の人は禪宗といへば、亂暴なものやうに思ひまするが、禪宗といふ者は外の宗よりも却て規則がやかましいので、殊に我曹洞宗には雪隠に行くにも、食事をするにも、皆なそれ／＼の規則があり、佛法を外に求めずして日々の行持そのまゝに佛法に随つてゆくといふのが、我が宗の特色であります、さればわれ／＼が高祖様の御恩徳に報ゆるといふも外の道はない、たゞ日々の行持そのまゝに報謝の行とならねばならぬ、修證義にも仰せらるゝ通り此報謝は餘外の法に當るべからず日々の行持その報謝の正道なるべしである、さてこれらのことに就て高祖大師の御著述は學道用心集、辨道法、典座教訓、衆寮清規、衆寮清規等、殊に正法眼藏九十五卷はわが宗門の皮肉骨髓で高祖様口づからの御法話を承はるやうな心地がいたします、これらが多くは此興聖寺にての御撰述でござります、明治二年の十二月十七日といふに波多野出雲守義重の招きに應じて御說法がござりましたが、此義

重は深く大師に歸依し奉り其知行所の内なる越前吉田郡の山奥に清閑なる古寺あるを再興してこれを寄付したき由を申されました、大師は深草の都近く問ひ來る人の多きに濟度の方便はさるとながら、早や說法に赴きたまひし大家の數も百余ヶ所、菩薩戒を授けたまひし弟子も二千餘人の多きに及びました、縁ある人々より山林園地を寄附せんと申出るものも十二個所もござりましたが、今義重の越前國といふことを懐しけれ、國は變れど、天童の如淨禪師も越の御方なりしとて喜びたまひて、翌年七月十六日といふに深草を立たせたまひて、越前松岡の奥なる吉峯といふに着かせたまひ、それより禪師峯といふに着せたまひて山靜かに境淨し、義重は左金吾覺念といへる人と共に寛元二年には傘松のほとりに一字を建立し、これを傘松峯大佛寺と名けたまひしが、寛元四年の六月に寺を永平寺と改め山をば寶治二年に吉祥山と改められました、これが今の永平寺であります、このやうなことを一々申してをりましたは、御話が長くなりまして略しますが、桃李言はざるも其ほとりに蹊をなすと前にも申した通り、此山奥にも高祖のごさるばかりに、參詣聞法の道俗ひきまきらず、京都よりも鎌倉よりもはるばると來る人があつてなか／＼盛んなことであつたといふことであります、寶治元年には鎌倉の執權北條時頼の頻りに招請いたしまするで、鎌倉に御下向相

成りまして、時頼はじめ老若男女に菩薩戒を授けられました。高祖様はこの老若男女に授けられました戒こそ、佛祖正傳の戒法で、われ／＼の直に諸佛の位に入ることの出来る出家在家を通じての戒であります。さて大師はこゝにて北條時頼が如何にして天下を治めませうかと聞きましたによつて、大師は何の忌み憚るところもなく天下を治むるには、政權を天皇に還し奉るより外はなしと仰せられました。さすがの時頼も大師の御見識に服するの外はなかつたといふことであります。この時にいろ／＼な御教訓がありました。毎度申します、荒磯の浪もよせぬ高岩にかきもつくべきのりならばこそ」とて教外別傳の旨を傳へられ「世の中は何にたとへん水鳥のはしふる露にやどる月影」とよみて諸行無常の理を教へたまひしも此時であります。時頼はいなく大師に歸依して寺を建て、とゞまらんことを請ひましたが止りたまはず、またも星月夜ひかりかゞやく鎌倉をあとにみて、越前の山奥へと歸られました。時頼はこれを惜みて、さればせめてもの志にとて永平寺に二千石の寺領を寄進せんとて申し出ましたのを斥けたまひ、剩さへ御弟子の立明首座といふが其寄進状を跨り顔に持ち來りしとて、かゝる穢らはしき心にては、我が弟子にもいたしがたしとて永平寺を追ひ出し常に此御弟子が座臥せし床までも切りとりて棄てさせられたといふことであります。

す、この一事でも如何に大師の御志の高いかを見る事が出来ます。高祖様は決して名聞などを御好みになつた御方ではござりませぬ、また佛法を利用しやうなどと御考へになつた御方ではありませぬ、各宗の祖師方の中には政治家らしいのがあり、軍人らしいのがあり、俗人らしいのがあります。高祖様は實に宗教家らしいと申すより外はない御方で、たゞ佛法の爲めに佛法を修するといふのが高祖大師の御精神であります。これが高祖様の尤も有難いところでもあります。さてかゝる世にも類ひまれない御高徳は、九重の雲深きとこにまで聞えまして、建長元年には後醍醐天皇より勅使を以て紫の衣を下し賜はりました。大師は幾度もこれを辭されたが許し玉はぬので、終にこれを受けて「永平谷淺しといへども、勅命重きと重々、却て猿鶴に笑はれん、紫衣の一老翁」といふ詩を賦して勅答あらせられたといふことであります。却て猿鶴に笑はれん紫衣の一老翁何んと氣高い御心ではござりませぬか、高祖様の御示寂あらせられましたのは、どなたも御存じの通り八月二十八日で即ち今日が其御遠忌に當るのでござります。私共は此高祖大師の御傳へ下された佛々祖々の傳持したまひし法を聞き戒を受くる事が出来ればこそこの汚れたる凡夫そのまゝに佛の御位に入ることが出来るのであります。高祖が若し御傳へ下されなかつたならば、吾等は永く

名字の佛法に迷ふてをつたかも知れぬのであります、即ち始めに申した通り、高祖様は日本の元祖であります、あゝ我等は何たる幸ひでありませう、此日本の國に生れたればこそ、此高祖大師に遇ひ奉るので、高祖大師に遭ひ奉りたればこそ、此まことの佛法を聞き奉ることが出来たのであります、われらは「願生し日本國土し來たのでまことに高祖様の娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや」と仰せられた如く見承陽大師を喜ばねばなりませぬ、

(注意) これは御傳記の大意を説いたばかりであります、御遺忌の説教には修證義の第四章の中の句を賛題として高祖の御因縁を入れて御説きになつた方がよいと思ひます、御傳記だけの説教といたしましても、あまり不思議な話を入れるのは當節柄、適當でないやうですから略した方がよいのです、併し凡俗を秀てた御方のことであるからとて凡俗と異なる不思議などは申されませぬ、即ち唐土御漫遊中に虎に出遇ひたまいて其持ちたまひし柱杖が龍になつた虎が驚き逃げたといふ話などは、寧ろ高祖様の高徳に服して虎が逃れたといふ方が事實らしく且つ全くさうであらうと思ひますが、杖が龍になつたなどは云はぬ方がよろしいかと思ひます、御出立の前夜碧嵐集を寫したまひし時白衣の神人が助筆して其墨色も二つにわかれてをる

これぞ白山権現の冥助であるとか、羅漢供養の時に十六羅漢がありくと松の上に現れたといふやうなとは、信仰の深いものでないとわからぬから云はぬがよい、

(参照) 御遺忌などの説教には高祖大師の御歌などを賛題としてもよい、其御遺詠とも見るべき

草の葉に門出せる身の木の目山雲に路ある心地こそすれ
若くは

五十四年、照第一天、打箇物跳、觸破大千、嘆、渾身無着活陷黃泉

などもよろしいし、達磨の説教の終りに掲げた十首の和歌の中を引用してもよい、

高祖大師の人格としてわれくの忘れてならぬのは、

- (一) 高祖大師は佛法の爲めに佛法を修せられたといふ事、
- (二) 高祖大師は佛法統一的の御説法であるといふ事、
- (三) 高祖大師は名聞をいたく排斥せられたといふ事、
- (四) 高祖大師の御説法が通俗的であつたといふ事等であります、

總持 開祖 御教義説教

第一席

教外別傳

正法眼藏、兩人に付囑なし、たゞ迦葉一人、如來の付囑をうる、また阿難二十年給士して、正法を傳持す、然ればこの宗、教外別傳あることをしりぬべし。サテ、此度は我が太祖弘徳圓明國師の法身舍利である所のお聖語に就て、お話しをいたしたい考えてありますが、實は、その以前に、太祖の御聖傳に就いて、篤と御承知を願ひたいのでござりますけれども、こゝでは已むを得ず略して置きますが、只一言申上げて置きたいのは、今日、吾れくゝ互が、十三宗三十餘派といふやうに、數多い宗派の中でも、三千年の昔より嫡々相承して、一つの水を鉢から鉢へ移すやうに、少しも變らずに傳はつて來た佛祖の正宗、佛法の總府と云はるゝ此の曹洞宗と云ふ尊い御宗旨の御教導に遇ふて安心立命をいたすことの出來ましたのは、是れ實に高祖承

陽大師太祖弘徳圓明國師のお兩方の御洪恩であると感謝せねばならぬことであります。が、近來、高祖承陽大師の御恩徳に就ては、大分御承知なされたお方もありますやうでありますけれども、太祖の御恩徳に就ては、未だ御承知の無いお方があるやうに見受けましますのは、誠に残念に存じます、すべて或る事柄を始める即ち創業と申すことは、却々困難で特に此の宗教などと申す精神的のことに就ては一層の困難であります。所が、折角とその困難を排して創業はいたしても、此を受け繼いで大成して行く所の人が無くては、如何に立派な事業も後世までに存在しまして世間を利益することは出來ませんが、此の受け繼いで大成する即ち守成と云ふことが、また非常に困難なもので、世間の事柄でも、辛苦艱難をして漸く巨萬の富をいたしても、此を受け繼いで行く子や孫が、放蕩であつたならば、所謂長者二代無して、如何に巨萬の富であつても、ホンの一時の電光に過ぎないのであります、そこで大事業を成就するには二代三代四代位までが肝心で、彼の千田の松枝を鳴らさず、徳川の流よどみなき三百年の泰平も、家康公の注意周到なる礎の上に築かれたからではありますけれども、また聰明なる三代將軍家光公の守成の功も妙からぬので、私は家康公の偉いことを思ふごとくに、家光公の偉いことをも聯想するのですが、此れは決して、私の僻見でありませぬ、多少徳

川幕府の成立を調べたる所の人は皆な申すこととあります、今、此の曹洞宗といふも宗旨で申せば、高祖承陽大師は家康公で、大祖弘徳圓明國師は家光公であらうかと思ひます、曹洞宗と云ふも宗旨を八宗九宗の荆棘を切り開いて植えつけられましたのは、高祖承陽大師であります、それを能く養ひ育て、美しい花を開かせたのは、太祖弘徳圓明國師でありますから、お互は、父の御恩を思ふと母の御恩を思ひ出し、母の御恩を思ふと父の御恩を思ひ出すやうに、高祖の御恩を感謝すると全時に太祖の御恩を感謝し、太祖の御恩を感謝すると全時に高祖の御恩を感謝せなければなりません、かやうに、お互が片時も忘るべからざる所の太祖の御示の一節が前に拜讀いたしたのですが、一言で申せば、教外別傳と云ふこととあります、

一昨、世の中に調法便利なものは何であるかといへば、先づ文字であらうと思ひます、此の文字がありますから、數千年の後に生れた吾れ／＼が數千年以前の人の思想に接することが出来ます、私共が希臘のアリストートルとか、支那の孔子とか云ふ人の思想に接して非常な利益を受くることが出来ますのは、何んのお蔭でありますか、實に此の文字のお蔭ではありますまいか、若しも此の世の中に文字が無つたならば、前代に如何に偉い人が出て、有益なことを云はれても、その人に遇はない以上は、その益を得

ること出来ませぬ、また、私共が非常に偉い事を考へ出して世界を動すやうな説を吐いても、三十年や五十年で泯滅するので、百年も千年もの後世に傳ふことは出来ませぬ、こんなものとすれば世の中は實に寂しいものではありませぬか、してみると、此文字といふものは便利でまた尊いものと云はねばなりません、しかし、猶ほ能く／＼考へてみれば、文字は便利に相違ない、尊いに相違ないが、言語の通りに寫すといふとは容易なことではありませぬ、如何に豪い文章家でも、幾分か實際のことよりも派手に誇張するとか、幾分か筆を廻はしきらぬので九分九厘までは寫しても、一厘の所が現はしきらぬとかで、言語の通りに一分一厘も違はぬやうには決して出来ませぬ、此れからみると、文字もまた言語には及ばぬ所があるやうです、言語と云へば平生あまりに慣れて居りまするので、別段に尊いものとも思ひませんが、此の言語の發達の程度によつて文明の程度も解ると云ふ位で野蠻の時代には言語は至極簡短なもので、文明に進むに随つて、複雑になり巧妙になるのであります、公治長のやうに鳥の言語は聞くことが出来なくとも、せめては世界各国人の言語を聞き分ることが出来るならば、餘程便利でまた面白いことでありませう、所が、更に一層深く考へてみますと、此の調法なる言語も、充分に精神を發表することに於ては、随分遺憾な點があります、

殊に心では左程にも思はないことが、少し語路の調子や、また時と場合によつては、誤解を招くことがあるので、丸い卵も切りやうで四角ものも言ひやうで角が立つと、實際にかやうな事が随分あるので、遂には途方も無い結果を招くのです、この通りに次第に考えてみれば、精神そのまゝを寫すには文字でも言語でも充分なとは到底出来ないので、こゝになると只、精神を以て精神を照すより外はあるまいと思ひます、一旦、精神を以て精神を照し、所謂肝膽相照した上ならば、話しの調子が好からうが悪るからうが、手紙の文句が巧みてあらうが拙からうが、少しも關する所は無い、言語の先きや手紙の上で、時には面白半分は反對なことを云つても書いても誤解を招くやうなことは無い、是れは申すまでも無い、甲は乙の心を知り乙は甲の心を知つた上のことであるからです、

今、これを佛教の上にとつてみまするも、矢張その通りで、佛のお説きなさつた經論の文字と云ふものは、如何に巧みに書いてあるとしても到底佛の御精神の全体を寫したと云ふことは出来無い、また經論に載つてある教義そのものも充分御精神を寫したと云ふことは出来無い點もあり、そこで只經論の文字や教義にばかり拘泥して居ると、同一佛法の中に非常に衝突する點やら矛盾する點が無いとは云へないので、こ

んな場合には何れが佛の御眞意であるやら方角に迷ふことになるのです、然るにその反對に經論も經論だが、先づ第一着に佛の御精神を見抜いて、それから經論を拜覽すると、矛盾するやうな點やら衝突するやうに思はれる所に、却つて佛の大慈悲を認めて研究しながらますます信念を養ふことが出来ます、教内と云ふも教外と云ふも、また禪宗の特色と云ふもこの點でありまして、教内と云ふ方の宗旨は、經論を柱と頼み杖と頼んで佛の御精神を窺ふとするのであるし、教外と云ふ方の禪宗では、短刀直入に佛の御精神を窺つて、それから經論を拜覽して自分も利益を得他人にも利益を與ふるの、實は教内教外の名目が穩當では無い位で、經論を離れて經論を活用し、文字を離れて文字を活用するのが、此の禪宗の特色で、一言に云へば、佛の御精神そのまゝを傳へて來たのです、

さて、しからは、此れは誰が傳へて來たのであるかと申せば、太祖のお聖語の通り、「正法眼藏兩人に付囑なし、たゞ迦葉一人、如來の付囑を得る」で、數多い佛のお弟子の中で、文字や言語の先きでは無い、心と心と相照したのは迦葉尊者一人でありましたので、佛が金波羅華を拈ぜらるゝと、迦葉尊者が破顔微笑せられるゝ、八萬の大衆は茫然として居ると云ふ状態、實にその人にあらずんば見え、その人にあらずんば

聞えずといふのはこゝてありませう、それから、次第に矢張迦葉阿難商那和修と西天四七束土二三、面授面稟して遂に高祖承陽大師に至り更らに四代目に太祖弘徳圓明國師に至り、それからその法孫に多くの偉い方が出られて、日本國中津々浦々の吾れくまで、その教導に預ることが出来たのは、同じ佛教とは申すものゝ、此の曹洞宗の信者の歡ばねばならぬことであります、
これで、大略、太祖の御洪恩も、幸に曹洞宗の信者の難有ことも御了解になりましたてありませうが、猶ほ、此れを我が國の國體の上に就てみますると、申すまでも無いが世界萬國、國も多いのに、千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苦のむすまで、長へに變りなき萬世一系の皇室を戴いて居るのは吾れくの境遇でありませんか、此の國に生れて此の宗門の安心を得ると云ふのは實に難値難遇と申すより外はありませぬ、何卒、此の點を能くく合點せられて、老いも若きも貧しきも富めるも限なき皇室の光りの中にあつて太祖弘徳圓明國師の御恩徳に背かないやうに行持報恩の勤め、ゆめ怠られないことを希望いたします、

第二席

法性衆生

馬大師曰、一切衆生從無量劫來、不出法性三昧、かくのごとく云ふをききて、法性の中に衆生ありと會すべからず、法性といひ、衆生といふ、水と波といはんがごとし、ゆへに言によりて、水ととき、波ととく、おにこれ多種あらんや、

サテ、吾れくも互の身の上を考えて見ると解つたやうで解らぬものであります、一眸、吾れくは父母に由て生ぜられたものであるが、その以前は如何にして居たであらうか、また吾れくは死と申して、兩の眼閉ぢ四體冷かになつてからは、如何になり行くものであらうか、猶ほまた吾れくは貴いものであらうか、賤しいものであらうか、かやうなことは少し考えのある人には疑問となつて居るやうであります、世の中に疑問と云ふものは随分ありますが、此の位に大な疑問はありますまい、實に吾れくの根本疑問大疑問といはねばなりません、昔より偉人とか哲人と云はれた人が、非常に頭腦を悩まし、聲を擧げて叫ばれたのも、多くは此の問題を根本中心として居るやうであります、殊に宗教と云ふものは直接に此れの解釋をいたすので、源を「セミチック」人種の片碎「ガリラヤ」の湖邊に發し、一千九百年の間、流れく「チユートン」人種「ラチン」人種の住する土地を潤ほし、今日ではあらゆる國語、あら

ゆるる民族に行涉つて居る所の基督教も、また「アリヤン」人種の間には驥足を伸べて居る所の回教も、産聲を遠く三千年の昔、中印度の王宮に發してより、今は五億萬以上の信徒を有する佛教も、皆此れの解釋であります、そこで、此等の宗教で談ずる所を一一擧げて比較をいたしますると、餘程興味もあり有益なことでありますけれども、それは他日に譲るとして、その中で佛教の解釋……中にも上釋迦牟尼佛より嫡々相承して來る我が曹洞宗では如何に解釋いたしませうか、此を今太祖のお指圖に依つて聊かお話しいたしたいのです、

却説然らば太祖は何様に示してくだされたかと申しますと、馬祖道一禪師のお語を引いて、過去の過去際より未來の未來際に至るまで、無限の時間を貫通して、或は生じ或は死し、或は起り或は滅し、生死起滅紛々として極まる所は無いが、その生ずるもその死するも、畢竟、寄せては返へず大海の雄波雌波で、寄せたからとて一滴も増したと云ふのでもなければ、減つたといふのでも無い、法性の大海は依然として不増不減であります、そこで、水のある所には必ず波あるが如く、法性のある所には必ず衆生がある、

しかし、かく申せば、衆生と法性とは別物であつて、それが、同じ所にあるやうに聞

えますが、決してそうではありませぬ、水を離れたる波はなきやうなもので、法性を離れて外に衆生があるのであればありませぬ、衆生の一々が法性水の大濤小波であるので、法性の上より申せば貴賤の差別もなければ貧富の懸隔も無い、只その法性が因縁に随つて現はるゝ所に貴賤の差別、貧富の懸隔、凡夫佛の異同があるので、實に行誠上人の「下駄足駄造りかゆれば釋迦阿彌陀かわればかわるものにぞありける」と云はれた通りで、因縁和合によつて貴賤上下の相違があるまでのことであり、そこであるから、その身が貴い位にあり、その家へに財産があるからとて、少しも高慢や自慢をするには及ばぬ、その身が賤いからとてその家が貧しいからと云つて、何も卑屈になるには及ばぬので、自分くゝの位地に相應して、それ相當の職務を盡くして行けばそれで宜いのであります、山高きが故に尊からず木あるを以て尊しとす、山は山の職分を盡して始めて山の價值があるやうになり、川は川の職を盡して始めて川の價值がある、自分は華族である富豪であるといつて徒手遊食であつたならば、それは人間としては少しも價値の無い人間であります、これに反して、身には破れたる衣を纏ひ、家は九尺二間の裏長屋で、誠にわびしい生活をして居る人であつても、自分の職務に忠實で、マッチの箱一つ拵へるにも、只賃錢を取ると云ふ考えでなく、折角此の

世の中に生れて来て上、天皇陛下の御恩や、父母の恩は無論だが、それと同時に社會一般の恩に預つて居るのであるから、僅かの職業ではあるが、これでも幾分か世の中の爲めになりたいと云ふ考えて行れば、別荘なんか浮かれて、塵一本程も社會の爲めにならぬ華族や紳士よりも人間としての價値は遙か優つて居るのであります、一昨、人間の成効と云ふものは、量^{リキ}を以て計るよりも寧ろ多く質^{シツク}を以てせなければなりません、郡長を以て直に村長より勝れりとなし、縣知事を以て郡長より偉いと考ふるのは誤解であるので、忠實なる村長は無責任なる總理大臣よりも、餘程偉いのであります、彼の現に亞米利加合衆國の大統領をして居らるゝルースベルト氏は如何でありましたか、彼の人^{トシ}は初めニューヨーク州の知事をして居られたのであるが、故大統領マツキソレ^{トシ}氏の下に副大統領として擧げられましたに、ルースベルト氏は再三辭退をせられました、遂に切なる政友の勧めによつて餘儀なく就職せられたのですが、彼人は何故にかやうに辭したでありませんか、米國は申すまでも無い共和政體の國でありますから、副大統領と云へば非常に名譽ある位地で、猶ほまた副大統領になつて居れば、その次ぎは大統領になれることもほゞ推知せらるゝので前途に非常なる名譽の光は輝いて居るのではありませんか、然るに此を再三辭退せられたのは、當時、ニュ

ヨーク州では、重要な運河開鑿の事業に着手して居るのであるから、ルースベルト氏は、此を完成するまでは、知事の職を抛つに忍びなかつたのであります、氏の眼中には位地の高下など云ふことは無つたのです、只此の事業を圓滿に成就したいと云ふことであつた、洵に高尚な心掛てはありませんか、大い人造の牡丹の花よりは、小さなながらも、自然に生へた蘭の花の方が、餘程天地の美がこもつて居るのです、影幻の如き一時の虚榮は、趣味も無く香もなき人造花であるが、假令、その華柄は小くとも眞面目なる成効は、天地の美を含んで居る蘭の花と申して宜いかと思ひます、此の考えがあれは、故に權謀術數を以て人を擠れて人の位地を奪ふ氣も起らず、一時の虚榮心に驅られて、名聞利譽の渦中に捲き込まれることも無く、富貴に處しても驕らず、貧賤に處しても亂れず、胸中緘々として至極平和の生涯を送ることが出来るので、此れこそ眞に楽しいまた價値のある生涯であります、

所が折角佛教を開きましても動もすると、我れ／＼は一日も早く、此の生死紛々起滅極りない衆生界を逃れて、眞如常住なる法性界とか佛界とか云ふ高尚の境界に到らねばいけないと考えて、強て此の生死を厭ふ所の人が尠くありません、此等の人は畢竟水の外に波を求め人て百年経つても安心を得ることは出来無い、そこでありますか

ら、前に拜讀いたしました太祖の告示と云ひ、高祖大師の「生死は佛の御命なり」と仰ふせられたることを、能く信受いたして、佛と云ふ名目も欲する所では無い、生死と云ふことも厭ふべきことでは無い、衆生と云ふことも卑いことでは無い、只人々が、恰かも水の物を濕すが如く火の物を焼くが如くに、人々の本性を充分に發揮して行く所に、佛に譲らぬ、祖師に劣らぬ活作用が出来ることと云ふことを合點して、法性とか三昧と云ふことを只口先きのことにせず、人々の因縁のある所、職とする所に、自利利他圓滿の拳を打ち固めて、家のため國のため、將た社會人類のために、法性三昧を實行し、猶ほまた、衆生とか法性とか、若しくは生とか死とか云名目のために、二物相對の誤解をいたさぬやうにして、現當二世の利益を得られんことを希望いたします。

第三席

一大藏經

實相なをこれ節目にかかはる至唯心いまだ覺知をまぬかれず、然れば此の事を求めんとおもはん人、千經萬論の中に求むるとあらば、うらむらくは捨父逃逝の漢なり、

ゆへに自己の寶藏を運出せんとし聖教のづから我有なることをえん

サテ、此の世界に宗教と云はるは數多くござりまして、今一々擧げる譯には參りませんが、何れの宗教にもその教義の内容は免も角として、必ず所依の經典と云ふものがあります、即ち基督教には新約全書があり、回々教にはコロン經があり、波斯教にはヒントアベスダ經あり、また宗教としては頗る問題でありますけれども、彼の儒教には四書五經、道教には道德經と云ふのがあります、信仰を堅め、安心を興へ、道德行爲の標準となつて居ります、しからは、吾れくの信じて居る所の此の佛教には如何なる經典があるかと申しますると、一大藏經と云ふものがあつて安心起行の標準となつて居るのです、そこでこゝには、此の一大藏經のことに就てお話してみたいと思ひます

一口に大藏經と申せば、造作も無いことのやうであります、却々そうは參らぬ、種類を擧げてみますと、梵語の藏經もあれば、パーリ語の藏經もある、支那語の藏經もあれば、滿洲語や、蒙古語の藏經もある、また、同じ支那語の藏經と申しても、梁藏、隋藏、唐藏、宋藏、元藏、明藏と云ふやうに種々ござります、かやうに種々ござりますから、佛教信者と申しても、その國々で所依の經典に多少の相異があり、特

に日本のやうに同じ支那譯の藏經を所依として居りましても、その宗旨その宗旨で取舍選擇をいたして居ります、先づ一二を擧げてみれば華嚴宗では、『大方廣佛華嚴經』を以て所依としまして、十玄六相の法門を説き、天台宗や日蓮宗では、『南無妙法蓮華經』を以て所依として諸法實相の教義を説き、真宗や浄土宗時宗等は所謂三部經を所依として居りますが、その中でも正依と申せば多少の相違がありまして、浄土宗は『觀無量壽經』、真宗は『大無量壽經』時宗は『阿彌陀經』と云ふやうになります、そこでありますから、同一佛教とは申すものゝ南方佛教は北方佛教を外道の如くに罵り、北方佛教徒は南方佛教を邪宗のやうに見做し、僅か東洋の一孤島たるわが國でも日蓮宗などは、念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊と所有佛教を罵倒し、真宗などになると、釋迦如來の説きなされた經典を所依といたしながら、釋迦如來と申せば、何んの關係も無いお方のやうな了簡をして居る者が尠くありません、これは、洵に殘念などてあります、その原因を尋ねてみれば、一大藏經の一部分を、自分への好きに選み取つて、その一部分の御説法のみを眞實として、その他は虚欺である……イヤ虚欺とまでは云はなくとも、ツマラヌものであると云ふ考を以て居るからで、畢竟、三部經なら三部經丈、法華經なら法華經丈と、廣大無限なる佛教に強いてシキリを設

け居る狭量偏見のいたすところであり、狭量偏見と申せば、こゝに非常に面白い話がある、それは、

東京の或る旅籠屋に彼地此地の人々宿りあつて、四方山の話をして居る中に、或る一人が太陽さんは、山から出ては山に這入り毎日〱の事であるが、人間もあれ程勉強が出来るとよいかと云ふと、他のものも、それは誰れも云ふことであるが、却々そういかないのでお互に貧乏をするのであると申すと、その中の一人がそれもそれであるが山から出て山に這入ると云ふのは了簡がいらない、一眸太陽さんは海から出て海に這入るのであると云ひだした、それから、一方ではイヤ決してさうでは無い、山から出て山に這入るのである、イヤ海からイヤ海からである、双方負けず劣らず議論を始めて大噪ぎとなつた、所ろで、また次ぎの座敷に居た先生もやつて来て云ふには、皆さんの云つて居ることは、何れも誤つて居る、私は十數年來の經驗に徴してみるに、家根から出て家根に這入るのであるとやつた、かやうに三方の議論となつて居る所に、餘りに喧ひすしいものであるから、旅籠屋の主人も何事であらうかとやつて来て見ると、問題は右の始末、餘りに馬鹿氣て居るとではあるが、三方共に眞面目になつて居るから、主人もその座に加つて、何んとか判決をしなくてはならぬことに

なつた、そこで主人は、徐に口を開いて、先づ三方の人々の生國を問ひかけたが、最初の山から出て山に這入ると云ふ先生は甲斐の國の人で海から出て海に這入ると云ふのは隠岐の國の人、家根から出て家根に這入ると云ふのは、江戸の人であつたと云ふことで、さては皆さんの議論は何れも一應尤もであるやうであるが實は太陽の出道入りはかくくのもの、家根から出て家根に這入るのでもなければ、海や山に出道入りするのでないと、懇々と話をしてヤツトのことに議論がおさまつたと云ふことがあります、これは實に一場の戯論のやうであります、佛教を信じて居る人にも、随分かやうな連中がある、山國の人は海を知らず、海國の人は山を知らず、江戸の人は山も海も知らず、極狭い見地で物を批評をして居るから、何邊議論を繰り返しても、物の真相を得ないやうに、三部經の連中は、その外に華嚴や法華のあることを知らず、法華經の連中は、その外に華嚴や三部經のあることを知らぬので、折角の議論も結局は一場の笑草となるのでありまして、これでは、佛教信者と云つても洵に心細い譯ではありませぬか、

そこで、折角佛教を信ずる以上は、如何かして一大藏經の全体を見たいものです、イヤ、全体を見る丈では無くして、更らに進んでそれを身に行ひたいものであります、

しかし、全体を見るとか、剩へそれを身に行ふと云ふと、前に申した通りの浩漭なる一大藏教であるから、そんなとは到底出来無いと云ふ人もあります、それは決してそうではありませぬ、何故かと申すと、すべて物には肝要なる要所、即ち扇で申せば要と云ふべきところがありますから、それさへ確然と捉ることが出来れば、それで宜しいのであります、さて、しからば、その一大藏經の要とは何でありますか、華嚴經でありますか、法華經でありますか、若しくは淨土の三部經でありますか、イヤ、法華經と云ふのも、華嚴經と云ふのも、若しくは三部經と云ふのも、抑末のことである、決して眞實の要とは云へない、

太祖の示した、「千經萬論の中に求むることあらば、うらむらくは捨父逃逝の漢あり」と仰ふせられてありませんか、そんならば此を何處に求むなら宜しいかと云ふに、太祖は此處を至極手近く痛切に「一々自己の寶藏を運出せんとき、聖教のつから我有なることをせん」と示してくだされました、何んにも五千餘卷の經論を探索するには及ばぬ、四角な文字を數へるにも及ばぬ、人々自分の寶藏即ち本來具有の佛性とも心性とも云ふべきものを運出する丈の事であり、此の寶藏は上は金殿玉樓に世の中の幸き浪風を知らぬやんごとなき人々より、下は九尺二間のわびしい住居をして人々

さて、誰れが増して居ると云ふことも無い、誰れが減つて居ると云ふことも無い、博
明強記の博士先生より一文不知の尼入道に至るまで異つたことは無いのでありますか
ら、誰れにでも出来て、洵に手近のこととあります、此の寶藏を打開いて見ると、今
までは、佛のお説きくだされた六ヶ敷い經文であると思つたのが、早やそうでは無く
て、人々の眼であるし、手である足であるので、法華も華嚴も三部經も選り練ひは無
い、自分の全身自己の光明であるから、手の舞ひ足の蹈む所が、皆な一大藏經の活作
用となるのであります、何んと難有こととありませんか、

かやうな次第でありますから、禪宗のお祖師様の般若多羅尊者は東印度の堅固王に招
ねかれたとき、別段に王のために讀經看經をせられぬので、國王は不審に思つて貴師
は何故に看經をなさらぬかと申されると、尊者は、入息不居陰界出息不涉衆緣常轉如
是經百千萬億卷と答へられたと云ふことがあります、これは如何なることとあるかと
申しますると外では無い、出る息、入る息、刹那／＼の呼吸をして此の世の中に處し
て居る上に、一切の妄想繫縛を脱して居るから、時々刻々の動作が一大藏經の轉讀で
あるから、別段に仰山らしく黄卷赤軸を繕く必要は無いとのことです、大藏經は壁へ
てみれば、人々の寫眞であるから、自分の顔がわからぬ間は寫眞も必要であらうが、

自分の顔の分らぬ人は、よもやあるまいから、それが解れば、寫眞を搜索するには及
ばぬやうなもので、刹那／＼に自分の心に反省して、此れは佛の心であらうか、此の
行ひは人間として人間らしいことであらうかと、心をつけて行けば、自然に身も修つ
て参りまして、遂には悪いことはせやうとしても出来なくなつて、頭のキリ／＼よ
り足の爪先に至るまで、活きた一大藏經となつて、實に愉快に世の中を送ることが出
来るのでありますから、何卒儘かでも此の一大藏經が自分のものとなつて活動くやう
に、お互に心を進めたいものであります、

第四席

這箇田地

たとひ定、坐牀をやぶり、精進疲をわすれ、高行梵行の人なりとも、若未到此箇田
地、なほ三界牢獄いてがたし、至遂に坐ながら死し、生死に於いて、自在自由をうる
に似たりとも、なほいまだこの田地にいたらざれば佛祖屋裏不用着なり、
世界の人は、池の如き名聞利譽のために東西に奔走して、夜となく晝となく、欲しい
惜しいの煩惱妄想のために驅逐されて居るのに、十里の松門入つて更らに深く、飛花

落葉に世の無常を悟り、山中曆日なく、僅かに山を籠める薄霞と叢にすたく虫の音によりて、四時の遷り變りを知る丈で、三年五年と三昧の牀に坐りこんでをるのも、洵に高潔なことは高潔である、精進辨道で、雪の朝にも雨の夕にも挽まず屈せず、佛祖の服にあらざれば服せず、佛祖の言語にあらざれば語らず、と云ふやうに至極真面目に勤めて居る、かやうな人は、今日僧侶であると實に一世の高僧清僧と云つても差支は無く、若し在俗の人であるならば、洵に潔白で勤忍で偉いに相違はありませんが、しかしこれを佛教終極の目的より見ますれば、未だ一段到らぬところがあるので、これは古人がすでに、坐着白雲宗不妙と云つて排斥せられて居ります、殊に斯う云ふ人には、徒に形式をのみ重んじて、眞實の精神を打忘れ、強て外面よりこれを制して行ふとするので、一應表面よりみれば、如何にも立派であるが、その心の奥には微細の煩惱が相續して居るので、眞實に道を求める人には大に邪魔になるのです、また、或る一類の人は、佛教と云ふものは何か玄妙奇特の秘術でもあるかの如くに考え、翼なくして空中に飛び、船なくして水を渡る、或は生死に於て自在を得たのだなど云つて、坐脱立亡など云ふことを非常に珍重して居る癖があります、そこで、その弊は天理違門と相距ること遠からずとまでいふやうなことになるやら、一種の幻術師のやうにな

りますので、洵に残念の次第です、

一昨、佛教終極の目的と云ふものは、自分も他人も諸共に心地を明らかにして生死を解脱するのにありますから、三昧の牀に坐り込むのは、悪るいものではありませんけれども、未だ遠して遠してあるし、ことに幻術師じみたことをして、此れが佛教の功德など、誇つて居るのは、佛教に入りながらますます佛教を遠かるものと云はなくてはなりません、

此に就て思ひ出しますのは、彼の一休禪師であります彼の人の一生は殆んど世間を馬鹿にして過されまされたやうですが、或る時のことに、一人の客がやつて来て、近頃世間では一休禪師は、一旦食べた魚を吐き出たして水に泳がせらるゝとの評判ですがそれは實際でずかと問ひ掛けた、所で、禪師は無論心中では、世間では己れを化物か幻術師のやうに考えて居るとみえる、こんな時こそ方便の使ひ時であらうと云ふので、それは、眞實とも眞實とも、若し嘘と思つたら見てごらん、しかし一人に見せるのも百人に見せるのも手数は同じことであるとか、世間でそう云ふ評判もあるならば、一つ高札でも建て、皆の前に見せてやらうといはれた、そこでヤ………眞實ですか、それは是非拜見いたしたいと客も云ふのでいよゝゝ、高札を建つことにした、

来る何日、さがり松の邊、紫野に於いて魚を食ひ、そのまゝもとの魚を吐き出し水中におどらさしむ、お望みの方はお出で、待ちたてまつると、只さへ評判のある所であるのに、彌高札が建つたのであるから、非常の評判となつて、その日になると、紫野にせめかけて人山を築いた、さて時間になると、一休禪師は大きな盥に水を入れ、澤山の魚を泳がせて置いて、早速、その場で料理をして、皆の見て居る前で、ひしゃくと喰べて、さあこれから吐いてお目にかくると云つて、カアツくとやられる、所が、皆のものはさあ今かくと凝視して居るけれども、却々出ない、幾度カアツくとやられても一尾も出ない、そこで皆も如何にも變だと思つて居る所に、一休禪師徐に口を開き、さて今日は大勢お集り申したので、平常よりは一層手際よく吐かうと思つたが御覧の通りで出ない、此の上はいたし方は無いから、便所の方で御覧に入れませうから、一同彼處へとの挨拶であつた、さあ斯うなつてみると満場水を打ちたる如くに静つて居つた所の大勢のものは、一時に騒ぎ出して、人を馬鹿にしやがると怒るものもあれば、イヤ、流石は一休禪師であると賞めるものもあると云ふので、なか／＼の騒動ではあつたが、何と云つても仕方が無い、また、能く／＼考えてみれば、喰べた魚が如何に一休禪師と云つても、蘇生て出やう筈が無い、

考えてみれば結局自分共の馬鹿を顯はすのであるから、一番一休禪師にやられたといふのであつた、これは何んでも無い一場の戯論のやうであるが、決してそうて無い、世の中には何んでも世間の人の出来無い幻術みたやうなことをするのが偉いと思つて居るが、元來正法に不思議なして、山は高く、海は深く、柳は緑、花は紅と教ふるのが佛教である、此の外に玄妙奇特の法は一も無いのであります、只、眞實に柳の緑なること花の紅なることをシンミりと會得するのが必要である、かく申せば柳は緑り花は紅と云ふのは常套語のやうになりますが、こゝは何に佛法など云ふものは坊主さんがよい工合に牽強附會するのであるとか、若しくは佛教を一種の學問として研究して居る人には此の味は解らない、色をも食り利をも求め、自分の力のあるだけを盡して猶ほまだ不足で「世の中は一つ叶へば又二つ三つ四つ五つ六つかしの世や」で、慾望は無窮であるが、しかも、苦心に苦心を重ね、苦悶に苦悶を重ねて得たる名譽も利益も實は風前の燈である、よし求め得ても依る所のものでは無い、況んや、容易に求め得ることは出来無いのである、今まではツマラなかつたど、全身眠き出すが如く、過去の迷に惑に泣く時に始めて、此の宗教の味が解るのであります、宗教を科學的に研究するのも、歴史的に研究するのも悪いのでは無い、悪い所では無い、宗教の光輝、

否、佛教の眞價値を研究して發表するのは宜しいが、只我等は現に飢へて居る渴して居る、すでに飢へすてに渴して居る人には、パンの説明や、水の解説よりも、一滴の水一片のパンその物が必要である、且つまた人間の言語が如何に調法であると云ふもの、さあ、口の先きや筆の先きに出して説明をすると、痒い所に手がとしかぬやうなもので、實は冷暖自知するより外は無いです、唐辛を喰べると大變辛い、併しなから其味はどんなものかと問たならば、如何でありませう、山葵の様なものか、そうだとも云へない、そんなら焼鹽みたやうなものであるかと云ふに、そうだと云へない、まあ、比較をすれば、やら説明さしても實際の所は解らぬから、赤い唐辛を一番咬んでみる外は無いのであるから、説明の聞きたい人には、赤い唐辛を進める外は無い、これは、如何に親い親子兄弟の間柄でも、睦じい夫婦の中でも傳へやうはありませぬ、門口までの案内は出来るが、トン／＼と門を撃つのはその人であるのであります、トン／＼門を撃つて、辛いか苦いか自分でシツカリ分つたのが這箇の田地でありますで、人間眞實の平和、眞實の安樂はこゝに於て始めて得ることが出来ます、此の確かな田地を立脚地として居りますと名のためや利のためには動きませぬ、雨奇晴好、晴れても曇りても、悟つ

て佛になると、迷つて凡夫となるとも、至極平坦なもので、日々の勤め、夜々の行ひが、天に愧ず地に愧ず、他を利する所に自をも利し、自を利する所に他を利して、無限の時間と無限の空間の間に最も楽しい、美しい生活を送ることが出来ます、何卒、這箇の田地を他人に托せず、自ら耕し自ら培つて、敢て高きに留らず、強いて低きに居らず、因縁のある所に随つて自利々他の行願をいたしたいものであります、

第五席

貪瞋痴等

生死去來眞實の人體と明らむとも、自己本性の虚明靈廓なることを明らめずんば諸佛の所證をしらず、故に菩薩放光を見ておどろき、諸佛の相好を見て愛すべし、ゆへいかなとなれば、貪瞋痴等の三毒未だまぬかれざる故に

サテ、世の中にとありとあらゆるものゝ中で、最も明かなるものは何てありませうか、私は先づ日月であらうと思ひます、また、最も清かなるものは何んでありませうか、彼の峻巖絶壁の間より出づる谷の流てはありますまひか、實に世の中には明るいものも清かなるものも數多くござりますけれども、日月に比べるものは無く、谷川の流に

勝るものは妙い、しかし、『灌南子』の中にも云つてある通りに、「日月明かならんと欲して浮雲之れを掩ひ、河水清からんと欲して砂石之れを汚す」で、如何に明皎々たる日月の光りも、時に浮雲のためには掩はれて折角の光明を現はすことが出来ない、中秋無月など云ふとは昔から能く云ふこととて、「三日月の頃より待ちし今宵かな」で、待ちに待ちたる明月の夜が、生憎浮雲のために掩はれ、さては叢雲のみでは無く、漸くに風が起る雨が加はると云ふことになつて、詩人や文人を泣かせることも妙くありません、一滴また一滴、滴り滴りて流れる水は、實に立派なものでありますけれども、二丁三丁、一里二里と流れに流れて来ますと、種々の腐敗物などが流れこんで、そのままでは使用の出来ないことになる、これはお互の平生見聞する所でありまして怪しまない所ですが、手近い人々も互の心は如何でありますか、經典の中には、涅槃妙心とか如来清淨心とか申してありますから、悪からう咎は無いのです、實に眞の極善の極善の極で無くてはなりません、所が、此を實際も互の朝夕に起りては消え消えては起る人々の心に就て考ふれば、随分ツマラヌ考をも起るので、却々油断が出事無い、涅槃妙心である如来清淨心であると安心して居ると飛んでも無いことになりす、頼みになるやうて頼みにならぬは我が心で、或る人の歌に「心こそ心まよはずこゝろな

れ、こゝろにこゝろ心ゆるすな」とある通りであります、そんならば佛のお説きなされました所の經論のことは全然虚偽で元來心と云ふものはツマラヌものであるかと云ふに、否、決してそうではありません、元來清淨潔白なもので、前に申した明皎々たる月、清冷々なる水のやうなもの……否、實は月のやうだとか水のやうだとか云ふのも一應の譬へて到底比較にならない位であります、しかしながら、遺憾なことには、月に叢雲がかかるやうなもの、貪瞋痴の三毒の雲霧が掩ひ隠くして、眞實の光りを放つことが出来ませぬ、それも一年に一度か月に一度位であるならまだしものことでありますけれども、無始劫來と云ふ長い間の雲霧ですから、却つてその雲霧を認めて本來の相のやうに考えて居る人も尠くありません、すてに、此の貪瞋痴の三毒を以て我物として居りますから、「我物と思へは輕し傘の雪」で、随分甚だしいことをしても、自分では案外平氣で居るので、遂ひに人間か畜生かけじめがつかぬ兼ねるやうになるのです、かやうな次第ですから、ありとあらゆる罪惡の根本は何であるかと申せば、此の貪瞋痴の三毒です、貪とは何んであります、即ちムサボルことです、瞋とは何んであります、即ちイカルことです、イカルと云へば、或る人が斯う云ふことを申した、それは、瞋は怒て怒は奴心で、自分が萬物の中にあつて主人となることが出来な

くて、始終物に使役せられて居るから起るので、如何に偉そうなことを云つても、如何に高位高官でも、此の奴心やつこころのある以上は、やはり人の召使であると云ふのです、成程此れは尤もなことと思ひます、自分が萬物ばんぶつの中で主人であると思つたら、そうイカルことは無い筈です、次に痴ちこれは愚痴ぐちですが、たゞ世間で申す所とは少し異なる所がある、佛法の所謂愚痴は、因果の道理を信ぜざるものが愚痴です、因果の道理と申せば佛教の專賣特許せんばいとくしよのやうに聞えますが、語を換へて申せば宇宙の大真理であります、宇宙の大真理である以上は、離れやうとしても離れることは出来無いし、無くせやうとしても無くすることは出来ないので、否いやでも應おつでもいたしかたは無い、因果の理法に従ふより外はありませぬ、これが解らぬのが愚痴で、以上の三を三毒と申しまして、これがために今日ツマラヌ境遇になつて居るのです、所て、猶ほ一段深く考えてみれば此の三毒の本は何であるかと云ふに、我われです、我がくといふ心からです、我が好かぬ、我が氣にいらぬ、我の思ふ通りにならぬ、我の所有にしたい、といふ皆なこの我われです、此の我がくといふ考さへなければ、明皎めいせう々たる月の光りは、限なく照して三毒の起るやうなこともありませぬ、こゝて互に此の我と云ふものに就いて深く考へないといけません。

一體、此の我と云ふことには種々ありますが、極大略申しますると、先づ二た通りあります、二つの我があると申せば可笑しいやうです、日常いろくのこと就て惜しいの可愛の惜いと思ふてをるのは、本心の我われは無ない、そんなものは皆な我見我慢われけんわれまんの我われである、即ち他人と自分とを差別する所の小我せうがと云ふので、此の五尺の肉體に重きを置いて居るのです、此を土臺として世に處するものですから、機つかのことよりして遂には「腹たちし時はこの世も後の世も人をも我も思ひ忘れつ」と云ふやうになりまして、積みに積みたる善根ぜんこん山上の功德も一朝に焼き盡し、或は、此の小さい立脚たつきゃく地に居るものでから、五尺の肉身にくみ以外は皆な外物となつて「あめがした皆な我がものとなれるにも猶ものたらぬ心こそすれ」で、常に五欲の奴隸ぬれきとなつて、あたら此の一生を惜しい、欲しいの中に過ここしるのです、こゝて一番正氣に還りて、今まで我がくといふと執して居た所のものは、畢竟ひつじやうこれ一時の假りの相すがたで、その本體は平等一如のもので、我の好むべきもなければ、彼の厭ふべきも無いと合點してみれば、「わが心そのまゝほといきほとけなみをはなれて水のあらばや」で、今までの小我は直に大我となるのです、此の大我に歸した上は、權兵衛が八兵衛を相手として購かるとか、熊公が八公のものを欲しがると云ふやうなことは無い、今まで食と活動かどうて居た心は、その反對

の布施となつて現はれる、即ち慈善心です、瞋の反對には忍辱が現はれる、忍辱とは俗に云ふ勘忍です、此の勘忍が出来さへすれば萬事成就するので、徳川三百年の基も何んであるかと云へば、此の勘忍にあるのであります、また、闇路に迷ひし愚痴が一轉しますると正慧となつて参ります、正慧のある以上は、因果の道理に迷うやうなことは無い、鏡の物を照すが如くに、大は宇宙の真理たる因果の大法より、小は日用の事々物々に至るまで、正邪曲直の分別を認りませぬから、大にしては國のため社會のためになることが出来るし、小にしては一家一人の幸福安全を得ることになります、凡夫と云ひ佛と云へば如何にも天地懸隔したやうなもので、凡夫は何時までも佛の作用は出来ないやうに心得て居る人もありますが、此の小我が一轉して大我となり、貪瞋痴と活動して居た所のものが、布施忍辱正慧と活動さへすれば、此が人々の本來の自性が現はれたので、此の五尺の肉身のまゝが佛にかけらぬことになり、してみれば、佛と云つても宜しいが、また凡夫と云つて厭ふには及ばぬ、佛は一切衆生は皆な如來の智慧徳相を具有して居るが、只だ惜しいことには煩惱妄想のために知らないと思息せられたので、煩惱の雲妄想の霧がとれさへすれば、求めずとも自性の本體は露堂々と現はれて来るのです、されば、菩薩が光明を放たれるとか、佛に三十二相八十

種好の相好があるとしても、驚くにも愛着するにも及ばぬので、若しさやうな考があること、それは畢竟未だ全く妄想煩惱の除き切らぬのであります、何卒、人々の本性は佛とかけらぬ、祖師に譲らぬものであると云ふことを深く信じて、一歩一歩煩惱妄想の三毒の塵垢を拂つて、未來は無論のことだが、今生より佛祖の仲間入りさして耻ぢないやうに、信心を堅めて進みたいものであります、

第六席

君父恩重

汝諸人、悉皆國土にはらまる、一天下、國土上、悉く是れ國王の水士にあらずといふことなし、然るに家にあれは親につかへ、國に侍れば君につかふまつる、如是なる時、天地加護ありて、自ら陰陽のめぐみをうく、然もなまじひに佛法をねがはんと號して、可仕親にも仕へず、つかふまつるべき君にもつかふまつらず、なにをもてか父母生成の恩を報し、なにをもてか國王水土の恩を報せんや、サテ只今讀み上げましたる賛題は太祖弘徳圓明國師の御垂誠で國王の恩父母の恩に報ゆべきことを御示しなされたのであります、抑もわれわれの此世に生れ來たのは誰れ

の御蔭でせう、これ實に父母生成の恩として父母の恵みも深き御恩徳でござります、此御恩徳に報い奉るのが人の人たる第一の務であります、さて又われ／＼が此世に於て安樂に暮らすことの出来るのは誰れの御蔭でせう、これは國王水土の恩として、天子様
がわれ／＼を慈み憐れみ下さる、御恩でござります、今日の言で申しますれば、個人的には父母の恩、國家的には國王の恩を受けてゐるのが、われ／＼であります、若し父母生成の恩がなくばわれ／＼は此世に生れ出ることが出来ませぬ、此世に生れ出ることか出来ませなんだならば、どうして此有難い佛法にも遇ふことが出来ませう、又例令此世に生れ出ましても、國王水土の恩がなかつたならば、われ／＼は安穩に此世に住むでゐることは出来ませぬ、安穩に此世に住むことが出来なかつたならば、われ／＼はどうして此有難い佛法を信することか出来ませう、此身そのまゝに佛の位に入ることの出来る此結構な佛法を聴聞することの出来るのも皆なこれ國王父母の高恩であります、されば佛は、「父母に事ふるものはこれ佛に事ふるものなりと仰せられ、又「王は父母の如く愛念して差ふことなし、國人は子の如く並に忠孝を懐く」と仰せられて國王父母の恩の高いたを御教示相成つてをります、此國王の恩に報いをするのを忠といひ、此父母の恩に報ゆるのを孝といひまして忠孝とは我が國體の精華であります

されば明治廿三年十月三十日の教育の御詔勅にも、「我が臣民克く忠に克く孝に體兆心を一にし世々厥の美を濟せるは是れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す」と仰せられて、日本臣民たるものは此忠孝の二つを以て本として立つべきであります、父母の恩のことは小學校の教員か生徒に對していふやうに、くどくしく申さずとも諸君も御承知でござりませうが、國王水土の恩に就ては少しく申さねばなりません、例へて申しますれば、暗がりに提灯を借りた折には誰も禮をいふて返すことを知つてはゐるが、暗がりに提灯を借りて禮をいふ位ならば朝から晩まで頼まれもせぬのに赫々と光りかがやいてくれる太陽には餘程禮をいはねばならぬのであります、それに太陽の方には禮をいはない提灯の方に禮をいふ如く、泥棒に物を盗まれた時これを捕へてとりかへしてくる人があれば有難がつて禮をいふが、たゞ雨戸一つで安らかに眠るとの出来るのは皆なこれ國王上に君臨して下を憐み下さるからである、一滴の水には禮をいふて吞むが、日々夜々混々として晝夜をすてず流れてくる水には禮をいはぬ人心で、ツイ、國王の恩を忘れることがある、忘れることがあるといふて忘れてはならぬのは天子様の御恩徳で、我か日本の國は歴代の天子様方皆なわれ／＼を憐れと思召し下されて誰れ疎かにはござりませぬが、殊に忘れてならぬのは、今上天皇陛下の

御恩徳であります、毎度申すことであるが、或る冬の夜に 陛下は九重の奥深きところ
にましましながら賤か伏屋に置き臥しをしてをる民のことを御想ひ下されて、「冬深
きねやのふすまをかさねても、おもふは賤の夜寒なりけり」と仰せられたといふこと
を承てをります、われ／＼は實に此の海よりも深く山よりも高き御恩を受けてをるの
であります、これに酬ゆるといふのが日本國民の務であるばかりではない、太祖様は
是の如くなる時は天地加護ありて自ら陰陽のめぐみを受く」と仰せられてある、なま
じにわれは佛法信者であるなどといふと、佛様を信心することは熱心ちやが、君親に
事へることを忘れるやうなものは、まことの佛法信者とはいふことが出来ぬのであり
ます、彼の耶穌教などは天にある神をまことの君とし父として此世の君を疎かにし
此世の親を粗末にするやうなことをいはぬてはありませぬが、わが佛教、殊に本宗に
於きましては君父の二恩に報ゆるといふことが第一となつてをります、其ことをいと
ねんごろに御示し下されたのが此御垂誠でござります、此二つの恩は國によつては、
二つになつてをりまするが、我國では忠孝一致でわれ／＼の祖先は 天子様の御先祖
と同じでござりまするで、君に忠なるのが即ち親に孝なるのでござりまする、され
ば平重盛は父清盛に反對いたしまして、父が兵馬を整へて院の御所へ推参せんといた

しまする折に、自分一人は烏帽子、直垂の姿で、父の前に参りまして「世には四恩と
申すもの候、中にも國王の恩を以て第一とすと申して父の暴横を諫め、此言御用ひ
なくば早く重盛が首を刎ね玉へ、孝ならんと欲すれば忠ならず、忠ならんと欲すれば
孝ならず、と涙を振つて申しました此重盛は全く父に反對したのであります、これ
が即ち君に忠せんが爲めで君に忠するのは、即ち親に孝となるのが、我が國粹の精華
でありますから誰も父に反對したから重盛を不孝と申すものはござりませぬ、却て
後の世まで孝子の龜鑑として知られてをります、身軀髮膚これを父母に受く敢て毀傷
せざるは孝の始なりとありまするが、楠正行は其身軀を犠牲として南朝の天子に事へ
たてまつり、「かへらじとかねて思へばあづさ弓、なき數に入る名をぞ止むる」との一
首の和歌をのこし四條畷の戦に討死いたしました、けれどもこれ父の志を繼いだ孝子
でござりまするので、誰も正行を身軀を傷けた不孝なものじゃとは申しませぬ、それ
でありますから、我國に於ては日々に親の恩に報いてゆくことが、そのまゝ君に對す
る忠となるのでござりまする、これを忘れてはまことの佛法信者とはいふことが出来ま
せぬ、佛法は決して日常の行ひの外にあるのではない、仕ふべき親に事へ、つかふま
つるべき君につかふる報恩の行持が即ちわれ／＼の行ふべき道であります、此恩を忘

るゝものは禽獸に等しども仰せられてありまして佛法では忘恩といふことを大罪惡といたしてをりまする。

第七席

轉迷開悟

一人として迷ふ人なく一法として悟るべき法なしこのゆへに迷を轉じ悟となし、凡を轉じて聖となすといふも、悉く皆な未悟人の言なり、さらに何の凡の轉ずべきかあらん、何の迷のさとりべきかあらん
これも矢張太祖國師の御教訓で、甚深微妙の佛法の極意を仰せ聞かされたのでこの道理だによく會得することが出来たならば、われ／＼は直に迷を轉じて悟を開くことが出来るのである、凡そ佛教は八萬四千の法門十三宗三十幾派と分れてはをるが、其目的はといへばいつれも轉迷開悟とて迷を轉じて悟を開くの外はない、が、抑も此迷いといふは何であらう、悟といふのはどんなものであらう、太祖様は「一人として迷ふ人なく、一法として悟るべき法なし」と仰せられてある、さうして見ると悟りもなければ迷もない、悟もなく迷もないのに、何故に悟を開かねばならぬのであらうか、又

迷を轉ぜねばならぬのであらう、この道理は餘程むつかしいのぢや、夜中に道を歩いてをると一つの蛇がをる、喫驚仰天してこれは／＼とわとしざりして、さてよくよく見れば蛇ではない繩であつた、繩であつたと見れば少しも驚くことはない、さて其繩は何かといへば麻糸で出来てをるので麻糸の上には別に繩にならうといふのもなければ帷子にならうといふのもないし、紙筋の糸にならうといふのもない、高貴な御方の蚊帳になるのもあれば、乞食非人の頭陀袋とならぬともいへぬが、麻糸そのものには貴もなく賤もない如く、迷ひだの悟りだといふのも其通りで、其本體を見極むれば宇宙は平等一如で何の差別もない、差別がないのであるから、迷だの悟だの聖だの凡だのといふべきはない、本來無一物、何處にか塵埃を惹かんと六祖惠能大師の仰せられた如く差別に迷ふてこそいろ／＼な別ちはあるが、平等の上からは何の區別のあるべきでない、「牛、女郎、布袋、西行さま／＼に土の化けたる伏見人形」で、牛となり女郎となり、布袋となり、西行となりてさま／＼に差別かあるが皆なこれ平等一如の土たるに過ぎむのじやから土の上に於ては貴も賤もない、それにイヤ布袋がよいの、西行がよいの、あれは女郎の人形を買ふイヤあれは牛人形がよいなぞといふのは、差別に迷ふて未だまことの悟にいたらぬからじや、どれもこれも一つの土ぢやと見たな

らば何のことはない、今いふ迷悟とか凡聖とかいふのも其通りで、まだ差別に迷ふてをるものであるからいふことであります、これを太祖様は「悉く皆な未悟の人の言なり」といはれてある、さあかく凡聖迷悟の區別のないのに、こゝに差別の見を起して我れだの人だのと争ふのが、われ／＼凡夫の境界で、もと／＼われ／＼は佛と同躰の位に入るべき佛性といふ者を持つてをるのではあるが、無始劫來の迷ひの爲めに此明瞭々たる佛性の鏡を曇らせて終に佛とは全く遠ふやうなものになつたのぢやが、さて此迷いの曇を拭ふて、もとの明瞭々たる鏡となれば、そこにはもう迷もなく、悟もない、もとのまゝだ、それを蘇東坡は「廬山烟雨浙江潮、未到千般恨不消、到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮」て、廬山や浙江といふのは支那で非常に景色のよいところぢや、そこでどうかしてゆきたいものぢやと考へた、これは悟の境界に行くまではどうか其境界にゆきたい、如何なる立派な所であらうと思ふてをつたが、到り得還り來りて別事なして、いつて見たところが別の事はない、矢張廬山は烟雨、浙江は潮ぢや、それをまだ到らぬものはさまざまに迷ふが、其極に對して見れば迷といひ悟といふべきはない、悟の悟臭いのはまことの悟ぢやない、まことのさとりは迷もなく悟もない、併しわれ／＼はなか／＼此境界に至ることが出來ぬのであるから佛祖正傳の八戒を受けて

此身このまゝ諸佛と同じ位に入り凡聖一如、迷悟不二の境に入るのであります、これが即ち我が宗の特色、他宗他門の及ぶところではない、我宗の古徳天桂禪師はかつて、寒山と拾得の圖に賛して、寒山の方に拾得が、ナンヂヤ此世の中に本來無一物、何もあゝるべきでない、それに箒を持つて何を拂はうとするのぢや、「拂ふべきほこりもないに箒持つ人の心ぞ塵となりぬる」とやつた、悟つて見れば迷はないのにそれを拂はうなぞとて箒を持つのは馬鹿などではないかといふ意味ぢや、ヌルト寒山は直に「拂ふべきほこりもないといふやつを拂はん爲めの箒なりけり」とやつた、どうだ、拂ふべき一義ではない、ソコアほこりもないといふやつを拂はん爲めの箒なりけり」て迷も悟もないところにまた迷悟があるといふ深い意味をあらはされた、これと同じやうな話がある、それは例の休和尚ぢや、此の和尚が高野の山に上つて弘法大師入定の所にいたり、「弘法は虚空の定に入りもせて、心せまくも穴にいるかな」とよむだ、其時に弘法大師は穴の中から、「入りぬれば虚空も定もないものを心狭くも穴と見るかな」とやられたといふことである、悟つて見れば迷もなく凡聖もない、まして虚眞もなければ穴もない、虚空と穴と一枚ぢやのに、穴ぢやの虚空ぢやのといふのは、まだ／＼

だとして入りぬれば虚空も定もなきものを心狭くも穴と見るかな」と云はれたといふこととちや、何んと面白いではないか、それであるからわれ／＼は佛祖正傳の佛戒を受けて佛の御位に入つたからとて、そのまゝにしてをてはこれはまだ／＼ほんとはない、發願し行持して其日／＼の俗行がそのまゝに佛作佛行となつてゆくところが、迷悟不二の境界に達したので、こゝてまことに轉迷開悟することが出来るのちや、それを示されたのが此御教訓で意味が深長であるからふわり憎かつたであらうからこゝに一つの面白い御話を申すことゝいたさう、

それは徳川家康公が或る時、近侍の人々に向つて世の中で何が一番うまいものちやと問はれると皆なさま／＼の御答を申し上げたが、それを聞いてをつたふ梶の局はニコニコと笑つてをられるから家康公、梶、其方は何と思ふと云はれると、お梶の方、それは搦てござります、如何に何がおいしいと申しましても此の鹽の味がなければ食ることの出来るものではありませぬ、と申すと家康公考へられて成る程左様である、それではまづいものは何かと云はれると、それも矢張鹽でござります、何かおいしいと申しても鹽の加減が悪ければ、それよりまづいものはござりませぬといふたので、一坐の人々感服したといふことである、元來、鹽にはうまい、まづいはないその加減一つ

で迷ともなり悟ともなる、これが即ちまづい煩悩そのまゝにうまい菩提となるのであるから、われ／＼とでもこのまゝに佛の位に入ることが出来る佛法の妙理であります、

(一般の注意) 御教義の説教は題毎にいたしますると百題必要であるのですがそれは紙面の許す所でありませぬから七席といいたしました、此第一席の教外別傳、第二席の法性衆生、第三席の一大藏經、第五席の貪瞋痴等は、修證義第一章を御参考なさればよろしい、第四席の這個の田地、第六席の君父恩重、第七席の轉迷開悟は共に修證義第五章を御参考下され、生死事大のこと、即心是佛のことを應用なさればよろしい、大體御教義の説教は餘程むづかしうござりまするから成る可く平易になさるがよい殊に本宗は修證義を中心としてをるのであるからこの中心に吸ひ込むやうの御考へて御やりにならぬと、安心が二つにも三つにもなりまして充分御注意ありたいものです、

(御教義要抄) 全體は御参考にこゝに御教義全體を擧げるはづですが、あまりながくなりまして御参考に供せなければならぬ主要なもの二三を擧げることゝいたします、

釋迦牟尼佛成道するとき大地有情も成道す、たゞ大地有情成道するのみにあらず、三世諸佛もみな成道す、恁麼なりといへども、釋迦牟尼佛に於て成道のおもひをなすことなし、大地有情の外に釋迦牟尼佛をみることもなかれ、

修證義第五章の末節を参照し、かねては第三章の受戒入位のところにも参考するとよろしい、釋迦如來の成道はやがて一切衆生の成道であります、

來記を忘れず六十年をまぐる、三周の寒暑を巨海の波濤にへき終に不知の國に至りて冷坐九年の中に、大法器をえて、はじめて如來の正法を弘通し、先師の洪恩に報じ、艱難はいづれよりも艱難なり苦行はいづれよりも苦行なり

達磨忌説教の贊題として適當ですし、又修證義第五章行持報恩の部にめてはめて説明してもよろしいのであります、

生不生を超越し、心不心を解脱す、器に随ふ水の如く、物による空の如し、とれども手にみつることなく、さぐれども跡をうるとなし、すなはちこれ諸佛の妙法なりこれは修證義第一章に應用し又は第三章受戒入位の妙を説くときに使ひになつてもよろしいのであります、

あだかも海水のなみををこすが如く、ふこりふこれども會て一水もまみせず、又波の

滅するが如し、滅し滅すれども一滴もうしなはず、會て人間天上の中に、しばらく諸佛と呼ばれ來り、鬼畜と呼ばれ來る、恰かも一面上に、かりに衆面を現するが如しこれは生死即涅槃のことはりを示すのに適當ですから修證義第一章の第一節を説くにはよろしうござります、

假ひ一日なりといへども、若し諸佛の機を會せんが如くんばたゞ百歳をこゆるのみにあらず、無量の生をもこゆべし

修證義第五章の百歳の行持を一日に行取するところを説くの参考になさるがよいこの人身、たやすく受くるところにあらず、むかしの善根力によりて、うけ來るところなり

修證義第一章の参考となるべきことは、いふまでもありません、第五章にも應用することが出來ます

その人をして直に見せしめんとして祖師西來よりこのかた、有智無智をいはず、舊學新學をいはず一片に端坐せしめて自己に安住せしむ、すなはちこれ大安樂の法門なり、

これは次ぎの坐禪説教の参考にあると共に即心是佛の理を説く修證義第五章の末

太祖法要法話

第一席

サテ、すべて一家を興すと云ふことは、却々容易なことでは無い、人間僅に五十年位の壽命では、充分に大成すると云ふことは出来無いので、大概、二代か三代はかゝるのであります、一例を擧げて申しますと、千代田の松枝を鳴さず、徳川の流れよどみなき三百年の太平も、祖先たる所の家康公が非常の英雄であつたからではありますけれども、三代將軍の家光公が偉らかつたから、あのやうになりましたので、家康公の偉いことを思ふと全時に家光公の偉いことを感ずるのです、今我が曹洞宗と云ふ一大宗旨は如何でありますか、寺の数を云へば一萬四千有餘、檀信の数を云へば六百萬、猶ほこれよりますます盛大にならんとして居りますが、是れは畢竟誰れの恩徳でありますか、宗派は多い、十三宗三十餘派、しかも面授面稟の最尊最妙のお宗旨は何れの宗であるかと云へば、此の曹洞宗であるが、此のお宗旨

によつて安心起行をいたすことの出来ること云ふのは誰れのお蔭でありませうか、此れは申すまでも無い高祖承陽大師のお蔭であります、また太祖弘徳圓明國師のお蔭であると思はなくてはなりません、世間には高祖様か太祖様か偏方の御恩は承知して居る人もありますが、高祖様の御恩を感謝すると全時に、太祖様の御恩を感謝し、太祖様の御恩を感謝すると全時に、高祖様の御恩を感謝する人は尠ないやうであります、此れは例へば、父上の御恩には感じて、母上の御恩は知らぬとか、或は母上の御恩は感じて、父上の御恩は感ぜぬと云ふやうなもので、それでは眞に孝子と云ふことは出来ないが、當宗でも片方の御恩を感謝するのみでは、眞に安心を得た人と云ふことは出来ませぬ、何卒此の點は充分にお心得違ひのないやうにあつたいものであります、しかし、これ丈では未だ充分に御納得の出来無い方もありませうから、少し進んで當時の時代よりお話しいたしませう、

當時の狀態は如何なるものであるかと申しますと、その以前からの亂れ、上となく下となく疲れに疲れて居たので、あつて皇室の御威光と申しても、また社會一般の秩序と申してもなか／＼今日明治の聖代などには到底比較は出来ませぬ、社會一般の狀態はかやうであるが、宗教の方は如何であるかと申すと、華嚴とか三論とか法相とか

云ふ所の南都六宗の花香は申すまでも無い、その後には渡來いたしました所の天台宗や眞言宗であつてさへも、三觀十乘の法門とか、父母所生身即證大覺位の教義とか云ふものも、たゞ一部の専門學者の翫弄品となりて、お坊さんとお坊さんとの間におみ行はれる位で、一般人民は縁に念佛の淨土宗によつて安心をいたして居つた狀態でありました、猶ほまた禪宗と云ふものも、臨濟の方は特別幕府の歸依がありましたのと、當時文學の振はない時代に、能く文學を維持して居りましたので、外面では頗る盛大でありましたが、一般人民に及ぼす點は如何であるかと申せば、他の宗派と五十歩百歩であつたのです、さてしからば、此の曹洞宗は如何であるかと申しますと、その以前は、外に向つて教化を張ると云ふよりも、内に於て宗門の人物を養成すると云ふのが急要で、未だ盛大と言ふ譯には参りませぬ、此の時に當て、高祖四世の法孫として出世し、大いに化門を張つて、當宗の宗風を擧揚せられましたのが、太祖弘徳圓明國師であります、そこで、曹洞宗の基礎を築かれたのが高祖で、此を大成せられたのが太祖であります、

畏れ多いことではありますけれども、太祖の御恩徳を知るには、今上天皇陛下の御恩徳を以て比されたなら宜しからふと思ひます、申すまでもありませんが、歐米人の眼

には殆んど、支那の屬國のやうに思はれ、場合によつたら、自分共の屬國にせやうと考へて居たのに、支那の屬國どころでは無い、却つて支那の暴悪を懲して、進んで世界強國の仲間入りをしたし、今日では東洋平和の維持者となり、世界で最も進歩して居る國であると自らも信じ、他人も許るして居る英國同盟とを結び、その一舉手一投足は纔に東洋の孤島たる國內のみでは無く、遠くまた廣く世界各國に影響するやうな偉い地位に進みましたのは、實に我が明治天皇陛下の御威徳であります、太祖の御事業も略同一であります、太祖以前は未だ曹洞宗と云ふものは宗としては左程重きを置かれ無かつたのです、只高祖を始め二代三代のお方々が引續いて偉いお方でありましたから、そのお方々の學識品性に感じて居た位でありましたが、太祖様になりましては、内に充分鞏固になりましたから、進んで各宗の間に立つて宗門の運命を開拓せられたので、越前の一隅にあつた所の曹洞宗を廣く全國に擴張せられ(勿論お弟子方の力でもあるけれども)次第々に傳播して、今日のやうに、津々浦々の我れれ互までが、親しく佛々祖々單傳し來られた所の、此の御宗門の安心起行を領得して、現當二世の利益を受くることが出來、猶ほまた、一萬四千の寺院と六百萬の檀信と有りました、數も多い我が國の佛教界の第一流のお宗旨となつて居るのは實に太祖の御

威徳で、如何にも、今上天皇陛下の御威徳と相似て居るではありませんか、してみたらば、我れれ互は、平素太祖の御生涯のことや、わけて御誕生の日や、御入滅の日は、胸に記憶して居つて、それ相當に御恩報謝の勤行をいたさなくては、鳥獸と同様に見做されても已むを得ないこととあります、否、鳥獸と申しますが、「病雀尙ほ恩を忘れず三府の環能く報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず餘不の印能く報謝あり、畜類尙ほ恩を報ず、人類争てか恩を知らざらん」と高祖のお示めしにもある通り、畜生だと輕蔑して居る所のものであつてさへも却つて報恩の勤行をいたすものがありますから、呉れれも此の大恩を忘却せないやうに、お心掛ありたいものであります、

第二席

サテ、今日のわれれ互が、太祖様に對しまして、如何程洪大な御恩と蒙つて居るかとお云ふことは、前にお話しいたしましたが、此に就ては、太祖様の御生涯の事柄を心得居無いと、同じ御恩を報ずると云ふ上にも、自然疎畧になるやうなことが無いと

も限られませぬから、此れから、御一生の御行蹟を窺つてみやうと思ひます

日の御誕生、今日から回顧しますれば六百二三十年前のとてござります、世間の謠に柳橙は双葉より香ばしと申しますが、太祖の御幼少の動作は、實に此の謠に漏れたまはず、三歳の御時より、早や南無くと唱へて、佛を禮拜する姿勢をなしたまひ、五歳の御時には普門品を誦じたまひました、宗教的偉人の面影は此の頃はなき時に、早やありくと現はれて居るではありませんか、かくて、翌年即ち文永十年の春には、觀音菩薩の尊像をつくつく拜したまひて、出家求道の志を起したまひ、八歳の御時父母の許しを得て永平寺に上り、高祖大師の法孫に當らせらるゝ所の徹通義价禪師の御弟子とならせられ、親しい御提擧で親參實究したまふこと十年一日の如く、弘安八年御齡十八の時、徹通禪師に暇を請ひて諸國行脚の途に上りたまひ、諸方の高僧碩徳の方々を訪問せられまして、御修行あらせられました、一二を擧げてみますと、比叡の峰を分け登りては三觀十乘と申す高尚なる法門を研究せらるゝやら、遠く紀州由良の法灯國師の所に參らるれば、直示單傳の法要を商量せらるゝやら、遠く紀州前の事てありますから、無往來の路も困難でありたらうに、それをも厭ひなく、幸に辛苦を重ね、困難に困難を積りて諸國を遍歴なされ、ヤット元應元年に永平寺に歸りになり、猶も徹通禪師の下で御修行遊されました、さてかやうにしてあらせらる

ゝ間にその翌年のことに徹通禪師が富樫家尙の請によりて、加賀の大乗寺に赴かせらるゝや、太祖も御隨行で大乘寺に赴せられました、或る日のことに、法華經を讀みになり、父母所生眼悉見三千界と云ふ句に至つて、大に感ぜらるゝ所があつたが、猶ほ進んで工夫を重ねて居らるゝ中に、徹通禪師が、平常心是道と説きたまふを聞かになつて、桶底の脱するが如くに、豁然として直示單傳の妙旨を明め給ひました、時は是れ永仁三年、御齡廿七歳で、翌年は愈徹通禪師の室に入つて傳法と申して、釋迦牟尼佛より嫡々相承し來れる大法を嗣續なされ、五十四代目の祖師とならせられました、此は、太祖の御修行の概略でござりますが、これからは念衆生濟度の御時代で、阿波國海部の郡司の請に應じては、同國に赴かせられて、城滿寺を建立なされ、正安元年には大乘寺にお歸りなされて、徹通禪師を補佐し、また禪師御遷化の後には、その寺に住して化導に努めらるゝやら、應長元年には加賀の淨住寺、元和二年には、酒井の永光寺、同三年には羽咋の光孝寺の御建立と云ふやうに、御化導に繼れ日も足らぬ有様で、その徳化は他宗他門の人にも及び、元享元年には能登國鳳至郡楠比の庄諸嶽寺の定賢律師のお譲りを受けて、それまでは眞言律院であつたのを念宗門の道場に改め、諸嶽山總持寺と名けて、ますくお弟子方の御提擧や、愷信の化導に努めな

されるので、能登國の邊鄙ではありますけれども、教を請ふ者は日増に多くなり、他宗他門の高僧方まで衣を更へて太祖の門に入られると云ふ状態で、此の御高徳は何時しか、九重の雲深き處まで聞えまして、後醍醐天皇は、特に十ヶ條の疑問を以て太祖の教を受けさせられ、その御解答の高妙なると、本朝に佛法渡りてより以來未だ嘗て聞かざる所であるとか、御威斜めならず、勅使を下して紫衣を賜ひ、且つ勅額を賜はりて總持寺を官寺となされ、翌元享二年には、總持寺を以て、日本曹洞の本山賜紫出世の道場と定めさせられました。此の直指單傳の妙法は、ますく光輝を放つて参りまされたが、法性の大海には増減なけれども、寄せては返へし、返へしては寄する、大海の活作用で、太祖も不生不滅でありますけれども、時に生死の活機輪を現はされるので、後席を岷山禪師に譲りになり、正中二年の八月十五日の夜半に大衆を方丈に集め、

自耕自種閑田地、幾度賣來買去新、無限靈苗繁茂處、法堂上見却鐵人

との偈を書し、猶ほ種々最後の御說法がありました。化を他界に遷されました。嗚呼、私共の太祖の御傳記を窺ひますと、實に云ふべからざる感慨に打たれます。その一斑を申し上げますれば、御幼少の時の動作に就て考えて見ましても、非常に偉い方でありました。若し此の偉い資性を以て、他の事柄に従事なされたならば、肉身上

の快樂や、世の所謂名聞利譽と云ふ點に於ては充分に得られたてありませう。然るにそんな方面に志さずに、斷然世の名譽利欲を抛つて佛祖の門にお入りなされ、猶ほまた大概の人が、小成に安んずるにも拘はらず、非常なる勇氣を以て、汽車なく汽船なき時に東西を跋渉して、親しく師を訪ひ、磨いた上にも磨き、練つた上にも練りて、一大事を發明せられ、それから、身を能州の片隅に寄せて、眞實の佛法を擧揚なされ、強ひて世を厭はず、狂げて世に媚びず、上は王公より下は漁樵に至るまで、縁に任せて御化導なされたのは、その脱然たる御氣質、非常なる御勇氣、溢るばかりの慈悲の精神、到底私共の筆や舌の及ぶ所ではござりませぬ。傳古今東西を見渡しますれば、偉い人も尠くござりませんのでその色彩も種々ですが、しかし、大躰から分つてみますると、ソヨモレ一氏の云はれましたやうに、二種に分つことが出来ます。一は人類の爲めに自己を犠牲とするもので、他は自己のために人類を犠牲とするものです。如何に偉いと申しても、自分のために人類を犠牲とするやうなもの、英雄でも豪傑でも、私共は却つて排斥せねばなりません。その反對に人類のために自己を犠牲にする人は非常に尊敬の念を以て對せねばなりません。特にその事柄が物質的の事業でなく、精神上の事柄であるならば、層一層感謝の念を起さ

ねばならないのですが、今太祖の如きは無論此の人類のために自己を犠牲にすると云ふ側の偉人で、しかも、佛祖單傳の妙法で、上は高祖の事業を大成し、下は人物を門下に養成なさるや種々の著述をなされて、君が代の千代に八千代に細石の巖となるまで皇運の無窮なるが如く、此の妙法を無限に流布せられましたのは、冷かな無關係の人より見ても一種の靈威に打たるべきものであるのです、然るに我れ今日は何でありませう、闇より出て、闇に入るべき、憐れなる人生の旅路に、一大靈妙の光明を與へて下されたのは太祖であります、一時の憐みにさへ、その恩に咽ぶは人間の人間たる所です、所が太祖は我れに、無限に精神上の食物を與へて下されました、無限に靈妙の光りを與へて下されました、實に太祖は國として申せば、一國の光彩を添ふる所の宗教的偉人で、後桃園天皇より弘徳圓明國師と諡したまひましたのは尤もなことと考えますが、我れより仰げば萬世の父母であります、何卒互に此の無限の御恩を忘却せないやうに、朝な夕なに太祖の御慈悲に咽び、一刻も早く安心立命して、大寂定中の太祖に少しでも御安神が出来るやうにいたしたいものであります、

(注意) 太祖の御法要には可成太祖の聖語を傳光録や、十種疑問等から引證しまして、これに高祖の聖語を加へて、兩祖の御趣意が兩様にならぬやうに注意しなければな

りませぬ、而して、太祖の降誕會や、入滅會などの執行を勤めるやうに勸誘するが必要であらうと思ひます

(十種疑問奏對)

勅問、一曰、祖意教意、是同是別耶、

師曰、祖教如水波、豈有異耶、雖然、教者多是纏教網、而不能脫洒、故古來參祖意得旨者甚多矣、太原、字上座、初爲座主、在揚州、光孝講涅槃經、有一禪者、阻雪在寺、因往聽講、至三因佛性三德法身廣談法身妙理、禪者失笑、座主講罷、請禪者喫茶、問曰、某甲素志狹劣、依文解義、適蒙見笑、有不到處、伏望見教、禪者曰、實笑、座主不識法身、座主曰、如是解說、何處不是、禪者曰、請座主更說一遍、座主曰、法身之理、猶如大虛、際窮三際、橫亘十方、彌綸八極、包括二儀、隨緣赴感、靡不周徧、禪者曰、不道、座主說得不是、只說得法身量邊事、實未識法身在、座主曰、既然如是、禪者當爲我說、禪者曰、還信不、座主曰、焉敢不信、禪者曰、若如是、暫緩講、旬日於室內端坐、收念攝心、善惡諸緣一時放却、座主一依所教、從初夜至五更、聞鼓角聲、豁然契悟、云々、又西山亮座主、謁馬祖、祖問、講甚麼、亮曰、心經、祖曰、將甚麼講、亮云、將心講、祖曰、心如巧伎兒、意如和伎者、六識爲伴、侶爭解、講得經、亮曰、心既講不得、莫是虛空講得麼、祖曰、却是虛空講得、亮拂袖而去、祖召曰、亮亮、回首、祖曰、是甚麼、亮豁然大悟、云々、此外永嘉大師、圭峰宗密、良遂座主、長水子瑋、本朝傳教

弘法二師等參祖師禪得印證者不可勝計

勅問二曰達磨是香至國王第三子而四大五蘊具足身也依何乘一莖蘆耶

師曰諸佛諸祖有不可思議神通妙用非凡情所可測偏是佛法靈驗之所致也達磨雖是為香至國王王子實是觀音大士化身也豈可無神通妙用耶雖然於祖師門下以神通妙用不為奇特龐居士曰神通并妙用運水及搬柴

勅問三曰禪家所謂不立文字教外別傳矣雖然一大藏經皆是文字禪家語錄亦是文字若無文字佛祖言教依何流布末世耶

師曰文字是魚兔筌蹄也若得魚兔則筌蹄渾是無所用也修多羅教標月之指也若觀月則指亦無用所也然人皆認筌蹄不得魚兔認指頭不觀月故曰不立文字也世尊四十九年豎說橫說至最後拈一枝華示眾眾皆默然唯迦葉尊者破顏微笑是即不立文字教外別傳之極致也勅問四曰有曰此身四大假合也命終之時地大歸地水大歸水火大歸火風大歸風然則有何物墮他獄耶

師曰命終之時見四大離散無一物外道之空見因果撥無底之見解也依今生善惡業因來生感依身或生天堂或入地獄餓鬼畜生受種々苦諸經說分明也若是得為大解脫人可說無地獄無天堂也

勅問五曰人皆為先考先妣雖備靈供獻茶湯少許無消不知受供否

師曰如蛾採花但取其味不損色香何消之有哉又俱舍世間品曰中有以香為食由食香故名健達縛若少福者唯食惡香若多福者為食妙香云々

勅問六曰世尊於雪嶺六載修行明星現時忽然大悟曰我與大地有情非情同時成道矣悟人最可成道迷人依何成道

師曰經云始知眾生本來成佛云々眾生從本以來雖具佛性日用而不知釋迦老子成道端的開活眼觀之則艸木國土悉皆成佛也六祖曰悟則眾生是佛迷則佛是眾生生佛元無隔迷故為眾生悟故為佛眾生若無迷與佛何別故四十九年說法度迷眾生令見本有佛性也

勅問七曰金剛經曰一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出矣金剛經是釋迦佛所說也然曰一切諸佛從此經出不知此經為先耶諸佛為先耶

師曰經一字訓常訓法法者即理也此法理從天地未分之先諸佛出與以前明歷々也契此法理為諸佛遠此法理為凡夫仁者得之謂之仁智者得之謂之智阿耨菩提亦如此矣

勅問八曰經曰大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道云々今時人一生坐禪修行而如何成佛道耶

師曰大通智勝佛十劫道場之後佛法現前而成佛道教中所說分明也大通佛以大勇猛精進

力經十劫謂如食頃今時人亦具大信根以十劫不爲遠雖然於祖師門下別有生涯臨濟和尚曰大通者是自已於處々達其萬法無性無相名爲大通智勝者於一切處不疑不得一法名爲智勝佛者心清淨光明透徹法界得名爲佛十劫坐道場者十波羅密是佛法不現前者佛本不生法本不滅云何更有現前不得成佛道者佛不應更成佛云々然則以經文放在上面以臨濟語移來下面見之則何有難解哉

勅問九曰經曰清淨行者不入涅槃破戒比丘不入地獄矣清淨行者可入涅槃爲什麼不入破戒比丘可入地獄爲什麼不入

師曰於涅槃地獄存二見小乘見解也於善惡不二邪正一如處論什麼清淨破戒耶圓覺了義經曰衆生國土同一法性地獄天堂皆爲淨土一切煩惱畢竟解脫云々然則無涅槃可求無地獄可厭何論清淨破戒耶

勅問十曰朕以趙州無公案提撕年尙矣以未透徹爲恨如何工夫用心耶

師曰上來勅問之中此是最第一之義也故爲蠅書足強下註脚大慧禪師曰僧問趙州狗子還有佛性也無州曰無此一字子乃是描許多惡知惡覺底器仗也不得作有無會不得作道即不得向意根下思量卜度不得向揚眉瞬目處踈跟不得向語路上作活計不得在無事甲裡不得向舉起處承當不得向文字中引證但向十二時中四威儀內時々提撕時々舉覺狗子還

有佛性也無曰無不離日用如是做工夫看月十日便自見得也云々又曰狗子還有佛性也無州曰無這一字子便是箇破生死疑心底刀子也這刀子柄只在當人手中教別人下手不得須是自家下手始得又曰不得向擊石火閃電光處會直得無所用心無所之時莫怕落空這裏却是好處慕然老鼠入牛角便見倒斷也云々伏願皇帝陛下萬機餘暇十二時中舉着提撕話頭上疑破則千疑萬疑一時破那時徹證本地風光本來面目必矣至祝至禱

坐禪說教

第一席

とらんとするに六根なく、すてんとするに六境なし根塵ともに脱し、心境ふたつなからとも忘す、子細に見れば脱すべき根塵なく、泯すべき心境なし。これは太祖様が御示し下されたる佛法甚深の極意で、六根といひ、六塵といふのは佛法の上から、主観と客観とを申すので、此の世の中のものとは千差萬別さまざまにてはござりますが、これを二つに分けると主観と客観との二つの外はありません、即ち目を開いて見ますれば森羅萬象さまざまのものがありませんが、目を閉ぢて見ると、何にもありません、即ち我があるから物があるのか、物があるからわれがあるのか、どちらが先きて、どちらが後やら、わかりませぬ、が、兎に角にわれ／＼か物を見たり聞たりする本はといへば、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つであります、眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味ひ、身で觸れ、意で物を分別するといふのですからこれを六

根と申します、此六根によつて色、聲、香、味、觸、法といふ六つが現はれるこれを六塵といひます、即ち六根は主観となり六塵は客観となるのです、主観といひ客観と申せば言語がむつかしいやうですが、見る所の者、見らるゝ所のものであります、此見る所の主観、見らるゝ所の客観、更に言を換へて申せば、見るところの心、見らるゝ所の境界であります、此見るといふこと見らるゝといふ所二つながらあるべきでないといふと参究してゆくのが、坐禪の要ぢや、併し坐禪の事などといふものは、口といふことの出来るものでないから、千言萬語したからとて其要領を得るものではない、實際にこれをやるより外はないが、大抵は三界唯一心などといふ所に止まつて境はないが心だけあるやうに思ふてをる、これがそも／＼誤りで心といひ境といふは差別の考へて、宇宙の根本同一平等の所に至れば心といふ境といふ二つの差別があるべきではない、それをあるやうに考へてをるのが、われ／＼のまだ迷の境界を離れぬので、病氣だの健康だの薬だの毒だのと騒ぎ廻はつてをるのじや、毒は離れたがまだ薬がのこるといふやうではほんとうではない、もと／＼薬の要も知らぬといふのであつてこそ初めて無病健全のものといはれる、生來まだ病氣を知らぬなどといふのは、これより健全なものはない、今は主観だの客観だの心だの境だのと迷ふてをつたが、一旦

然として大悟し見れば心境俱に奪してしまふ、それで臨濟などには四料簡といふことがあつて、一には奪人不奪境で、人を奪つて境を奪はぬ、「これはこれはとばかり花の吉野山」満山の景色美しく現れてをるが、これを認める人を奪つて境を現はした、さて又、奪境不奪人といふは境を奪つて人をあらはしたのですべて主観的ですが、「夕涼よくぞ男に生れたる」といふやうなので、其人は現はれてをる、さてそれから一步進むと、人境兩俱奪て人も境も奪ふた、これは口ではいへぬが人だの境だのとの考のない所ぢや、併し此人境兩俱奪だけではゆかぬ、尙ほ一つあるそれが人境俱不奪ぢや、一休和尚が蜷川新左衛門に對して「何物かさし上げたくは思へども達磨宗にて一物もなし」といふたのは人も境も奪つた、全く何にもない境界、これを新左衛門が「何物もなきを賜はる心こそ本來空の妙味ありけり」とやつたのは、人境俱不奪ぢや、これが臨濟門下の話ぢやが、我が宗に於ては此道理をいとわかりやすく説き示し下されたのが此御教訓で、まこと佛々正傳の坐禪をいたしまして修行の功を積みますれば心境ふたつながら俱に忘するの境にいたる、しかも自由自在の境に達することが出来るのでありますさればこそ、太祖も「子細に見れば脱すべき根塵なく涙すべき心境なし」とは仰せられてゐるのであります、昔、臨濟宗の高徳、大徳寺の開山大灯國師は

坐禪せば四條五條の橋の上行き來の人を深山木にして

といはれた、何んと面白いてはなにか、坐禪をするのは決して山の中や静かな所ばかりには限らぬ、四條五條の橋の上とて、これは京都で一番賑かな所で衣香扇影ひまついき白粉の匂ひもすれば、麝香の匂ひもするまことに心を動かし易い所だ、そこでチヤント往來の人を深山木の如くに見て坐禪をするといふので、すこしも外の境に動かされぬといふのぢや、ところが、我が當宗の祖師の中でこれを正した方がある、それは何故往來の人を深山木と見ねばならぬかといふので、かう作りかへた、それは坐禪せば四條五條の橋の上往來の人をそのまゝに見て

どうだ、衣香扇影そのまゝに見て、しかも心を動かさぬといふのが、まことの坐禪ぢや、ワザく深山木に見なければならぬといふこしらえたこと、つくつたことがあつてはならぬ、といふので、此祖師の御和歌は大灯國師より一段進むてをるではないか、我が宗は活殺自在いづれの所にても修行してゆくことが出来るのであるから若い方々が品性を修養するにも、此坐禪の法により眞參實究なさればよいと思ひます、されば太祖も右讀み上げたる贊題の後に「實に慈慶の田地にいたる時、即ち諸佛の法藏を受持して正に佛祖の位に排列す」と仰せられて此の法によつて實究してゆけば佛祖

と同じ位に入ることが出来るが、この修行はなかく容易でないから、こゝに受戒入位の便があつて戒を受けさへすれば、眞に佛の位に入ることが出来るといふことがあつて、我が宗は上根上機の人にも下根劣機のものにも應用することの出来る自在なる宗旨であります。

第二席

夫れ參禪は靜室宜く飲食節あり、諸縁を放捨し萬事を休息して善惡を思はず、是非を管すること莫れ心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止て作佛を圖るとなかれ、豈に坐臥に拘らんや、

これは高祖様の普勸坐禪儀の一節で、正しく坐禪の仕方をお説かれたのであります、前席に申す通り坐禪の修行、功を積むて心境ともに忘るといふ境界にいたれば「坐禪せば四條五條の橋の上、往來の人をそのまゝに見て」も心を少しも動ぜられぬやうになるのはあるが、初めからさういふわけにはゆかぬ、ソコテ其順序を示されたのでござります、元來高祖様の支那より御歸りになりました時分には、此坐禪の法といふものがまた日本に傳はらなかつたのでありますから、高祖様は普勸坐禪儀といふもの

を著はされて普ねく坐禪のことを勧められたので、此禪といふのは天竺の語で禪那といふので支那の語に譯せば靜慮といふことであります、靜慮といふのは靜かに慮るで心のさまゝに移りゆかぬやうに靜めるといふことであります、毎度申す通り「移りゆく初め終は白雲のあやしきものは心なりけり」で、心といふものはどちらへでも動く、東へも西へも北へも南へも向ふので、六つの窓のある室に猿を入れたやうなもの、どちらからでも顔を出します、これを一所にチャンとちつけてゆくといふことが此坐禪即ち靜慮であります、さて此心を一所にちつけるといふにつけては、先づ其の身軀をも落着ねばならぬ、身軀を落ちつけずして心だけを落着るわけにはゆけぬ、勿論本宗の奥義にいたりますれば、必らず坐らなければ心が靜まらぬといふことはない、行も亦た禪、坐も亦禪、靜るも默するも、動くも靜まるも禪でなければならぬが、初心の人々にはさうはゆかぬ、ソコテ高祖様が何人にも入り易いやうに御示し下されたので、殊にこのスワルといふことが一番身軀を落着やすいため、釋迦如來も此坐禪によつて正覺を成したまひ、歴代の祖師方もこれによつて法の如くに修行せられたのであるから其法を御示しになつたので、此法も亦佛々祖々傳來の大法であります、それにはやかましい室では兎角心が散り易いて靜室よろしくて、靜かな室がよろしい食物に

も氣をつけて成るだけ多く食べないやうにし、諸縁を放捨し萬事を休息するで、何事にも關係せぬやうにして、心にも善だの惡だのであるとか、是とか非とかいふやうなことを思はず、心意識の運轉を停めるで心に彼れの是れのことと思はず、念想觀の測量を止め、さう思ふては悪いのかう思ふては悪いのといふ其心も停めてしまふので、六祖大師の御示しに「汝若し心要を知らんと欲せば但一切善惡すべて思量すると莫れ、自然に清淨の心昧に入ることを得ん」佛にならうの何んのも思はず此心を清めてゆくので、佛にならうの何ぞといふ考があつてもそれはまことの坐禪ではない、坐禪といふのは安樂の法門で身には危險なく心に憂惱のなく煩惱の繫縛全く解て自由自在となるのである、心にありのかうのと定めてをつては、物事に對して是非分別の心が起る、是非分別の心が起れば、そこには早や迷ひが出来る、或る僧が、靈雲禪師の所へ往て、直に純清絶點を得るとき如何と問ふた、それは心を明瞭々たる鏡のやうにいたしたが、どうだといふことである、スルト和尚「猶ほ是れ異常の流注」と答へた、これは流注といふのは煩惱妄想の事で、それはまだく煩惱だ迷だとの御言だ、それで僧は直ちに「如何なるかこれ異常の流注」と問ふた、さあ何故にこれが迷ひてござるといふと、和尚は「鏡の長へに明なるに似たり」で、それは鏡の明かなものぢやと答へた、鏡の

明なものやうであれば、よかりさうなものぢが、それを迷ひぢやといふのであるから、僧は「向上更に事ありや」此上のごとがござるのかと問ふと、和尚「有り」と答へた、僧は「如何なるか是れ向上の事」それはどんなものぢといふた、和尚は「鏡を打破し來れ汝と相見せん」とやつた、まだくまへは鏡といふところに止まつてをる、それではならぬ、其鏡も打破れ然らば遇はうといふのぢや、ナント面白いひてはないか、惡を去つて善、非を除いて是、迷を去つた悟ぢやと思ふか、其悟といひ善といふのも矢張分別の迷ぢや、凡聖一如、迷悟不二、何の所に是非善惡があるであらう、かういふ具合に心をちつてゆけば、明燈々たる鏡はさまざまの物を映しながら其光を失はぬ、悟れば悟るそのまゝに應用が出来ねばならぬ、この妙境に至りて初めて精神の修養も立派に出来るのである、これをしてゆくのが我宗であるから、高祖様はくわしく其しかたを説て「尋常坐處には厚く坐物を敷き、上に蒲團を用ひ、或は結跏趺坐、或は半跏趺坐、謂はゆる結跏趺坐とは先づ右の足を以て左の股の上に安んじ、左の足は右の股の上に安じ、半跏趺坐は但た左の足を以て右の股を壓す」で、かういふやうにしてさて左の手を左の足の上に安んじ、左の掌を右の掌の上に安んじて兩の

みせるかよろしい)さうして身軀を右にも左にも前にも後にもよらぬやうにして耳と肩と、鼻と脛とを對するやうにし、舌は上の脛につけて目は常に開き、鼻息の荒くないやうに心掛けて、それから姿を整ふたら口を開いてハハと溜息をつくやうに一度大きくして坐相のくづれないやうに右と左にゆられくと七八返身軀を動かして、それから不思議底を思量するで、善惡だの邪正だのといふ差別の思量すべきものを離れたところを思量するのでこれはなかくむつかしいが、つまり平等の悟りを差別の萬事萬物の上に働かせてゆくのである、或る僧が藥山惟儼和尚に、不思議底、如何に思慮せんと問ふた、これは不思議といふなら思慮すべからざるものではないか、此思慮すべからざるものをどうして思慮するのじやといふことで、スルト和尚は非思量と答へられた、どうだ不思議だの思量だのといふ所を通り抜けた所が即ち非思量であるのじやこの思量分別の通りぬけた所といふことが、別のところではない、まへに云ふ通り平等の悟を善別に働かせてゆくことで、味噌の味噌臭きは上味噌ではない、悟の悟臭いのはまとの悟りでない、この事物に應用してゆくと、丁度明瞭々たる鏡が、花が来れば花、鳥が来れば鳥とそのままにうつしてゆくやうにせねばならぬのである、これは我が宗門のもつともむつかしい所ぢやが書生さん達がよしこゝまでに至らずとも、

念々此境界に向ふやうに修行してゆけば、おのづから品性を修養することが出来るのだ、品性の修養といふのは別のことではない、心を外物に動かされぬやうにするのである心を外物に動かされず、心よく外物を動かすやうにしてゆくのが、我が宗門の特色で、品性修養といふことも此外にはないのであらう、修證義にも申してある通り、われわれもとく佛と同躰になることの出来るのぢやが、塵垢に汚れてをつては如何に寶玉でも立派なものとはいはれぬ、此塵垢のない所になるには修行せねばならぬ、修したからとて別のものが現れるわけではない矢張、ものとまゝの寶玉ぢや、これを修證不二といふので、このことを入り易く修證義で、修證義三十一席の御垂誡も、此の坐禪の御垂誡も別のことではないのであるからよく御修行なさるがよい

(一般注意) 坐禪は説教としていふべきではなく普勸坐禪義若くは用心記の講義にした方がよいのですが、このごろ青年學生までが坐禪のことを聞きたがりまするで一應は聞かす必要がありません、第一席は坐禪の極致第二席は其仕方を説いたのであります、第一席に主観客観といひましたのは哲學上の語で、昔は哲學は主観的の唯心論と客観的の唯物論との二つであつたので、今はこれが二つとも偏してをる、まことの道理は現象即實在にあるといふのであります、心境とも忘れたるところ却て

哲學に合ふのであります、このことを詳しく御話しなされるがよい、第二席は方法ですから、別のことはない

(格言) 太祖國師曰く

技藝術道醫方占相みな遠離すべし況んや歌舞妓樂誼諍論名聞利養ことくく之に近づくと可からず頌詩歌詠の類ものづから淨心の因縁たりと雖も、好んで營むことなかれ、文章筆硯も擲ちて用るざれ、美服と垢衣とは俱に着用すべからず、復た古教の如きは照心の家訓なりと雖ども多く之を見、之を書し、之を聞くべからず、多きときは則ち亂心の因縁なり、凡そ身心を疲勞するは發病の因縁なり、火雞風雞賊雞および海邊酒肆淫房窈女處女妓樂の邊、井びに打座すること勿れ、國王大臣權勢の家、多慾名聞戲論の人も亦た之に近づき住すべからず、大佛事大造營は尤も善事なりと雖も、座禪を専らにする人は之を脩すべからず、說法教化をも好むことを得ざれ、多衆を好樂し弟子を貪求することを得ざれ、多行多學することを得ざれ、極暗極寒極熱乃至遊人戲女の處、ならびに打座すること勿れ、叢林の中、善知識の處、深山幽谷これに依止すべし、綠水青山これ經行の處、溪邊樹下これ澄心の處なり、無常を觀じて忘るべからず、是れ探道の心を勵ませばなり、

(格言) 百丈禪師曰く

汝等先づ諸縁を歇め萬事を休息し、善と不善と世出世間の一切諸法みな記憶すること莫れ、身心を放捨して其れをして自在ならしめよ、心木石の如く辨別する所なく、心に所行なく、心地若し空なれば慧日自ら現じ、雲開いて日の出るが如く相似ん

涅槃忌説教

サテ、今日は申すまでも無い二月十五日であります。此の二月十五日……皆さん如何な日でありませうか、私は世界人類のすべてを擧げて感謝すべき一大記念日であらうと思ひます、かく申せば、或る人は二月十五日と云つても別段の事は無いでは無いか、日が西から出ると云ふことも無ければ、水が高きに流れると云ふことも無い、只二千八百五十年の昔、釋迦と云ふ方が御入滅なされた丈の事で、その釋迦と云ふ方も、一部分の佛教信者に取つてこそ關係があれば、佛教を信ぜないものには無關係であると申さるゝ方もありませう、成程、此れは一應尤もな道理であります、しかし、更に深く考えてみますれば、歴史の記憶して居ない以前のことは鬼も角として、人類の歴史あつてより以來、人の生死のことは到底數へ盡すことは出来ない程仰山でありませうが、九分九厘までは、年月の經つともにも消えて了つて、只残つて居るのは、洵に纒かてあります、その纒かある中で、しかも一種異つたる光彩を放つて、ただ今から何百年何千年前にこんな人が生れた死んだと云ふだけでは無く、世界に生

存して居る十四億もある人類の三分の一以上を感化して、肉體は死しても、その精神、その教義は依然として、水の觸るゝ所は皆濕し、火の觸る所は悉く燒くと云ふやうな偉大なる力を有して居るのは、誰れでありませうか、孔子でありませうか、ソクラテースでありませうか、基督でありませうか、マホメットでありませうか、成程、庸たしまるに追がない程に、東に西に仁の道を説かれた孔子も偉いてす、真理のために死をも辭しなかつたソクラテースも偉いてす、十字架上一身を犠牲にして愛の教を説きし基督も偉いてす、教のために血を見るも辭しなかつたマホメットも偉いてす、皆な偉いことは偉いてす、しかし、種々の方面から考えてみますれば、未だ飽き足らぬ所があるやうであります、しからば、此等の人の外には誰がありませうか、私はたゞ一人の釋迦牟尼佛があるだけであらうと思ふのでござります、基督の教も偉いてはありますが、今日では早や科學のために憐れなる境遇に陥りて居るではありませんか、孔子の教も偉いが現實界の道德倫理を教ふるのみではありませんか、然るに釋迦牟尼佛の教は如何です、科學が辛苦艱難をして、漸く得たる真理は、早や佛が二千八百年前にお説きなされたる所の一部分ではありませんか、科學以上の立脚地から、科學の眞髓を指導しやうとするのは佛教ではありませんか、また、たゞに今日の現實界

の道德倫理を説くのみならず、無限の空間と無間の時間とを貫通して居る絶対無限の立脚地から、人の心の奥に潜んで居る所の偉大なる要求、即ち宗教心と云ふものに充分の満足と與へ、猶ほ現實界の倫理道德の究竟原理を指し示すのは、此の佛教ではありませんか、かやうに考えてみますれば、佛教が他の教に遠く勝れて居ることを認むると同時に、此の教法をお説きなされた釋迦牟尼佛は否でも應ても崇拜せずには居られないではありませんか、してみると、現に佛教を信じて安心立命をして居るものは無論ですが、未だ佛教を信じて居ない所の人でも、此の世界に生存して居る以上は、人類進歩の最大指導者たる釋迦牟尼佛に對しては充分の敬意を捧げなければならぬと存じます、所が此の最大指導者たる釋迦牟尼佛の御入滅なされた日はと云へば、二千八百五十年前の今日です、世界人類のすべてを擧げて記憶し感謝すべき一大紀念日であると云ふことは至當のこととてござりませぬ、

特にお互は如何でありますか、十三宗三十餘派と宗派も多いのに、此の釋迦牟尼佛の御精神のまゝを一器の水を一器に移すが如く、綿々相承して來ました所の曹洞宗の宗義に心を安んじ、國も多いのに、萬世一系の皇室を戴いて居る日本國に生を受け、君が代の千代に八千代に細石の巖となるまでと云ふ限りない芽出度大君の下に身を安ん

して居ると云ふのは、非常なる幸福であると歎ばねばなりません、すてに、此の皇室の下に生存し此の直示單傳の御宗門に安心して居る以上は、今日はお釋迦様の御入滅になつた日であると泣き悲んだばかりでは、親が死んでから三年経つても五年経つても、泣いて居ると云ふやうなもので、それでは洵にツマラヌことであるから、今日お互は此の御入滅なされた日を機會として、何か釋迦牟尼佛のお思召にかなつたことを致さなくてはなりません、

しからば、何が釋迦牟尼佛のお思召にかなつた事であらうかと申しますと、昔から、八萬四千の法門、五千餘卷の經論と申して、洵に浩瀚でありますので、その中で探ふと云ふことになる、非常に困難ですが、私は先づ何より最後の御遺言に背かぬやうにするのが一番肝要で、またそれこそ、釋迦牟尼佛のお思召であらうと考えます、しからば、その遺言の要旨は何んであるかと申せば、波羅提木叉と云ふことで、最後の御教訓に、「當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし是れ則ち汝等が大師なり」とあります、波羅提木叉と申せば戒法と云ふことで、我れ／＼お互は、此の戒を尊重し珍敬して、此を持することは、大恩教主たる釋迦牟尼佛に事ふるが如くせねばなりません、否、此の戒を持することが出来れば、眞に是れ釋迦牟尼佛に事へ奉るのであります、

そこでその戒と云ふものは、どんなものであるかと申せば、細かなる箇條は指して申しませんが、要は三聚淨戒にあります、即ち第一には攝律儀戒と申して、佛の境を守つて一切の悪いことはせぬと云ふので即ち止惡です、第二には攝善法戒で、一切の善事は皆な行ふと云ふので即ち修善です、此の第一第二で惡を止め善を修するのですから、此れて澤山のやうであります、第三に攝衆生戒と云ふのがある、自分ばかりが高山に登つて、立派な風景を賞翫して居ても、それは自利主義でそれではいけません、佛敎を信するものは、すべて他人のためにすると云ふ心掛が肝要で、未だ登らぬものは、その風景を説いて聞せるのは無論のこと、一旦登つたならば、必ず下つて来て、他のものを勧め手となり足となつて頂上の風景を見せて愉快を與へなくてはなりません、此れが第三の攝衆生戒であります、また此を饒益有情戒とも申します、此の三が能く合點がいつて何卒此を少しでも行りたいと云ふことになれば、不知不識の間に身口意三業の上に現はれて、實に釋迦牟尼佛の御精神にかなつた人間となり、此を國家の上より申せば國家の忠臣良民であります、かやうに個條を三つとして申せば外から規則をクツツケたやうに思ふ人もありませんが、決してそうではありませぬ、人々具有の佛性、即ち慈悲心孝順の現はれた丈のこと、佛性とか法性とか申すのも結局此

の外にはありませぬ、特に當宗では此の事を充分に檀信の各方に承知して實はなくてはならないと云ふ所から、御教諭と云ふものを示されました、それは

惟ふに夫れ我が教主釋迦牟尼佛の、始めて無上正覺を成したまへるに膺りては先づ波羅提木叉を結して、父母師僧三寶に孝順せしめ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すとのたまひ、又其の大概涅槃に入りたまふに臨みては、汝等我が滅後に於て、當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、是則ち汝等が大師なりとのたまへり、謂ゆる波羅提木叉とは、今我が直指の宗乘に於て、佛祖正傳の佛戒と稱するもの、世出世の一切の眞理、一切の道德、皆此の一法に包容せざるは無し」されば如來一代の垂教甚だ多端にして、諸宗諸祖の傳唱する所また區々なりと雖も、普ねく一切衆生をして速かに成佛得道せしむるの無上法門は、只此の佛々祖々の面授相承したまへる授戒の一法に過ぎたるは無し、我等またく生を人界に受まのあたり佛世に遭ひたてまつらざるの憾なきに非ずと雖も、幸ひに滅後の大師に遭ひたてまつりて、親しく單傳の戒服に與かりたてまつるとを得たる、何の喜びか復た之に過ぎんや、されば未だ受戒せざる者は、速かに至心懺悔の一念に、無量劫來の罪障を消滅し、疾く即入佛位の大戒を受けたてまつりて、眞に諸佛の嫡子たらんことを願ふ可し、

既に受戒したてまつりぬれば、其位大覺に同じふし已るを以て、貴賤貧富を問はず、智愚老少を擇ぶことなく心に思ふ所は悉く利生の發願となり、身に行ふ所は都へて報恩の行持となるなり、謂ゆる利生の發願とは、諸の人類は更にも言はず、凡そ生とし生けるものを見ては、皆其の苦惱を除き之を安樂ならしめんと心に願ふなり、謂ゆる報恩の行持とは、凡そ日夜の行住坐臥云爲動作する所、皆以て君父師友等の洪恩に報謝したてまつらんが爲めにするなり、「苟くも是の如くにして世に處し生を度らんには、入つては家庭に孝貞敦厚の美風あり、出ては國家に忠誠に社會に信實なることを得て、戒徳ますく生々世々に展轉增長し、願行いよく在々處々に、充滿彌綸するが故に、現當二の安穩快樂、何事か復た之に如くものあらんや、抑も今是の如く最尊無上なる正法に遭ひたてまつれること、是れ偏へに高祖承陽大師および太祖弘徳圓明國師の傳承弘通したまへる恩徳と、歷朝敎聖なる天皇陛下の外護深厚なる仁澤とに由るものなれば、別して一系萬世の皇運を、天壤無窮に扶翼したてまつり、又兩祖の遺法ますく光輝を宇内に發揚せんことを冀かふべき者なり、

實に此の通りて、釋迦牟尼佛に對しては無論のこと、高祖承陽大師太祖弘徳圓明國師

の御恩徳に酬ひ奉り、またこれと全時に一系萬世の皇運を千代に八千代に扶翼する所以てありますから、何卒此の一大紀念日を機會として、此の御敎訓に背かぬ様に互に努め勵み、此の最大の紀念日を人々一生涯の中での改惡遷善と云ふ一大事實の紀念日となしたいものであります

(注意) 此の説教は釋迦如來と高祖太祖と先聖後聖との揆一なりと云ふやうに、聯絡を附けて申すことが肝要です特に聴衆が學生や官吏や少し學識あるものがある場合には、涅槃の意義を説いて、佛身常住の談に及ぶも宜しいです佛の入滅出生の年月日には頗る異説がありますから、村上博士の「佛敎講論集」の中のこれに関する部分は一讀して置く必要がありますまた、少し箇條が多端になりますけれども八大人覺を説くのも宜しいです、只それを説くには、吾れくの實踐道德の標準として行へるやうに注意して説かねばなりません

(参考) 参考には、ケールラス氏の「佛陀の福音」伊藤氏の「釋迦實傳記」があります

ほか人のこゝろの中をよそなからしるやさとの光りなるらん (源俊賴)

世をてらす佛のしるしありければまた燈火も消へぬなりけり
 祈るとも神やわ受けん影をのみ御手洗川の深き思ひを
 世の中をおもひつらねてながむれば空しき空に消ゆる白くも
 行末をおもひつらねてながむれば空しき空に消ゆる白くも
 世の中は夢ぞとまではしりながら驚きがたき身こそつらけれ
 見し人はみな霜露ときえうせぬさておとろきぬ我が心かな
 慈悲の眼に悪しと思ふものそなき罪ある身こそなほあはれなれ
 元よりも忍ぶの國に忍ぶればしのひてかよへ彌陀の淨土へ
 爲せば成る爲さねば成らぬ何事も成らぬと云ふは爲さぬゆへなり
 上もなき玉を心にもちながらみかゝんとする人のなきかな
 父母の影はしふもな子はいかに身あしをわけていたゞきもせよ
 法の身の月我が我を照せとも無明の雲の見せぬなりけり
 もちあうくるほどはかた／＼かはれども一つ悟りの報ひなりけり
 とにかくに人の心になふ身はもとの都を出るなりけり

(覺忠大僧正)
 (業平朝臣)
 (俊成郷)
 (源高秀)
 (日海上人)
 (西行法師)
 (古歌)
 (古歌)
 (古歌)
 (速如上人)
 (千觀法師)
 (慈鎮和尚)
 (全前)

布教錦囊

布教と云ふものは、今更事新しく申すまでも無いが、布教の第一義は信仰を得せしむるにあるのであります。さてその信仰を得せしむるには、臨機應變で豫め一定することとは出来ませんが、可成、教理を手近く説き、此に興味ある詩とか、歌とか、若くは俳諧などを引き、更に事例を擧げて話し、空談放言に陥らぬやうに注意せねばなりません。猶ほ特にこゝに申上げたいのは、古來から、法醫因の三と申す中の因縁ですが、今まで布教師の用ゐて居る處は、多くは、歴史の記憶して居ない、妖怪談でありますから、今後は是非とも、かやうな因縁を避けて、歴史も記憶して居るし、また、常識で考へても成程と思つて、人が首肯するやうな事を引くやうにせなければなりません。左に掲ぐる所のものは、此の點に就ては大に注意して居りますから、細に部門は分ちませんが、その人／＼の考へて活用なされたなら宜しからうと思ひます

●新見伊賀守の謹厚

新見伊賀守正路は、天保年中大御所の御側取次にて、謹慎敦厚を以て稱せられたる近

世の名臣なり、或る年の元旦の詠に

初春のかじみの餅に向ふても濁らじと思ふ我が心かな

●農家の寶物

水戸に木血の民部とて富豪の百姓あり、義公、汝が家は累世の富豪なり、定めて寶物
あらんとてその家に臨まれしに、鍛鎌の類百人分を列ねて御覽に供し、さて云へるや
う、百姓の家にはこれより外には御覽に供すべきものなしと、流石の義公もこれには
餘程感ぜられたりと、

労働は神聖なり、飽まで自分の職業に興味を帯びて行るのは楽しく世に處する最善の
方法なり、

●上杉謙信敵に鹽を贈る

上杉謙信は武士の花なり、武あり文あり、而してまた俠骨あり、謙信武田信玄と川中
島に對峙す、甲斐は山國なれば鹽を産せざるに、今川北條二氏相謀つて其送路を絶ち
しかば、甲斐の民大に苦しむ、謙信聞て書を信玄に贈つて曰く、吾と君と争ふ所は干
戈にあり、今聞く駿相二州君を苦むるに鹽を輸らざるを以てすと、何ぞ其れ陋なるや、
今より給するに北越の鹽を以てし、君の糶に取るに任せんと、遂に令を下して曰く、

商賈等力めて鹽價を廉にせよ、利を恣にし以て敵國の無事を苦むる勿れと、甲斐の民
深く其義に感ず

●黒田孝高人を救ふに吝ならず

黒田孝高は豊太閤の麾下に在て、祿を食むこと少からず、然れども性極めて謹儉なる
を以て、妄りに美衣珍膳を用ふるなし、一日日根野高吉なるもの、朝鮮從軍の費を缺
き、來つて銀百枚を孝高に借る、後高吉役終りて朝鮮より歸るに及び、前に借る所の
金を携へて、孝高の邸を訪ひ、曩日の恩を謝す、時會々使に綱を斷らして、孝高の邸
に詣らしめたるものあり、孝高即ち家臣に命じて其の骨を羹とし、高吉を饗す、高吉
密かに其客を笑ひ、即ち懷を探りて若干の銀を出し、謝して曰く、聊か以て利銀とな
すと、孝高敢て之を取らず、答へて曰く、吾は只足下の急を救ふのみ、豈に敢て利を
貪るものならんやと、高吉聞いて其廉に伏す

●聖主の克己

克己と云ふことは、心靈修養の第一着手なり、後光明天皇英明至徳、近代の英主なり、
而して性雷を畏れ玉ふこと甚だし、一日侍臣に曰はく、學問の要は克ち難きに克つに
あり、朕が雷を畏るゝは病なりと雖も癖なり、焉んぞ之に克たれざらんと、爾後雷雨

ある毎に必らず玉坐を紫宸殿の廊廡に移し、靜坐雷の止むを待ち玉ふ、終に其雷を畏るゝの性を變じ玉ふと云ふ

●命の輕重

人身得ること難し佛法値ふこと稀れなり、人は猥りに死するその道を得ざるは、人の價值を知らざるが故なり、自己の命然り、他の命もまた然り、古賀精里嘗て某侯の座にて書を講ず、講了りて後老臣某問ふて曰く、近頃重罪のものあり、其犯狀は云々なり、此刑は如何すべきや、精里の云く、他日詳かに考へて答ふべしと、數日を経て又其邸に至る、老臣迎へて曰く、本日は講日に非ざるに、先生如何して來臨あるや、精里の云く、前日の問、考へ得たる故に來るなり、老臣云ふ、過日は講後の話柄に供せしに、故らに來邸を煩はすは恐懼に勝へずと、精里佛然として云く、一國の政を執りながら、人命を以て一場の談と爲すとは吾が知る所に非ずと、急に起て去らんとす、老臣深く謝すれども聽かず、侯聞て趨り出て、爲に反覆陳謝して乃ち止む

●澤庵和尚退屈せぬ法を教ふ

希望の高山は攀ぢ難し、只倦むことなく、日々に進むものこそ最後の勝利者なれ、稻葉美濃守勤事の暇なかりして、或時品川東海寺の澤庵和尚訪問られしがば、美濃守和

尚に向て、勤仕の長き日に退屈せざる様の教諭を下し給へよと云ふに、和尚直に筆を採りて

無再此日、寸陰一尺璧

淺ましやちもへば日々の別れかなきのよのけふにまたもあはねば

と記して與へしに、濃州此作を讀みて深く感嘆せしより、永日長夜の退屈なかりしとぞ

●妄語を誡しむ

口は禍の門、常に此の關門に注意せざれば、思掛なき禍を蒙るものなり、殊に慎むべきは妄語なり、司馬氏の如きは以て人の龜鑑とすべきなり、宋の司馬溫公五歳の時、一青皮胡桃を得たり、然れども皮を脱する能はず、婢爲に之を脱し與ふ、女兄外より來り問ふ、誰か之を脱す、曰吾れ自ら脱す、父叱して曰く、小子安ぞ觀語するやと、公此れより省するあつて、終身敢て妄語せず、人を待するに唯だ至誠を以て尚しとなす

●紳士と酒

酒の害は、今更云ふの要なし、多く好むものは、漸くに此を減じ、飲まざるもまた可

なるものは断じて酒杯を手にすべからず晋の陶侃が母の誡を聞きて終身酒を断ちしが如きは、一決して撓まざるの勇者にして、此人能く呉を討滅して晋業を輔くるの大功を成せり、北條泰時が和田合戦の前夜、酒に酔ひて、其出陣に苦しかりければ、「武士は何時にも急に應ずるの心懸なかる可からず、若し沈酔して大切の場合に後れなば、至極の恥なり」と、是より禁酒を思ひ立ちしが、合戦三晝夜、屢りに渴を催しければ、兵卒に水をと命ぜしに、酒を持来りける、泰時其酒なるを覺りしも、渴に勝へずして之を飲み、前夜の決心を變じたるを悔ひ、其勇なきを嘆じたり、泰時は陶侃の勇に劣るも亦其自ら戒むる深さを知るべし

猶ほ、現今の人にては左に擧ぐる二三の人の如きは、實に古人に耻じざる人と云ふべし

●米峰小山正武氏

小山正武氏は舊桑名の藩士なり、米峰と號す、維新の際桑名藩朝敵となり、薩の西郷小平兵を率て之を責むること甚だ急なり、米峰時に齡ひ十九歳にして桑名藩の隊長たり、兵を用ふる神の如く、孤城を固守して敢て降らず、西郷小平をして彼の城を守る者は誰ぞと問はしめ、其の城將の年齒僅に十九歳の少年なるを聞き、慨然として我終

に及ばずと絶嘆せしめたりしが如き以て米峰の凡鱗にあらざるを知るべき也、明治政府成りて政權薩長の手に従りて此の三十有餘年、米峰も亦曾て出て、大藏省に奉仕し書記官と爲り、高知縣に出張中、地價の不公平なるを聴き、主務參議の決を仰がず専断を以て之を修正し、遂に越權を以て免職せられしも當時の庸官俗吏の心腹を寒からしめし如き豪放果敢の資性なるも、博覽強記、學漢洋に通じ、又詩文に長ず、故に若し米峰にして志を枉げ節を屈し、長官に媚び、意に滿たざるも罵倒する若きとなからしめば蓋し今日に在ては渡邊國武以上に在るや必せり、然れども米峰終に之を爲さず、爾來野に在る二十年、詩を賦し、酒を飲み、時に滿腹の磊塊を吐けば長大の論文となる、世に公にせらるもの甚だ多し。

數年前の事なりき、或人米峰の牛込矢來町の居を叩く、其の家容易に知れず、乃ち車宿に就て問ふ、一車夫曰く、

アの酒に酔ふ小山さんですか

と、他の一車夫曰く、

馬鹿を云へ、酒を飲ば誰でも酔ふは

と、先の男曰く、

イヤ小山さんの酔ひかたは格別だからナ

と、某覺えず一笑し斯くて氏の居を聞き初て面接す、年齢五十有餘、態度沈着にして應接最も懇篤、濃厚長者の風あり、然れども個は米峰の醒めたる時なり、其の一たび杯を含み、顔漸く紅を潮し來るや、談論風生、口角雲煙を飛ばし、眼中王侯將相なく熱嘲怒罵到らざるなし、蓋しアルコールに毒せられし時なり、酔ふて而して放笑高歌する可なり、古今の英雄を罵るも亦興あり、米峰の亂醉するに到ては其の狂態實に人をして駭避せしむるとあり、或人米峰の爲に「米峰先生醉歌行」と題する歌の中に牛込の町のはづれの居酒屋に腰打ちかけし大丈夫憐れ日暮れて人の通はぬ早稲田道ぶろちの神の高軒きすると云ふあり以て、米峰が居酒屋にコップ酒を被り、亂醉して大道に軒聲雷の如き態を知るべき也、友人の憂ひ家人の心遣ひ如何計りなるかは推知するに足る。然るに一朝此の酒漢が憤りを發して、三十餘年の惡習を打破し、禁酒會の名譽會員となり、基督教會に於て天下に向て禁酒を誓言せしと云ふに到ては誰か其の大勇に敬服せざらんや

東京禁酒會に安藤太郎氏あり、米峰一日安藤氏と會見す、安藤氏亦壯時有名なる飲酒

家にして年齒亦米峰と相若く、且つ維新の當時與に朝敵たりし事も亦同じ、是を以て此二氏の會合は頗る奇遇なりし也、其の安藤氏が滔々として飲酒の害を説くや、米峰傾聴多時、悔悟する甚しく、終に流涕するに到り豁然として禁酒するに決して即時安藤氏に誓へり、是に於て氏は米峰を禁酒會名譽會員に推舉し、且つ氏の紹介にて禁酒演說會の辯士となり某會堂に於て自今禁酒する旨を天下に宣言したり、本より天下知名の米峰の演說とて簡潔明晰、大に時の聽衆を動かせりと云ふ。

●中島氣峰氏

『日本』新聞記者に中島氣峰氏と云ふあり、高知縣の人にして年齒三十有八、日本社中有數の良記者なり、氏の資性極めて溫和柔順なれども亦毅然として言すべからざる氣骨あり、氏の酒を好むこと色を好むより甚しく所謂酒、煙草、三道樂は立派に兼備し、就中酒を愛す、酔へば即ち大言壯語し、諧謔百出、隨處に放溺し、甚しきに到ては衆人環坐の席に於て陰部を露出し、惡戯を爲すことあり、其の癡態たる人をして面を掩はしむ、然るに氏一日私に悔悟して曰く、我れ飲酒すること二十餘年、願て何の得る所ある、若し得る所ありと云へば醉中の快味あるのみ、財を糜し、身軀を害し、理性を破り、朋友に笑はれ、家族の迷惑あるにあらずや、禁酒の結果は即ち如何、身軀健

固になり、理性に富み、記憶力強く、家人安心し、而して尙財囊に幾分の餘裕あり、我は斯く感ぜり、我は即時に禁酒せん哉と、事の序に煙草も服すべしと、爾來精進勇猛、自誓を實行すること二年餘、此の間財政、經濟に關する書を讀むこと幾何の部數に及べりと、友人戯れに君少しく初めては如何と云へば笑て「止めて置かうと、眞の大勇は自個の慾を征討するに在りと云へば中島氣輝氏の如き亦勇者の一人也。」

●自重せよ

怒は奴心なり、心を天地の大と比せば些々たる毀譽固より關する所にあらず、以て萬衆の中に於て主たることを得、以て死すべき時に死することを得、木村長門守重成、其未だ幼少なりし時、茶道某と云へるもの、口論の果怒つて、扇子を以て重成の頭を打ち、其烏帽子を落したることありしに、重成は少しも怒る氣色なく、平然として笑つて言ひけるは、汝士の徒としては打ち捨て置く可きものに非らず、宜しく一命を貰ひ受けざる可らず、然れども汝を殺す時は我も亦死せざるを得ず、然るに我が命は大切なり、君の一大事あらん時の御用に立つ可きものにこそあれ、汝の如き者を相手として捨つ可き輕きものに非ず、故に今は許して置く可し、必ず忘れなせよと云ひて、少しも顧みざりしかば、其友人等聞き傳へて云ひけるは、重成怯懦命を惜むを以て、

言を左右に托して争を決せざるなり、此くの如き怯者、焉んぞ君の爲に命を棄ることを得んやと、相排りて一人の重成の重大に服するものなかりき、然るに後慶長の取起るに及んで、重成大坂陣中に在て、智勇第一の將と呼ばれ、數度の激戦に馳驅して、會て一度も後れを見せず、次て其和睦とのひて秀頼家康と盟書を取り交はすの時に至り、大坂の諸將等、一人として其使節に當らんと云ふ者無かりしを、重成自ら請ひてこれを勤め、單身敵中に入りて、少しも恐るゝ色なく、味方に充分利益ある約定をなしたるのみならず、後又元和の戦起るに及んで、再び大坂方の大將として、花々敷き働きをなし、君の馬前に一命を殞として、美事の最期を遂げしこと豈もさきに云ひし言葉に違はざりければ、先きに排りし人々、初めて重成の沈勇なるに服し、相傳へて美譚となせりと云ふ

●小を侮るべからず

水の滴り微なりと雖、漸く大器に滿つ、人の罪惡また此の如し、注意せざるべけんや、信長幼時一日庭に遊ぶ、小蛇あり出づ、信長其首を握り侍臣に謂て曰く、此の如き者勇と爲す乎、左右曰く是は小蛇なり、何ぞ以て勇と爲すに足らんと、信長曰く、蛇小と雖も必ず毒あり、若し小を以て之を侮らば、予主人なれども幼なるが故に汝亦予を

悔る乎と、侍者僱服す

●利他の行

利他は空論にわらず、要は實行にあり、野中兼山名は良繼、土佐藩の重臣なり、天寶剛毅、博學にして材幹あり、學ぶ所を國政に施して治蹟頗る見るべし、瘠地を變じて肥土となし、農兵を置き、藥草を栽み、蜜蜂を飼育し、勤めて殖産興業を計る、又津呂御崎といふ處は、激浪掀翻危険いふべからず、毎歲船舶の覆没するもの甚多し、兼山依て大計を設け、水中の峻嶮を悉く破碎し、遂に永く風濤の難を救ふ

●誠心天に達す

養老中漆部司令史石勝、秦の大麻呂と、漆を盗みて罪に坐し、並に流に處せらる、其子祖父麻呂年少かに十二、弟安頭麻呂は全九歳、季弟乙麻呂は同く七歳なりしが、三人一同に打連れて官衙に詣り、死を冒して請ふて曰く、臣等が父漆を盗む、蓋し子多く家貧にして養ひ難きに由る、冀くは臣等三人官奴となり、以て父の罪を贖はんと、養老帝聞いて其志を憐み、請に准ふて石勝の罪を赦し、獨り大麻呂をして配所に赴かしむ、已にしてまた祖父麻呂以下を免し、歸つて其父を養はしむと云ふ

●人心の美

人の心は善か悪か、吾人は寧ろこれを事實に徴せん、殘忍刻薄を以て名高き土耳其帝アムラス、曾てバグダツト府を陥れて、降人三萬を獲たりければ、將士に命じて將之を塵にせんとせしに、降人中に一樂人あり、アムラスに請ふて曰く、生前若し帝の前に於て、一曲の樂を奏するを得ば、死して餘榮ありと、アムラス之を許す、樂人即ち樂器をとりて之を奏し、バグダツトの陷落土軍の勝利を唱ふ、其聲瀾曉として或は高く或は低く、乍にして悲惨、乍にして壯烈、荒涼黯黯の光景、恍然として目前に現れ來り、數萬の軍人皆感嘆落涙せざるなく、流石のアムラスも、そとろに憐憫悲哀の情を催し、思はず涙を漉ぎ、遂に俘囚三萬人を解放せりといふ

●家庭の注意

江藤新平初め家甚だ貧しく、夫妻の衣食殆んど窮す、然れども常に兒に與ふるに、最上の菓子をして、人惟んで之を問ふ、新平曰く「子をして他を羨み、自から賤みて鄙吝の志を生じ、人に長たるの氣を挫かしむ可らず」と

(ヘルハルト)

善良の母は教師に愈る

家は婦人の版圖

婦徳の長短をみて邦國開明の度を知るに足れり

(エメルソン)

善く家を受する人は邦國を利す

父母其子を養ふて教へざるは是れ其の子を愛せざるなり

婦人は庖厨を理むることを習ふべし

小兒は母の再度の生涯

本夫外を守り本妻内を守る天下の通義なり

小兒生長後の行狀の善惡は其母に關係す

(柳屯田)

(徳川家康)

(ナポレオン)

●子の親に事ふる心得

第一條

當に生を治むることを念ふべしこれは親の生産物を大切に取締ることである

第二條

早く起きて奴婢に教令し時に飯食を作らしむべし

第三條

父母の愛憎を益さるべし

第四條

父母の恩を念ふべし

第五條

父母に疾病あれば當に恐懼して醫師を求め之を治せしむべし (佛說善生經)

●親の子を育つる心得

第一條

當に惡を去り善に就かしめんと思ふべし

第二條

當に計算書疏を教ふべしこれは讀書算術の世を渡るに最も大切なる學問をば

時を失はぬ様に教へて後れを取らせぬやうに氣を附けよとの教へてある

第三條

當に經戒を保つことを教ふべし經戒とは諸の惡を作す莫れ衆の善を奉行せよとのことである

第四條

當に早く爲めに婦を娶るべし我子が年頃になつたらば親の方から氣を聞せて、

時を失はぬ様に妻を娶つて遣れ、左なくては自然色事に就て過失が出来易い、又娘

に聲を迎るのもその通り、又娘を他に嫁入さずするの時を過さぬ様にせよとの御親

切なる御世話である

第五條 家中の所有は當に之を給與すべし (佛說善生經)

●弟子の師匠に對する心得

第一條

當に之を敬ひ憚かるべし憚かるとは遠慮をすること餘り馴れくしくなつて

はその教が軽くなるからの事である

第二條

當に其の恩を念ふべし昔しも忘るゝ者があたと見えるが今は殊に甚しいから

深く釋尊の仰せを胸に疊み込めて戴きたいものぢや

第三條

教へらるゝ所は是に従ふべし

第四條

思念して厭はざるべしその教へられたことをは能々心に思ひ念うて忘れぬ様

に、厭はぬ様に之を堅く守らねばならぬ

第五條 當に後より之を稱譽すべし(師匠の面前で賞めては却て諂ひになるから盛に廻つて褒めるがよいぞとのこと)(佛教養生經)

●師匠の弟子に對する心得

第一條 當に疾く知らしむべし

第二條 當に他人の弟子に勝しむべし

第三條 知り已つて忘れざらしめんと欲すべし(これは同じ教ふるのにも實意を以て可

嗔に教ふる事である)

第四條 諸の疑難あらば悉く爲に之を解説すべし

第五條 弟子の智慧をして師に勝らしめんと欲すべし(これは誠に親切な御教訓である、

兎角人の師匠となつては弟子の自分よりユククなることを厭ふのが凡人の常である、常であるからその教授が不親切となる、不親切であるから弟子の方でも深く其恩を

思はぬ、恩を知て恩に報ゆるは其の親切の情に感ずるからの事である)(佛教養生經)

●妻の夫に對する心得

第一條 夫、外より來れば當に起つて之を迎ふべし(横着を構へて居ては夫に對して不

敬になるからの事である)

第二條 夫出て在らざれば當に炊蒸掃除して待つべし(炊蒸とは食物を拵へて置くこと、

又内外を奇麗にして夫の歸り來るを待てよとの事である)

第三條 外に嬌心あることを得ざれ(我が夫の外に色男を拵へたり又はその様な心を以て交つてはならぬとのこと)

第四條 當に夫の教誡を用ふべし(所有の什物を藏匿することを得ざれ(夫の教へ曉むることは快く之を用ひねばならず、又夫の所有品は勿論、自分の所有物をば他人に藏しても我が夫には只の一品でも匿す様な事が有ては夫から嫌疑を招く種となるゆゑ、隠さぬ様にせよとのこと)

第五條 夫休息すれば蓋藏して乃ち臥すことを得よ(夜分夫が寐床に就て休んだならば、妻は跡に残り蓋をすべき物には蓋を爲し、物容に藏むべき物は之を藏め且つ總ての取片附をしてから休めよとの事である)(佛教養生經)

●夫の妻に對する心得

第一條 出入には常に婦を敬ふべし(これは夫として婦に黙つて出たり黙つて歸つたりしてはならぬ、チャンと往く時も歸つた時も其の何れに往き如何なる用事して來た

といふことを知らしめて敬禮を失はぬ様にせよ禮を失へばタトヒ夫婦の間柄たりとも不和を生ずる様になるからとのお世話である

第二條 之に飲食せしめ時節を以て衣被を與ふべし(夫たる者は妻に對して飲み食ひの事から身の廻りに不自由をさせてはならぬとのこと)

第三條 當に金銀珠璣を給與すべし(小使錢は勿論のこと其他日用の道具から頭の飾り物まで與へよとのこと)

第四條 家中の所有は多少悉く用ひて之に付すべし(自分許りて自由にせず妻にも其の自由を與へねばならぬとのこと) (佛敎養生經)

第五條 外に於て邪まに婦女を蓄ふることを得ざれ我が本妻の外に妾などを置たり又は他人所屬の婦女に心を寄せては家内の和合を破るから深く慎まねばならぬとの仰せてある) (佛敎養生經)

●片言雙語

滔々數萬言の論議も人を益するなきことあり、されど片言雙語も眞理に觸れ人心の琴線に觸るゝ時は聴く人警醒す
孟子曰く、善を責るは朋友の道なり

曾子曰く、吾日に三たび吾身を省る人のために謀りて忠ならざるか、朋友と交はりて信ならざるか、傳へて習はざるか

史記に曰く、其人を知らんと欲せば其友を視よ

又曰く、其子を知らんと欲ば其の友を視よ

莊子曰く、君子の交りは淡きこと水の如く、小人の交りは甘きこと醴の如し、君子は淡し以て親しく、小人は甘し以て絶つ

文中子曰く、勢を以て交はる者は勢傾くときは則ち絶え、利を以て交はる者は利窮するときは則ち敗る、君子は與からざるなり

孔子曰く、己に如かざる者を友とすることなかれ

ペーコン氏曰く、是世に在りて眞實の朋友を有せざる者は、恰も砂漠の中に在るが如く、憐れ寂寞なるものなり、

アリストートル氏曰く、萬人悉く朋友とならば茲に裁判を要せざるべし、然りと雖も

萬人悉く正なるも尙友誼を要す

徳川家康公曰く、人に交るには恭敬を主とすべし、假にも驕慢の態をなすべからず

ペーコン氏曰く、眞友なき人は眞に憐むむべき孤獨の生涯に在る人と謂ふべし、そは

真友無くんば、世界は恰も荒野の如くなるべければなり
 フラシクリン氏曰く、誠實と勉強とを不易の友とせよ
 フキールマンング氏曰く、二心ある朋友は最も危険なる讐敵なり
 シセロ氏曰く、艱難を経て初めて真友となる
 列子曰く、言美なれば則ち譽美なり、言悪なれば則ち譽悪なり、身長ければ則ち影長し、身短かければ則ち影短し、名は譽にして身は影なり
 チャーレス、ノルゼンド氏曰く、芳名は巨萬の富に優れり、學習は金錢に優れり
 孟子曰く、誠なる者は天の道なり、賊を思ふは人の道なり
 程子曰く、謙なる者は人の至徳なり
 孔子曰く、其言ありて其行なき、君子は之を耻つ
 ベーコン氏曰く、徳は香氣の如し、之を碎けば益々香し
 又曰く、節儉の要は少許の利益に注意せんよりは寧ろ少許の費用に注意するに如かず
 論語に曰く、仁者は必ず勇あり
 又曰く、仁者は敵なし
 又曰く、仁者は憂へず

セチカ氏曰く、時間には真理を發見す
 バイロン氏曰く、時間には畢竟萬事を定む
 獨逸の俚言に曰く、忍耐は快樂の門なり
 プルノ氏曰く、忍耐の底には天あり
 プラトーン氏は曰く、己に克つは勝利の最大なる者なり

曹洞宗説教大全 終

皇清宣統元年...

明治三十五年十一月廿八日印刷
明治三十五年十二月三日發行

曹洞宗院敷大金奥付
定價金壹圓五拾錢

編纂者兼
發行者

鴻盟社編輯局

東京市芝區露月町十八番地

代表者

今村金次郎

東京市芝區露月町十八番地

印刷者

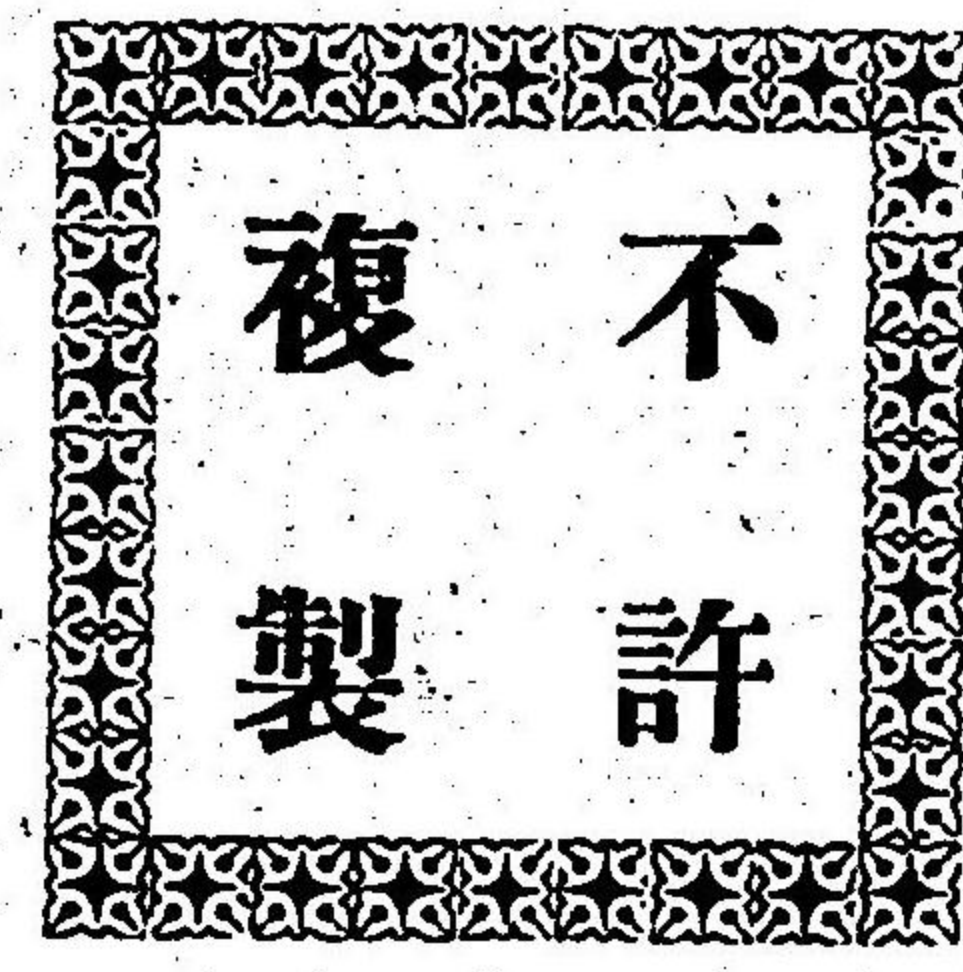
佐久間 衡治

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地



發行所

東京市芝區露月町十八番地
電話新橋三千二十七番

鴻

盟

社

鴻盟社發行略書目

永平寺貫首性海慈船禪師題字
總持寺前貫首性雲普蓋禪師題字
總持寺現貫首西有稷山禪師校訂並題字故藏海和尚著

第三版
正法眼藏私記會本
冊二全

上等舶來洋紙摺總クローリス金文字入二千餘頁定價
金五圓郵稅金三十四錢

「正法眼藏」は高祖大師の暖皮肉にして洞宗唯一の寶典
なれば、苟くも洞門に生を享けたる者必ず之を繙かざ
るべからず、然れども、字句甚だ難解にして宗意の見
難きもの少からず、後進の士多くは半途にして挫折す
然るに、藏海和尚著けし所の「眼藏私記」は簡明に宗
意を呈露して自在に字句を解釋し、「眼藏の講義」と稱
するも亦不可ならず、本社往年西有稷山老師の嚴密な
法眼藏私記會本と名け、暫く洞宗各位の便に供せし「正
美麗な洋装」となし發賣す、希くは祖門の龍象
勅賜黄泉無着和尚著

正法眼藏涉典續貂

正價金參圓 郵稅廿四錢

全六冊
木版大半
紙本紙數
七十三張

正法眼藏は其名の詮する如く高尙玄妙にして典據豐腴
なり學徒往々望洋の思を懐く面山老師之を讀み享保年
間於て正法眼藏涉典を撰し萬一巻を著はし一千有餘事の
典實を蒐め却て學徒に便す萬一巻を著はし一千有餘事の
和尙復た一字を著はし五百餘事を補ひて其遺を補ひ老卵
師亦た那と雖も猶ほ二十餘事を補ひて其遺を補ひ老卵
事なる黄泉和尙其遺漏六千餘事を補ひて其遺を補ひ老卵
内外の典籍を採り其遺漏六千餘事を補ひて其遺を補ひ老卵
行せられ大に學徒の資料を助けたるも不幸にして後年
祝融の災に出版す異ならず今般西有老師の勸發により弊
社に於て出版す異ならず今般西有老師の勸發により弊
不便の間に出版す異ならず今般西有老師の勸發により弊
祖恩の罔極に酬ひ玉はんことを

正法
眼藏
關邪語
梯
合本

定價金參拾五錢
郵稅金四錢

和語梯は、萬端和尙正法眼藏を拜覽するに當り和語の
解し難きものを叮嚀に檢討して典實を質し語勢を識別
し初心の爲めに集解せられたるもの又關邪語は面山和
尙が眼藏拜覽者の爲めに集解せられたるもの又關邪語は面山和
尙が眼藏拜覽者の爲めに集解せられたるもの又關邪語は面山和
れば斯學の泰斗たる稷山禪師に乞うて其校訂を経たる
ものなり。

正法眼藏

定價金拾貳錢 郵税金貳錢

本和冊壹全

正法眼藏行事卷

定價金貳拾五錢 郵税金四錢

本和冊壹全

正法眼藏出家功德卷

定價金拾貳錢 郵税金貳錢

本和冊壹全

重編曹洞五位顯訣

定價金參拾錢 郵税金四錢

本和冊壹全

上洞法眼格正

定價金參拾五錢 郵税金貳錢

本和冊壹全

正法眼藏辨道話卷私記會本

定價金拾貳錢 郵税金貳錢

本和冊壹全

不能語履歷攝頌

定價金拾錢 郵税金貳錢

本和冊壹全

洞山五位說

定價金拾五錢 郵税金貳錢

本和冊壹全

佛祖禪戒篇

定價金拾五錢 郵税金四錢

本和冊壹全

冠導永平學道用心集

定價金貳拾五錢 郵税金四錢

本和冊壹全

堀口周道老師提唱侍者筆記

信心銘夜塘水講義

冊壹全

洋裝美本定價金七十錢郵税金六錢

「信心銘」は曹洞宗の宗乘を知らんとする者の是非再讀三讀を要する寶典にして、之に拈古、拈提を加ふれば、實に洞上の玄風は此一巻にて明らめ得るものと云ふべし、殊に、其の宗乘を講解せる畫龍和尚の「夜塘水」は、初心の者に對して一層明かに説明の勞を取られたるものにて、中學林等の教課書には尤も適當せるものなり、今や堀口周道老師門弟子に對し得意の辯を以て「夜塘水」を拈提せられ、自在に洞上の宗乘を解説し、初心の者にも合點のゆくやうに講義せられ、充分訂正を加へて之を公刊せらる、蓋し曹洞宗宗乘研究の一寶典として、中學林、認可僧堂等の學生諸氏の好參考たらん、冀くは續々御購求あらんとぞ、

大内青嶽居士講述

普勸坐禪義筌要

全壹冊

定價金十二錢 郵税金二錢

大内青嶽居士著

訂正三版禪學三二要

定價金廿四錢

禪學三二要とは、參同契、寶鏡三昧、洞上五位、研究の便に集めたるものにて、大内青嶽居士が、世の禪門の眞彩を發揚して餘蘊なく、其の流暢の筆は、巧みに得る者にて、本書を一讀すれば、直に禪風の一斑を解得るを得べし、故に本書出版以來非常の好評を博し、初版再版既に盡きて、世の需要に背くと久し、本社之を慨し、今回居士に懇請して訂正を經、三版に附したれば、世の禪門に志ある者及び、禪門學林の生徒諸君達は一本書を購ひて此旨の趣ならざることを知り給へ

大内青嶽居士著

謠曲禪話

定價金廿錢

一休禪師の作られたる「山姥」の一曲は、禪門文學中の精華として、遠く世の推す所なりき、然れども、字義甚だ易からず、世人時々其の解釋に迷へるものあり、依て今回、大内老居士、自ら健筆を揮ふて、此の一曲を講解し、禪門文學家の地位に立ちて、精細に之を提唱せられたれば、本書を一讀すれば、直に文學の滋味を味ふの側、禪門の立旨に到達するを得て、趣味極めて多からん、希くは江湖の各位、購求あれ、巻中の文字と相待つて光彩を放てり

曹洞宗 修證義 教講錄

定價金壹圓 郵税金八錢

本洋 冊壹全

曹洞 修證義 聞解

定價金二十錢 郵税金四錢

本洋 冊壹全

曹洞 修證義 筌諦

定價金十二錢 郵税金二錢

本洋 冊壹全

天 いろはの義解

定價金十二錢 郵税金二錢

本和 冊壹全

西國三十三 所觀音靈場 御詠歌說教

定價金五十錢 郵税金六錢

本洋 冊壹全

現行 曹洞宗制規大全

定價金五十錢 郵税金十錢

冊壹全

曹洞宗 々々 制

定價金十八錢 郵税金二錢

冊壹全

明治三 十一年 普 達 全 書

定價金八錢 郵税金二錢

冊壹全

明治三 十二年 普 達 全 書

定價金卅錢 郵税金四錢

冊壹全

明治三 十三年 普 達 全 書

定價金十五錢 郵税金二錢

冊壹全

明治三 十四年 普 達 全 書

定價金二十五錢 郵税金六錢

冊壹全

曹洞宗 改定學則

定價金十五錢 郵税金二錢

冊壹全

●禪學者唯一の良書●

新 彫 荒田隨筆

故指月禪師遺著
右は曹洞宗中の文藝者として知られたる指月禪師の名著にして、宗乘の大意を提唱し、上下二巻の中、曹洞の宗風を説き盡して、宗乘の行止を指示し、流布せざるものなかりし其書なり。然るに一時版木を撰じたるが爲め、志士の常に敬慕する所なりき。出版せんとし、同人某師に就いて其の珍貴なる校訂を加へられたるを以て、新に木版に翻刻し、完全無誤なる書となし、純粋の日本紙を以て印刷し、庶幾年々、宗乘研究の上、花の水を得たる思あらん。其の苦衷を諒して、宗乘研究の上、花の水を得たる思あらん。

西有禪師著

洞上五位說講義

定價金十二錢 郵税金二錢

冊壹全

鷲尾順敬師著

禪宗史要

定價金十五錢 郵税金二錢

冊壹全

大本山永平寺藏版

永平寺眞景

菊判大和総願美本 定價金五十錢 郵税金五錢

本圖は今回の勅額を始め法堂佛殿僧堂勅使門等山内の諸堂宇廿有餘及び欄間の彫刻永平寺全景等を寫真版としそれに一々叮嚀に説明を與へたるものなれば一部の大本山永平寺史と云ふも過言にあらざる道俗檀信の諸士一本を購求あらんことと

問答二百則法門百則

禪學活問答

袖珍美本紙數三頁 定價金十二錢 郵税金四錢

近來禪學に關する書籍類に出づと雖も、多くは一場の空談にして、古徳の眞意を傳へ禪風の實相を解せしむるもの少し、本書は今人の座談に非ずして、古來の「問答」なるものを活用したるもの故、一讀の下、古人が生命を賭して禪機と争ひたる實況と目撃する想ひあり

文序生先精專上村士博學文

集論講教佛 博士 村上

寫真石版肖像入 ● 第一輯全書 目次 (卷中)

- 第一部 論文
- 未來二十世紀間に於ける宗教觀 ● 佛教は其の理論にある乎將た實際にある乎 ● 佛教中心地の移動 ● 釋迦牟尼佛出生入滅の年代考 ● 釋迦牟尼佛の出家並に成道の年輪考 ● 釋尊の出世は果して日本紀元前なるか ● 瀧佛會并に行儀式の古事 ● 釋迦世尊 ● 釋迦太子の究を ● 佛教研究法に對する諸見 ● 歴史的三論佛敎 ● 佛教我觀論 ● 外道論 ● 道元禪師を懷ふ
 - 第二部 講義
 - 佛教概論 ● 因果理法論 ● 性善惡論 ● 佛教倫理學一斑 ● 佛教東漸史
 - 第三部 演說
 - 理想佛と事實佛 ● 人道の實踐法に就て ● 佛教の大意 ● 歴史上の釋迦佛 ● 佛教の過去及び將來 ● 佛教道徳の要領 ● 宗教と學術 ● 教育と宗教 ● 龍樹菩薩 ● 南無六字 ● 佛と念佛との異同 ● 佛陀の出家 ● 人性觀 ● 廢物利用 ● 予が人生觀

本書は村上博士が年來有志の請に應じ、又は神佛の招きに應じて想界の一滴を滴されたものにして、未だ世に顯はれざるもの若くは既に公にせられたるものは更に嚴密の校訂を加へて纂集したる者な **親しく講帷りて示教** したるものなり。博士が **佛教研究上** に対する **態度** 及び **方針** を知ることを得、**佛教大綱** を **領解** することを得るや必せり、蓋し先きに博士の大家を讀んで奔走する **教界** 及び **學界** の **風雲漸く** **頻繁** ならんとす本第一 **た靈界の斗星光芒** して夫れ **教界の迷夢** を打破することを得べき乎は上記の如し

各宗諸大家述

佛敎各宗綱要

全一冊 定價金圓五十錢 郵税金十四錢

來馬塚道師著

各宗高僧傳

全一冊 定價金圓五十錢 郵税金十四錢

境野哲先生著

佛敎史要

日本總文庫 全一冊 定價金圓四十錢 郵税金十錢

天台宗綱要

全一冊 定價金二十二錢 郵税金二錢

淨土宗綱要

全一冊 定價金二十二錢 郵税金二錢

眞宗綱要

全一冊 定價金二十二錢 郵税金二錢

日蓮宗綱要

全一冊 定價金二十二錢 郵税金二錢

- 佛教名家演說集 全一冊 定價金三圓
- 全續篇 全一冊 定價金三圓
- 佛敎講習錄 全一冊 定價金四圓
- 空華談叢集 全一冊 定價金三圓
- 譬喻因緣集 全一冊 定價金三圓
- 基督教徒と佛教 全一冊 定價金三圓
- 洒落文庫 全一冊 定價金三圓
- 國體叢書 全一冊 定價金三圓
- 國宗敎大會一覽 全一冊 定價金四圓
- 佛敎大意 全一冊 定價金五圓
- 三國歷史疑問答案 全一冊 定價金五圓
- 若國十傑傳 全一冊 定價金五圓
- 海舟遺稿 全一冊 定價金三圓
- 科學的宗教 全一冊 定價金三圓
- 佛敎哲學 全一冊 定價金三圓
- 說佛偈講話 全一冊 定價金六圓

支那寂照和尚撰

再版 佛教大藏法數
全二冊

(原本七十卷)總テロス金文字入洋裝類本
前刊千六百餘頁正價金四圓郵稅金三十四錢

難解にして、難入なる佛教を學ばんと欲せば、完全なる佛敎辭典なかる可からず、然れども古來佛者の用ひ來りし「諸乘法數」一類譯名彙集の如きものは、僅に其の標目を掲げ、若くは一部分の解釋をなしたるものにし、大藏法數は寂照和尚が勸に依つて内外兩典を此のに詳細なる註釋を加へたるものにして、字數凡そ一萬餘、皆な親切なる訓點、句讀、送假名を加へるべからざるものなり、佛敎家の座右には是非一本を備へざるべからざるものなり、然るに此書原本既に乏しく、印刷の年々多きを加ふ、弊社此に慨あり、遂に一年二月を以て本書の縮刷を企て、或は妨害者の爲に意の外に二月を以て、千辛萬苦を重ねて嚴密の校訂を加へ、第二版を発行す、冀くは世の哲學、宗教等の研究に從ふ諸賢、宗學者、學生諸賢奮つて購求の上本書の眞價を知り給ふものとす。

子爵渡邊國武先生著

再版 禪機と哲學

全一冊 定價金十五錢
郵稅金二錢

無邊俠禪渡邊國武先生曩に、自得底の眼識を以て「禪機と哲學」の著あるや學海の波瀾爲めに、高く、紛々たる僞禪者をして亦顔色なからしめたり、茲に於てか本書世に布く數千、而かも版絶きて江湖の需に背くや久し、先生今や歐米漫遊の行を終りて朝に飯らる、國民が先生に期待する所は實に今日以後にある也、而して本書再版茲に成りて世に出づ、冀くは愛讀の榮を賜へ。

大内青樹居士著

佛敎倫理 六方禮經講話

全一冊 定價金十五錢
郵稅金二錢

西有禪師提唱

禪戒訓蒙

全一冊 定價金二十錢
郵稅金四錢

美洋本裝

經文

上製全二冊
並製全一冊

上製(金網裝紙) 定價金壹圓拾五錢 郵稅金八錢
並製(紙裝紙) 定價金八拾五錢 郵稅金六錢
右は曹洞宗門に於ける日課又は法要等に關する諸經本類編し外に諸經からざる者も記入しあれば洞上の在家出家を問はず左右に欠くべからざる也。
● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢
● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢
● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢
● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢
● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢
● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢 ● 經分持四分 定價金拾八錢

曹洞教會修證義

定價金十五錢 郵稅金二錢

全一冊 (本大)

曹洞教會修證義

定價金四錢 郵稅金貳錢

全一冊 (本小)

曹洞宗日課禮誦法

定價金八錢 郵稅金貳錢

全一冊

● 其他各種販賣仕候 ●

修養清話

全一冊 定價金五錢 郵稅金四錢

生死の問題を決定して勝力を修練し、人生を樂觀して精神を陶冶するに足る英雄傑士の美談高僧大德の逸話、流麗雅興の筆を以て叙述したる好冊、子なれば之を修養の案牘世の鏡として天下の青年に捧ぐ。

婦女修養

全一冊 定價金五錢 郵稅金四錢

本書は婦女の修養に資せんが爲に古今聖賢の英談を採りて興味ある筆を以て家政育兒の事より茶湯生花歌舞道に關する心得までを叮嚀に叙述したる者なれば之を修養の案牘世の鏡として天下の姉妹に捧ぐ。

曹洞宗唯一の布教雑誌

改新 護法

（毎月一回十日發行）

定價金壹部金七錢〇郵税五厘半々年前金四十二錢
〇一ヶ年前金八十錢

兩大本山貫首親下の垂示あり各布教師の模範説教あり
各大家の講演あり而して本誌の編輯は大内青樹居士之
を監視せらる以て本誌の價值如何を知るべきなり

東京芝區露月町十八番地

發行所 鴻盟社

通俗的佛教雑誌

傳道

（毎月一回十日發行）

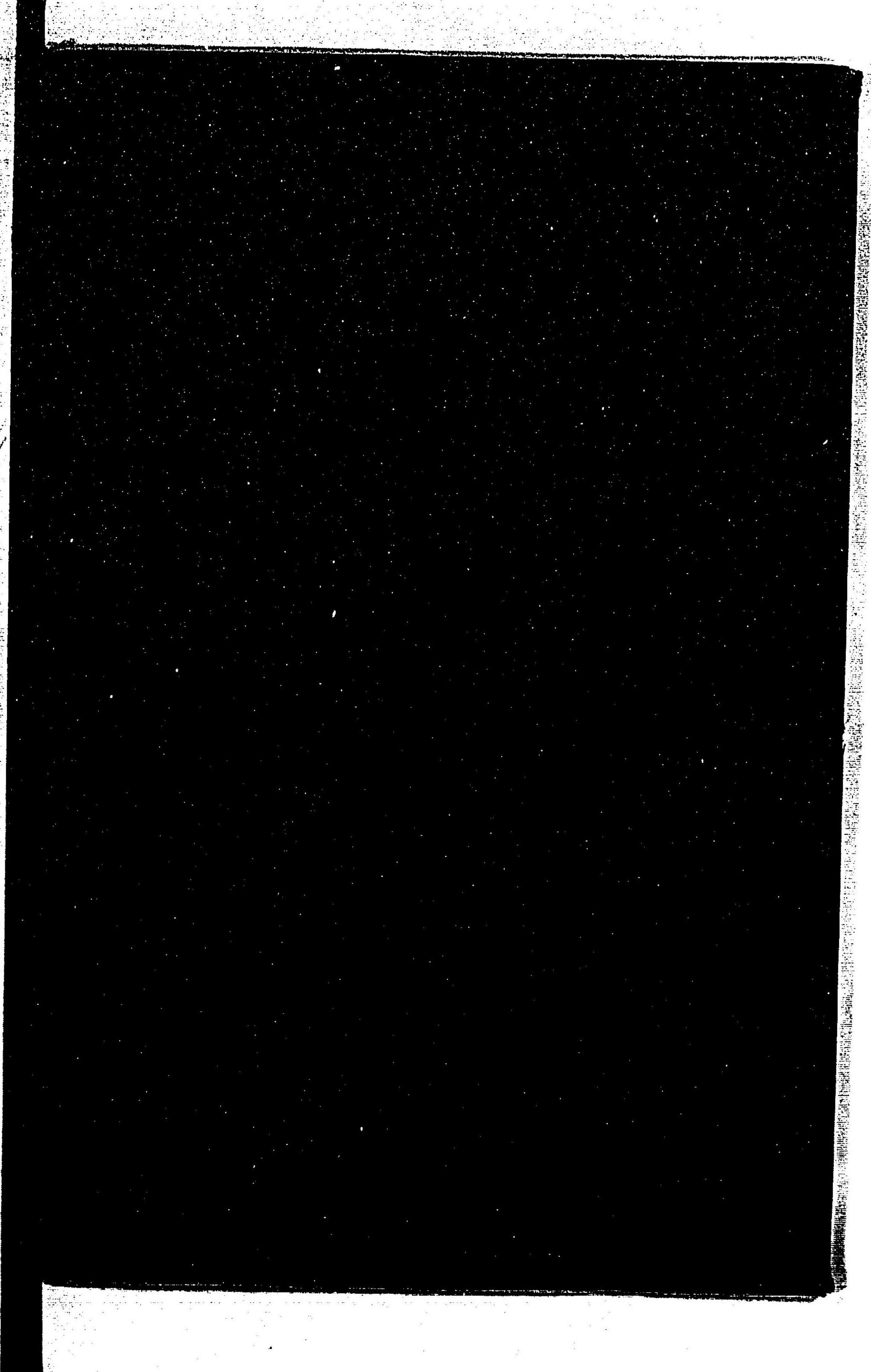
定價金壹部金一錢五厘郵税五厘半々年前金十二錢一
ヶ年前金廿四錢

釋尊の跡を以て通佛教の教義を説きまゝ大家の講演を
載せて健全なる信念を培養せしむれば宗派の異同を
問はず老若を論せず何人にも了解し易き佛教信者の衆
なり

東京芝區露月町十八番地

發行所 鴻盟社

376
90



316
90

019691-000-4

316-90

曹洞宗説教大全

加藤 咄堂/著

M35.12

ABG-0485



